

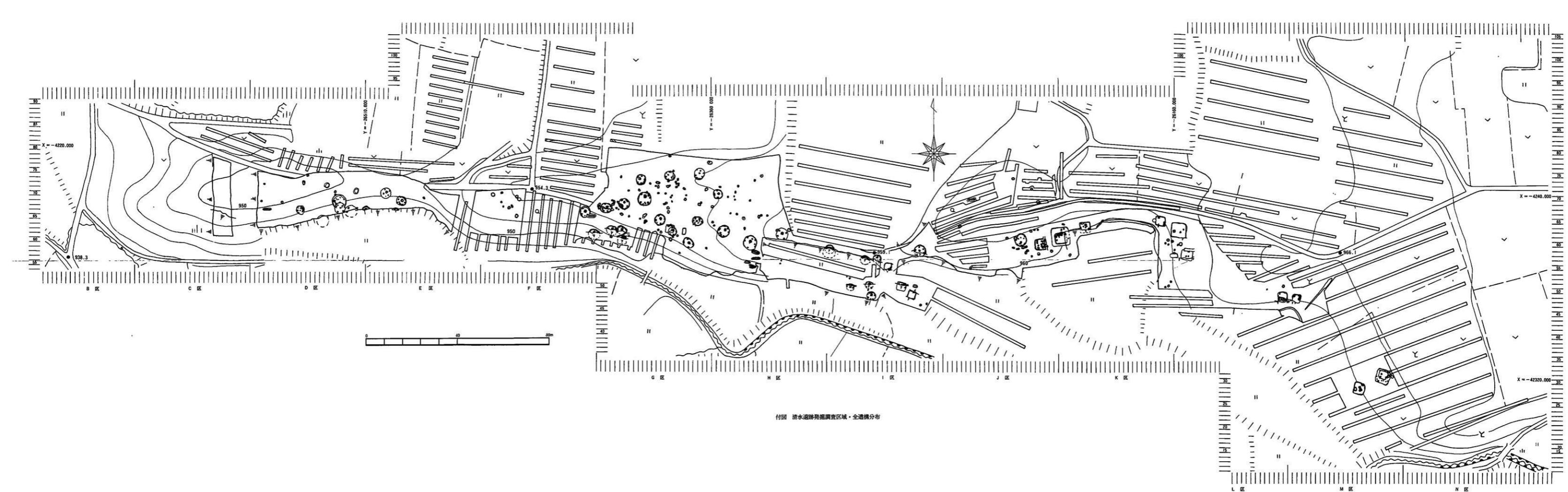
清水遺跡

平成8年度県営ほ場整備事業原村西部

地区及び県営担い手育成基盤整備事業
払沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1997.3

長野県原村教育委員会



清水遺跡

平成8年度県営ほ場整備事業原村西部
地区及び県営担い手育成基盤整備事業
払沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書

1997.3

長野県原村教育委員会

表紙地図10,000分の1 ○印が清水遺跡

序

このたび平成8年度の清水遺跡の発掘調査報告書を刊行することとなりました。

発掘調査は「県営圃場整備事業原村西部地区」ならびに「県営担い手育成基盤整備事業払沢地区」に先立って、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付を受けて原村教育委員会が実施したものであります。

清水遺跡は、繩文時代中期と平安時代後期の複合遺跡でありました。繩文時代の集落跡は比較的小規模なものでありましたが、全容を把握することができました。また、平安時代は当地方における典型的な集落形態を示しております。したがって、両時代とも、その集落研究に貴重な資料を提示することができたものと思っています。

このたびの発掘にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々のご配慮、長野県教育委員会のご指導、長野県埋蔵文化財センターをはじめ発掘にかかわる多くの皆様のご協力に深甚なる謝意を表す次第であります。

発掘現場では、長野県埋蔵文化財センター 調査研究員 澤谷昌英氏の多大のご助力により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいし厚くお礼申しあげます。

平成9年3月

原村教育委員会
教育長 大館 宏

例　　言

- 1 本報告は「平成8年度県営ほ場整備事業原村西部地区および県営担い手育成基盤整備事業払沢地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木・払沢両地区にまたがって所在する清水遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費からの発掘調査補助金交付を受けた原村教育委員会が平成8年7月25日から12月27日にかけて実施した。
- 3 遺構の実測は久根種則・小林りえ・坂本ちづる・進藤郁代・津金喜美子・林史子・澤谷昌英が行った。
- 4 遺構・調査区の単点測量と航空写真は株式会社こうそくに委託実施した。
- 5 遺構の写真撮影は石川美樹・澤谷が行った。
- 6 石器の実測は株式会社シン技術コンサルに30点を委託し、これら以外を澤谷が行った。
- 7 土器の復原は朝日治郎・久根・小林・坂本・清水正進・進藤・津金・林・石川・澤谷が行った。
- 8 繩文時代の土器の実測は株式会社シン技術コンサルに58点を委託し、一部を澤谷が行った。
- 9 平安時代の土器の実測は田中正治郎と澤谷が行った。
- 10 遺構のトレースは朝日・小林・坂本・進藤・津金・林・石川・澤谷が行った。
- 11 遺物のトレースはシン技術コンサルが繩文土器26点、石器30点を行い、これら以外を朝日・小林・坂本・進藤・津金・林・澤谷が行った。
- 12 土器片の拓本は澤谷が行った。
- 13 遺物の写真は株式会社シン技術コンサルが写真実測のために撮ったものを使用し、一部は石川が撮影したものを使用した。
- 14 石器の一覧表は大竹憲昭・谷和隆・澤谷が、復原掲載土器一覧表・小竪穴一覧表は石川が作成した。
- 15 本書の執筆は、I-1・2、II-1・2、VI-1-(1) および2-(1) の第1~10号住居跡を石川、I-3、III~V、石川執筆分以外のVIを澤谷、VIIを澤谷・石川が行った。
- 16 本書の編集・校正は石川・澤谷が行った。
- 17 本報告に係わる出土遺物・諸記録は原村教育委員会が所蔵・保管している。
発掘調査から報告書作成にわたって、大竹憲昭・谷和隆・田中正治郎・徳永哲秀の4氏には多大な御協力を頂いた。また上田典男・河西清光・小林俊一・櫻井秀雄・鶴田典昭・土屋積・寺内隆夫・鳥羽英継・原明芳・平林彰・廣瀬昭弘・町田勝則・三上徹也・三村肇・武藤雄六・百瀬長秀・横田作重の諸氏に御指導・御助言・御協力いただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

凡 例

1. 遺構実測図について

- (1) 壁と底部との区別が不明瞭な遺構についても敢えて下端（したば）を表現した。
- (2) 切り合い表現は破線と実線とで区別し、破線の遺構が実線の遺構を切る。
- (3) 平面・断面図の一点鎖線は推定線を表す。
- (4) 平面図の二点鎖線は貼り床の範囲を表す。
- (5) 平面・断面図のドット集合部分は焼土の広がりを表す。平面図でこれを実線で囲んでいる場合、縄文住居跡では地床炉、平安住居跡ではカマド火床および地床炉を表す。
- (6) 断面図で斜線のスクリーントーンにより遺構内外を区別した。埋甕の埋設掘り形内にはこのトーンを貼っていないが、ピット内土器ではない。
- (7) 断面図の土層注記は以下のように記号化してある。

I ……黒色土、II A ……黒褐色土、II B ……暗褐色土、III ……ローム

n ……炭化物および焼土、o ……疊、a ……少量～微量含有、b ……多量含有

例：II B (III b, n a) は、暗褐色土（ローム多量含有、炭化物少量～微量含有）

* I・II・IIIは基本層序に対応している。

* aは含有率20%未満、bは含有率20%以上としたが、一部には遺構内の相対的な比較によるものもある。

*掲載できなかったが、原図では含有物の径 (ϕ)、含有率%、粘性の有無、締まりの良否も記録してある。

*土層の色調、含有物のパーセンテージは、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』をもとに調査担当者が肉眼で選定した。

2. 遺物実測図について

- (1) 石器の平面図の斜線部分は研磨ありを示す。
- (2) 平安時代の土器で、断面を塗りつぶしたものは須恵器、断面に粗い網点を入れたものは灰釉陶器、内面に細かい網点を入れたものは黒色処理を表す。
- (3) 掲載番号は、縄文時代の土器・縄文土器片拓本が1～151、石器が1～57、平安時代の土器が1～77の通し番号とした。これらはすべて文章・遺構平面図・遺物実測図・表の番号と共通する。なお遺構平面図中で石器は、番号にSを冠して土器と区別した。

3. 用語について

- (1) 遺構の「ほりかた」は「掘り方」ではなく「掘り形」とした。
- (2) 「おとしあな」は「陥し穴」ではなく「落とし穴」とした。
- (3) 従来「ロームマウンド」と称されているものは、「倒木痕」とした。
- (4) 平安時代の土器の器種名は（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書4『松本平総論編』に準拠した。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

I	発掘調査の経過	1
1	発掘調査に至る経過	1
2	調査組織	1
3	発掘調査の経過	2
II	遺跡の位置と周辺の遺跡	5
1	遺跡の位置と立地	5
2	遺跡周辺の遺跡	6
III	調査方法	6
IV	遺跡の基本層序	9
V	調査の概要	10
VI	遺構と遺物	17
1	縄文時代	17
(1)	住居跡と竪穴状遺構	17
(2)	小竪穴	53
(3)	遺構外の遺物	58
2	平安時代	86
(1)	住居跡と竪穴状遺構	86
(2)	小竪穴	105
VII	まとめ	115

参考文献
写真図版
報告書抄録

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

農業人口の減少と高齢化は全国的に見ることのできる問題であり、この原村も例外ではない。それに加え、1993年の世界的な合意による農作物輸入の自由化によって、生産コストの安い海外の農作物が大量に出回ってきている。農業戸数がおよそ5割以上に達する原村では、次世代のことを考えれば農業機械の大型化による農業経営の効率化・強化は、生き残りのための必須条件である。基盤整備はどうしても避けることができない。そのための基盤整備事業である。「県営ほ場整備事業原村西部地区」は、原村の柏木・菖蒲沢・室内の3地区にまたがって計画されている。地区内には国の史跡である阿久遺跡を筆頭に、大小様々な遺跡が集中している。それらの保護については以前より声高に呼ばれてきたのだが、原村の農業従事者の強い要望により緊急発掘調査も止むなしとされるようになった。

清水遺跡については、長野県教育委員会が昭和54年度に行った八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査で発見されているがその性格は不明瞭であった。しかし、平成7年度に実施された大規模開発事業地内遺跡詳細分布調査により、縄文時代中期と平安時代後期の資料が採集されたことから複合遺跡であることが分かった。また從来考えられていたよりも遺跡の面積が広範囲であることも確認された。

調査の結果、清水遺跡は面積的にみると、県営ほ場整備事業原村西部地区から県営担い手育成基盤整備事業払沢地区内に括がっていることが予測された。そこで本来平成8年度に予定されていた県営ほ場整備事業原村西部地区に先立つ発掘調査は、県営担い手育成基盤整備事業払沢地区的範囲も含めて実施することが長野県教育委員会文化財保護課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者で合意された。原村教育委員会では、国庫および県費からの発掘調査補助金交付を受け、また諏訪地方事務所より緊急発掘の委託を受け、平成8年7月25日から12月27日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2 調査組織

清水遺跡発掘調査団名簿

団長 大館 宏（原村教育委員会教育長）

調査担当者 石川 美樹

調査員 澤谷 昌英

発掘調査参加者 秋山 洋一 朝日 治郎 鎌倉きふみ 吉川 幸子 久根 稔則
小池 英男 小池 稔 小池 芳久 小林 多美 小林 ミサ
小林 りえ 小平 貴英 小松 弘 五味八代江 坂本ちづる
清水 太助 清水としみ 清水 正進 清水 洋介 進藤 郁代
田中 初一 津金喜美子 中村きみゑ 西沢 寛人 野明 義央
林 史子 日達今朝江 宮坂けん子 宮坂とし子 森山 潤司
整理作業参加者 朝日 治郎 久根 稔則 小林 りえ 坂本ちづる 清水 正進
進藤 郁代 津金喜美子 林 史子
事務局 原村教育委員会 中村 正英(教育次長) 大口美代子(庶務係長)
伊藤 佳江 平出 一治(文化財係長) 平林とし美 石川 美樹
澤谷 昌英(県派遣主事)

3 発掘調査の経過

平成8年7月25日 発掘準備を始める。

- 8月6日 D・E区南斜面に重機で先行トレンチを掘削する。
- 7日 機材の搬入を行う。
- 8日 機材の搬入を終える。重機による先行トレンチ掘削をF区南斜面で開始する。D区からトレンチ精査をはじめる。
- 12日 重機でG・H区南斜面の面剥ぎをし、遺構の検出作業をはじめる。
- 19日 G区南斜面で重機による先行トレンチ掘削をはじめる。落ち込みを確認する。
- 20日 D～G区の面剥ぎ範囲を確定。F区東端で初めて竪穴住居跡1軒を検出する。
- 22日 C区東端の西斜面で面剥ぎを行うが、煙地造成でローム層深くまで原地形が破壊されているのを確認。C区北斜面で重機による先行トレンチを掘削する。
- 23日 D・E区北斜面で重機による先行トレンチ掘削をはじめる。
- 26日 F区北斜面で重機による先行トレンチ掘削をする。
- 27日 雨の中、重機でG・H区尾根平坦部の表土剥ぎをはじめる。遺物・竪穴住居跡ともに目立つ。
- 30日 前日までの雨のため、4日振りに尾根平坦部の遺構検出作業をする。
- 9月6日 検出した竪穴住居跡の累計が18となる。
- 7日 G・H区の農道下を検出面まで重機で剝ぐ。
- 13日 検出した住居跡の累計が23となる。
- 17日 D・E区南斜面の面剥ぎを開始。
- 19日 株式会社こうそくに委託して、面剥ぎをしたG・H区にグリッド杭とベンチ

- マークを打設する。
- 20日 遺構番号登録をし、第1～9号住居跡から検出状況写真を撮影する。G・H区で包含層の遺物をグリッド上げする。
- 24日 小豊穴群の検出状況写真の撮影をはじめる。
- 25日 検出状況写真の撮影を終える。
- 27日 小豊穴群の精査をはじめる。
- 10月4日 大方の小豊穴を完掘し終え、平安住居跡第8・22・30号の調査をはじめる。落とし穴4基の断面写真を撮る。
- 7日 小豊穴群の平面図を実測開始。繩文住居跡第1・4・8号の調査をはじめる。
- 9日 第7・10～13・15号住居跡の調査をはじめる。第4・9～12号住居跡の断面観察を行い、写真を撮る。
- 11日 第16・19号住居跡の調査に入る。
- 15日 第5・17・18・22・26・30号住居跡の調査をはじめる。
- 16日 第22・23・27号住居跡を調査をはじめる。小豊穴群の平面図を実測し終える。
- 17日 第24・25号住居跡の調査をはじめる。
- 18日 第28・29号住居跡の調査を開始。J・K区で先行トレンチを重機で掘削する。
- 21日 K・L区で重機による先行トレンチ掘削を開始する。
- 22日 L・M・N区で重機により先行トレンチを掘削する。住居跡群の調査がピークとなり、同時に21軒をすすめる。
- 24日 K区の先行トレンチを重機で掘削し、K～M区トレンチ内の遺構検出に入る。
- 25日 第5・7～9号住居跡の調査をほぼ終了する。
- 30日 第1・11～13号住居跡の調査をほぼ終える。
- 31日 航空写真撮影の準備をし、撮影をする。単点測量273点を実施する。K区南斜面の表土剥ぎを重機により行う。
- 11月1日 雨天。重機によりL区南斜面で表土剥ぎをはじめる。
- 5日 第23号住居跡の調査をほぼ終える。重機による表土剥ぎをM区でも行う。払沢地区の遺構検出作業がK区より本格化する。
- 6日 第3・18・27号住居跡の調査をほぼ終了する。M区の先行トレンチのうち住居跡の当たった部分を面的に拡げる。
- 7日 テントをF区からL区へ移す。
- 8日 農道以北のJ・K区で、未収穫の畑を避けて先行トレンチを重機で掘削する。
- 11日 J区の表土剥ぎを重機によりはじめる。
- 12日 第16・21・22・28号住居跡の調査をほぼ終了する。
- 13日 第26号住居跡の調査をほぼ終了する。第21号住居跡の埋甕の埋設状況を調査

- する。第24号住居跡の埋甕を図化し、埋設土器を取り上げる。
- 15日 第19・21号住居跡の埋甕の埋設状況を調査し、図と写真を撮って取り上げる。
I 区南斜面で重機により表土剥ぎをはじめる。
- 16日 重機でH・I区の水田下に先行トレンチを切りはじめる。北側ほど深く、原地形が北斜面であったことが分かる。
- 18日 第10・13号住居跡の埋甕の調査を行い、取り上げる。
- 19日 第16号住居跡の埋甕を断面観察する。H・I区農道下から31～33号住居跡が烟の造成により南北を失った形で検出される。
- 21日 H区以西の28軒の竪穴住居跡のダメ押しをする。第3・25・28号住居跡床下から検出されたピットを掘り下げ、断面図を追加する。I区において縄文・平安ともに漆黒色の腐植土中に住居跡を検出する。
- 22日 山林だったJ区の尾根頂部から北斜面にかけてと、J・K区の農道下に重機でトレンチを切り、遺構の有無を確認する。第31号住居跡以降、小豎穴119以降の遺構番号を登録し、第31～51号住居跡の検出状況写真を撮影する。
- 23日 H・I区の南急斜面の表土剥ぎを重機で行う。最後まで重機を投入できなかったK・L区の烟にトレンチを入れる。
- 25日 遺構検出作業をすべて終える。第31～33・51・52号住居跡の調査をはじめる。
- 26日 第34・35号住居跡の調査を開始する。
- 28日 第36～39号住居跡の調査に入る。
- 29日 面的に表土剥ぎを行ったI～M区に株式会社こうそくがグリッド杭とベンチマークを打設する。第51・52号住居跡の調査を終了する。
- 12月3日 第40・43～45号住居跡の調査を始める。第31・32号住居跡の調査を終了する。
小豎穴119以降の調査を開始し、断面図・断面写真・完掘写真を順次とる。
- 6日 第34号住居跡の調査を終える。小豎穴群の平面実測をはじめる。
- 9日 第35号住居跡の調査を終える。
- 10日 第46・47号住居跡の調査をはじめる。
- 12日 第48号住居跡の調査にかかる。
- 13日 第33・36・38・43・45号住居跡の調査を完了する。第50・54号住居跡の調査をはじめる。
- 16日 第37・46号住居跡の調査を終える。大方の小豎穴群の調査を完了する。
- 18日 第40号住居跡の調査を終了する。
- 19日 第41号住居跡の調査をはじめる。
- 20日 第48号住居跡の調査を完了する。
- 24日 準備をし、H～N区の航空写真を撮影する。単点測量270点を実施する。

- 25日 第41・42・47号住居跡の調査を終える。単点測量残り90点を終了する。テントを撤収し、機材を洗浄して収蔵庫へ収納する。
- 26日 第44号住居跡の調査を完了する。
- 27日 第49・50・54号住居跡の調査を終える。第35号住居跡の埋甕を半裁し、断面図・断面写真をとってから取り上げを行い、遺跡のすべての調査を完了する。

II 遺跡の位置と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と立地

『原村誌上巻』によると

(2) 清水遺跡(柏木)

柏木区の東南方に位置する遺跡で、縄文時代中期の曾利式土器破片と、打製石斧の良品と破損品、凹石が発見されている。遺物の散布範囲は狭い上に少ない。

とある。

原村は長野県の中央から東寄りに位置し、八ヶ岳火山列の西斜面に東西に細長く広がっている。標高は840mから、阿弥陀岳山頂の2,806mの間にある。

原村の地形は、八ヶ岳の地形に沿って東から西に流れる川によって侵食され、造られた尾根が幾筋も発達している。原村に所在する縄文時代の遺跡のほとんどはこれらの尾根を利用し、構築されている。

清水遺跡の位置は行政的に見ると、原村の中心よりやや西側に寄り、西は柏木地区の南東側に、東は払沢地区の西側にある。東経は138度12分41秒で、北緯は35度57分41秒である。標高は930~960mを測る。

清水遺跡の立地する尾根は、主に柏木区側に属する西側と、主に払沢区側に属する東側で尾根の様相が少々異なっている。西側は最も広い平坦部でも幅20mに満たない痩せ尾根で、東側は南



第1図 原村域の地形断面模式図(宮川—清水遺跡—赤岳ライン)

に緩やかに傾く斜面となっている。尾根の南側には、尾根に沿って大早川が流れている。

清水遺跡の西側は、瘦せ尾根という八ヶ岳西南麓における縄文時代の平均的な遺跡立地条件よりも少し悪いために、大規模な遺構群の出土は予測できず、それほど注目されていなかった。むしろ平成7年度に遺跡の規模拡大で確認された遺跡の東側が、南側緩斜面で典型的な陽だまり地形を持つことで、平安時代の住居跡群の埋没を予想させた。

2 遺跡周辺の遺跡

清水遺跡の存在する周辺は、八ヶ岳西南のほぼ中央にあたり、南より阿久川、大早川、小早川を主とする大小の川が流れ、付近には大小様々な縄文時代を中心とした遺跡が存在している（第2図、第1表）。遺跡の100mほど北側には道路拡幅工事の狭い範囲より縄文時代中期・後期の住居跡が69軒も見つかった前尾根遺跡（原村遺跡番号20）があり、大早川を挟んだすぐ南側には、縄文時代前期の貴重な遺構群が次々と見つかり、昭和54年7月2日に国の史跡に指定された阿久遺跡（原村遺跡番号11）と同じ尾根筋に立地している雁頭沢遺跡（原村遺跡番号53）が存在している。

III 調査方法

発掘調査の対象は、平成8年度県営圃場整備事業原村西部地区および平成8年度狙い手育成基盤整備事業払沢地区にかかる遺跡全域で、極めて広大な範囲である。両整備事業により遺跡全域が完全に消滅するため、從前から清水遺跡とされてきた西部地区のみならず、近年の踏査で平安時代の遺物が表面採集された払沢地区も対象となった。西部地区に縄文、払沢地区に平安の集落が包蔵されていることは予測されたが、過去に調査例がない遺跡で、それらがどのような拡がりをもつものか分からぬこと、範囲が広大且つ起伏に富むことから、グリッド方眼杭は遺構密度・遺物密度の粗密の状況に応じて局部的に打設し、粗の部分はトータル・ステーションで対処することを当初より考えた。

遺跡の性格が集落と予測されることから、竪穴住居跡を跨ぐことが無いよう、重機による先行トレーニチをそのパケット幅（1.2m）で遺跡全域について一定間隔で切り、遺構の検出状況に応じて面的に剥ぐこととした。このトレーニチの入れ方は、調査区が起伏に富むことから方角に無関係で、地形や耕作地の制約に応じて重機の操作し易さを考慮し、地形の等高線と平行又は垂直方向に入れた。面剥ぎ部分はローム上面を遺構検出面とした。

ここで問題となったのは、払沢地区の調査区には晚秋まで収穫期が続く農作物が占地した畠や

第2図 清水港の位置と周辺の道路(1:2000)

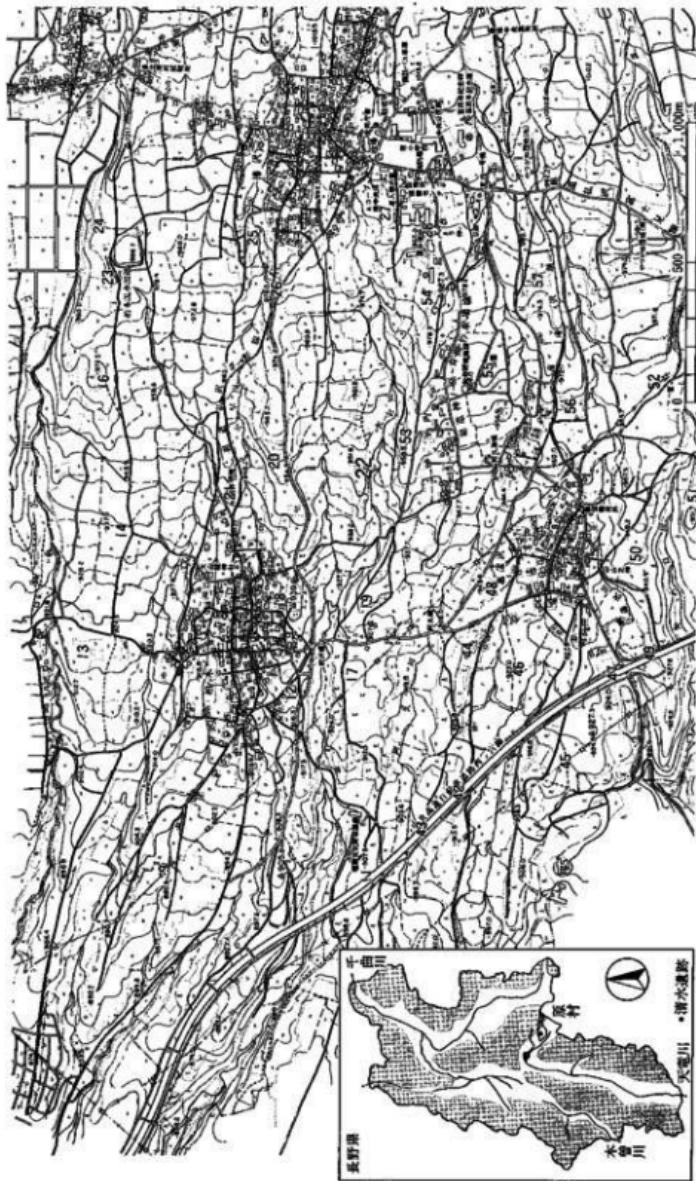


表1 清水遺跡と付近の遺跡一覧

番号	遺跡名	旧石器	縄文				弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考	
			草	早	前	中								
8	比丘尼原北			○						○				
9	比丘尼原			○						○				
10	柏木南	○		○	○					○				
11	河久		○	○	○	○				○				
12	前沢				○					○		○		昭和55・61年度発掘調査
13	長峰		○	○	○	○	○			○		○		平成3年度発掘調査 消滅
14	裏長峰	○	○	○	○					○		○		平成4年度発掘調査 消滅
15	程久保		○	○	○					○		○		平成4・5年度発掘調査、消滅
17	白ヶ原									○				昭和52年度発掘調査
18	前尾根			○										
19	南平				○									
20	前尾根				○	○				○		○		昭和44・52～54・59年度発掘調査
21	上居沢尾根				○	○				○		○		平成4年度発掘調査
22	清瀬水		○	○	○	○				○		○		平成8年度発掘調査 消滅
23	恩勝西	○	○	○	○	○				○		○		昭和62・平成5・6年度発掘調査
24	恩勝		○	○	○	○				○		○		昭和62年度詳細分布調査
25	裏尾根			○						○				平成8年度発掘調査
26	家下				○									昭和59年度発掘調査、平成5年度立会い
27	關廬沢				○					○				昭和62年度発掘調査
28	宮平													
29	向尾根			○	○					○		○		昭和50・54年度発掘調査
30	南尾根				○					○				
31	中尾根									○				
42	居沢尾根		○	○	○					○				昭和50～52・56・平成6年度発掘調査
43	中阿久				○					○		○		昭和51年度発掘調査
44	原原山					○				○				昭和50年一部破壊
45	広原日向	○			○	○				○				昭和58年度発掘調査
46	宿尻	○			○	○				○				平成5・6年度発掘調査
47	ヲシキ		○	○	○					○				昭和51年度発掘調査
48	輪の木				○					○				昭和53年一部破壊
49	大石	○	○	○	○					○				昭和50・平成4・5年度発掘調査
50	山の神					○				○				昭和54年度発掘調査
51	姥ヶ原					○	○			○				昭和63・平成元年度発掘調査
52	水掛平					○				○				平成7・8年度発掘調査
53	雅頭沢					○				○		○		昭和54・57・63・平成4・5年度発掘調査
54	宮ノ下		○	○					○	○		○		昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根				○	○	○		○	○				平成7年度発掘調査
56	家前尾根			○	○	○	○		○	○		○		昭和51年一部破壊、平成7年度発掘調査
57	久保地尾根				○									昭和51年一部破壊、平成6～8年度発掘調査
93	大石西			○	○					○				平成3年度発掘調査
95	土井平									○				平成4年度発掘調査 消滅

水田域があるうえ、遺跡の包蔵地としての周知が浸透しておらず、地権者との調整も不十分といった状況があったことである。そこで、これらが片付くまで西部地区の調査を先に完了させることとした。

個々の遺構の調査行程は、検出→(検出状況写真の撮影)→掘り下げ→断面実測・(断面写真撮影)→セクション・ベルトの除去→遺物出土状況写真の撮影と平面実測→遺物取り上げ→床(底)面精査→床(底)面検出遺構の掘り下げ→同断面実測→完掘→完掘写真の撮影と平面実測→空撮写真撮影後、床下調査といった流れで進め、調査途上で見つかる遺構を除く全ての遺構の検出が終了してから掘り下げにかかり、調査途上で見つかる小豎穴を除く全ての小豎穴の調査を完了してから豎穴住居跡の調査にかかった。西部地区と払沢地区でそれぞれこの行程を繰り返し、その行程の終盤として空撮写真の撮影をした。

測量は手測とトータル・ステーションを折衷する変則方式を探った。F区東端～M区の面剥ぎ部分(一部を除く)についてはグリッド方眼杭を設けて、方眼紙の縦軸を南北軸とする手測を行った。F区西半以西の全ての遺構と、H・I区南斜面の4基の小豎穴とJ区尾根頂部の6基の小豎穴については、手測による平面実測を任意座標により行い、セクション・ポイントを業者委託による単点測量で拾いあげて、遺構分布図は机上合成した。単点測量では、調査区やトレーンチの輪郭も拾い上げた。

グリッド設定は、VII系国家座標原点に基づき、国家二等三角点以上の精度を有する公共水準点より導いた。設定方法は、遺跡の中心である国家座標X = -4240.000、Y = -26360.000をH A-70グリッドと定め、Y = -26360.000線がH区の西端となるように、東西方向は50m間隔でA区・B区・C区・D区というように西から東へ向かって区割りし、更にその50m間をA～Yまでやはり西から東へ25分割し、南北方向はX = -4240.000線から南へ2m幅を70として、北へ2m上がる毎に71・72・73……、南へ2m下がる毎に69・68・67……とした。

IV 遺跡の基本層序

調査区の土地利用状況には山林・荒地・畑地・水田・農道があり、山林・荒地・大方の畑地・農道下の遺構の依存状況は比較的良好であったが、C～E区、H・I区とK区では水田・畑地造成で元々の尾根の形が著しく削られ、遺跡が破壊されていた。また、南(急)斜面に構築された豎穴住居跡では谷側下半を流失したものがD・E区、G区、I区に顕著だった。

調査区の大部分は安定した堆積状況にあり、黒色土～ロームまでの基本的な土層が観られた。尾根頂部・尾根平坦部以外では尾根頂部・尾根平坦部に見られない巨礫を含有した堆積状況がある。次頁に概観を記す。

(現耕土)： 現在耕作されている地表土で、検出面においては石灰の顆粒が混入する点が、遺構との区別を容易にした。H区では水田造成の際、谷側で2m以上が埋め立てられていた。

I : 黒色土 尾根頂部で9~20cm程度、尾根下方の調査区周縁部では90cmを越す堆積がある。よく腐植が進行した土で、腐植の進行具合では黒褐色を示す。团粒状の構造で、水分を帯びると粘性が増す。 ϕ ~7mmのローム粒を5%以下含有する。

II : 黒褐色~暗褐色土 腐植の進行が不十分な土で、30%以下のロームを含有する。ロームをブロックで含む場合、 ϕ ~100mmである。下位でロームと漸移して不可分な様相を示す。

III : ソフト・ローム 褐色

E~I区の南斜面の下半、北斜面の全城、M区以東ではI・IIともに人頭大を越すような巨礫以下を多く含有しており、基調土よりも礫の方が主体を成す地点もあった。とりわけM区以東にこの状況が著しく、現代においてはよく畑地化したと思われるもので、畑の周縁部には礫がうずたかく積まれていた他、遺構では第49・50・54号住居跡が呆れる程の礫層の中に構築されていた。

V 調査の概要

検出された遺構は下表の通りである。

竪穴住居跡（竪穴状遺構含む）

繩文時代	34軒
平安時代	18軒
	計52軒

小 竪 穴

	落とし穴	配 磬 炉	配 磬 坑	土 坑 基	そ の 他	合 計
繩文時代	7	3	5		109	124
平安時代			1	1	22	24
そ の 他					18	18
合 計				166		

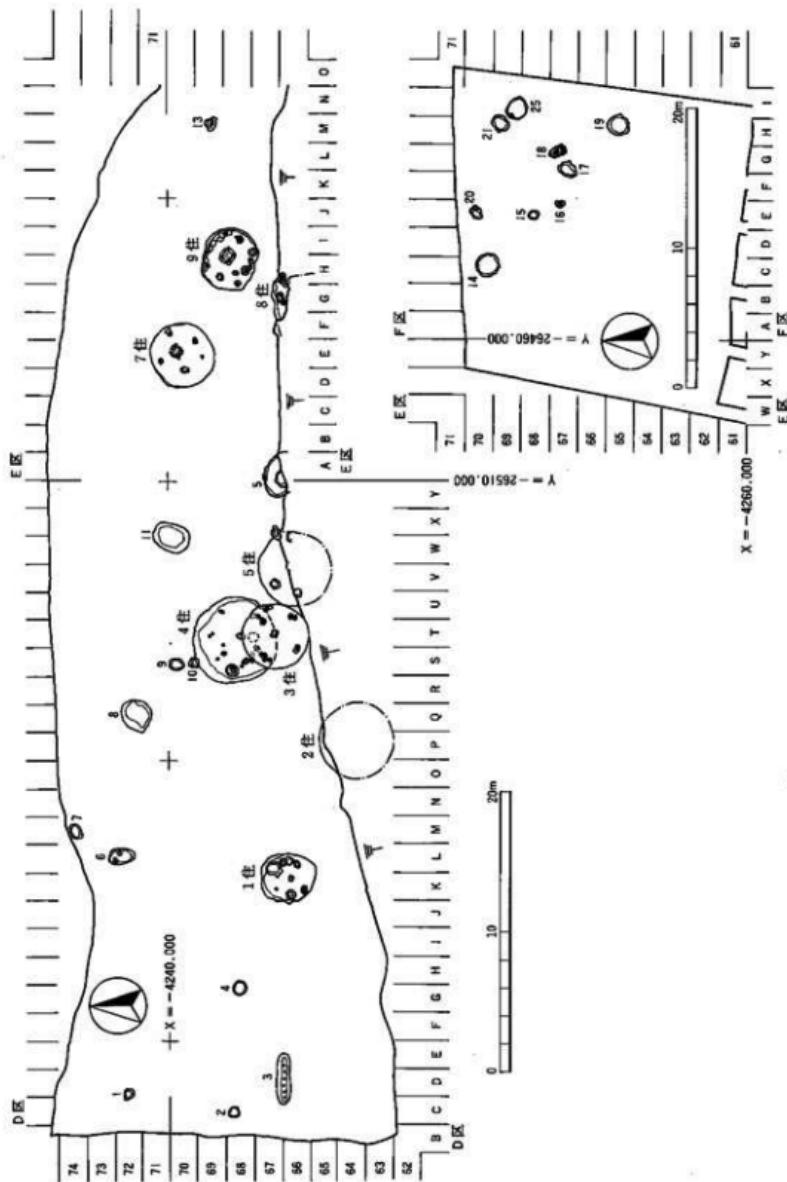
前述のとおり、従来周知の清水遺跡は西部地区（E～H区）である。払沢地区では、遺跡の東側がどこまで拡がるのか分からず状態で調査が開始された。しかしながら、完全に消滅する遺跡の調査として、取りこぼしの無い調査ができたものと自負している。調査前から西部地区に縄文集落、払沢地区に平安集落が見つかることが確実視されていたが、その通りの調査所見が得られた。当遺跡は、尾根頂部の平坦部がいちばん広いところでも、南北幅で20mに満たないような瘦せ尾根に立地するが、当初算定した以上の竪穴住居跡が見つかった。

小竪穴群は全体の24%にしか遺物が出土せず、意図的に遺物が配されたと認められるのは小竪穴21・73・113・139など僅少で、遺物の帰属性が疑わしいものと遺物の出土が皆無のものについては、覆土の違いにより時期を判断したが、積極的な時期判定ができないものも少なくなかった。

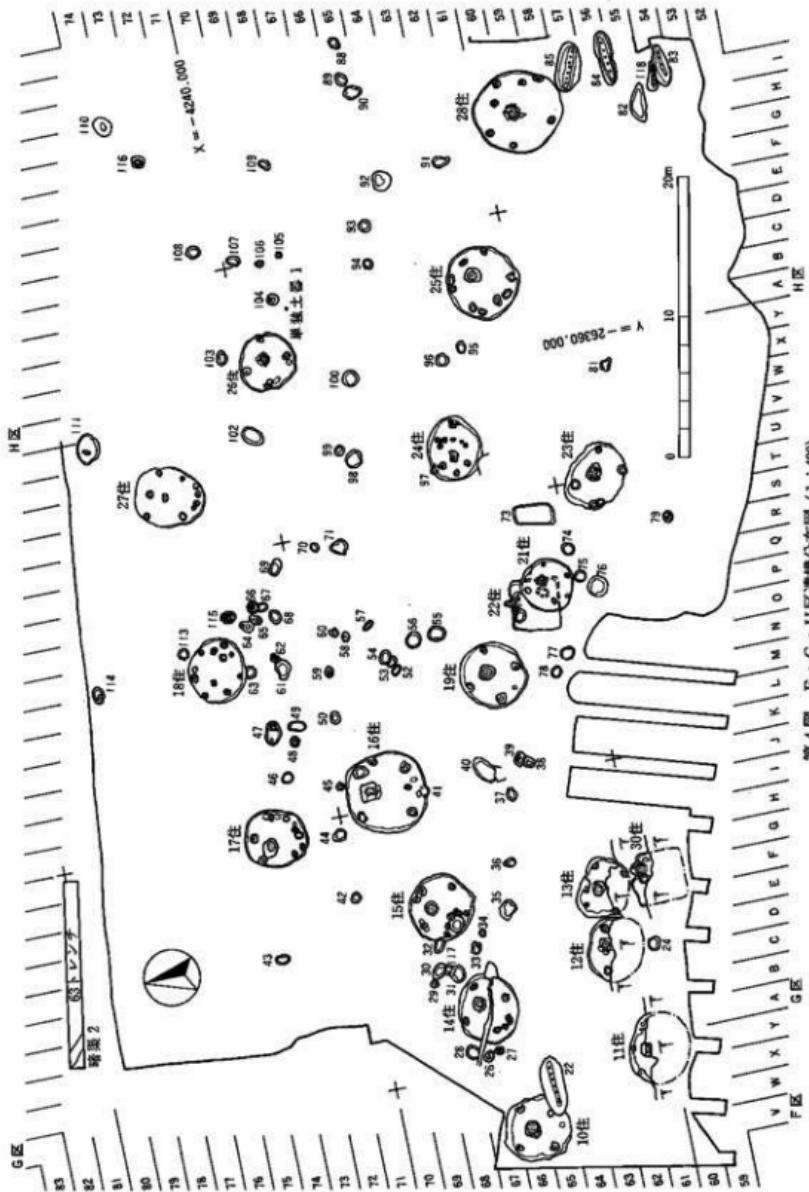
縄文時代は早期～後期初頭まで幅がある。早期の遺物は土器片3片のみで、F～G区境の南斜面だけに認められる。早期の遺構と認められるものはない。前期末～中期初頭の遺構と遺物はD区南斜面とJ区の尾根頂部及び南斜面に見られ、両者の中間のG・H区の後発の住居跡の覆土にも遺物が混じるが、G・H区には核心部分は無い。中期初頭では、第4号住居跡が石器工房跡として興味深い。中期中葉の遺構・遺物はG～I区に見られる。これらは当遺跡の縄文時代の中では絶対数・絶対量とも少ない。中期中葉では土器の出土量に比して石器の出土量が多い。中期初頭・中葉の住居跡の遺物は僅少であり、中期初頭・中葉とともに集落が断絶したと考えられ、埋没過程においてモノが棄てられていない。炉の形態は中期初頭のものは地床炉、中葉のものは地床炉・土器埋設炉・石詰炉がある。竪穴の形状は円形または長円形で、柱穴はいずれも多数が不規則または環状に巡る。当遺跡の縄文時代は中期後葉の曾利III・IV期にピークがあり、縄文住居跡の7割が曾利期に属する。中期後葉の遺物は遺構数と比例して最も遺物が多く、その中でも先につくられた曾利II期の住居跡に大量の遺物が投棄されている。曾利III・IV期には4本柱を主体とし、石圓炉が大型化して北壁に接近し、規格的なつくりをもつ。円形または隅丸方形の竪穴をもつこれらは、G～I区の南斜面を主体として占地しており、急傾斜にあって下半を失っているものがある。5軒が埋甕をもつ。後期初頭の遺物は土器片が10片以下でG・H区に限られ、包含層のものと曾利期の遺構に流没したものがあるが、確実に後期初頭の遺構と称し得るものはない。平安時代の遺構はE区・G区とI区以東にあり、住居跡は尾根頂部より半ば下った南斜面または西斜面にあって、当該地方に特徴的な在り方を示す。住居跡の時期は9世紀末～10世紀で坏・焼類が多数投棄されている。大原2号窯式の灰釉陶器が多数搬入されている。竪穴は方形で、竪穴状遺構を除いて例外なく石組カマドをもち、コーナー方向に偏って北壁または東壁にある。

遺物の量は膨大で、遺跡全体で整理箱にして40を数える。この数量に含まれずに、縄文土器は深鉢を主体に60個体強、平安時代の土師器・灰釉陶器は坏・焼を中心70個体強を接合・復原できた。石器は遺構内外から170点を出土した。

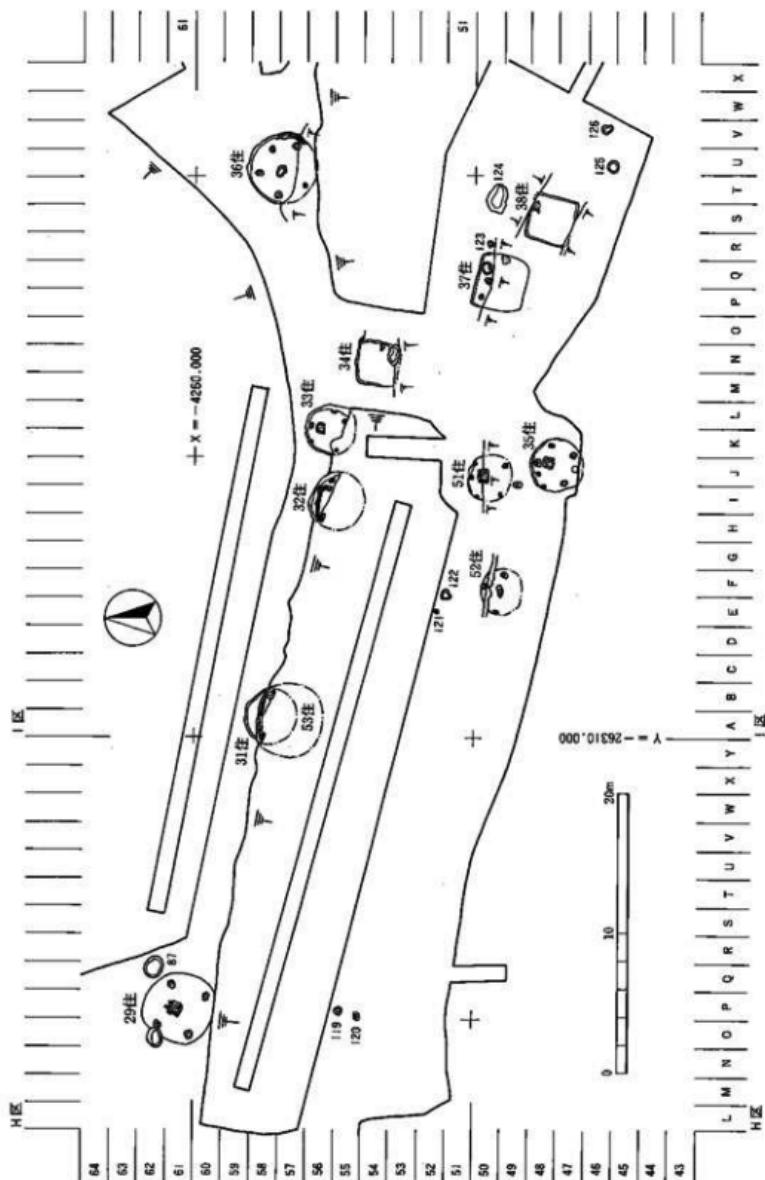
瘦せ尾根にもかかわらず多数の住居跡が見つかり、最初で最後の調査により遺跡の全貌を明らかにできた。

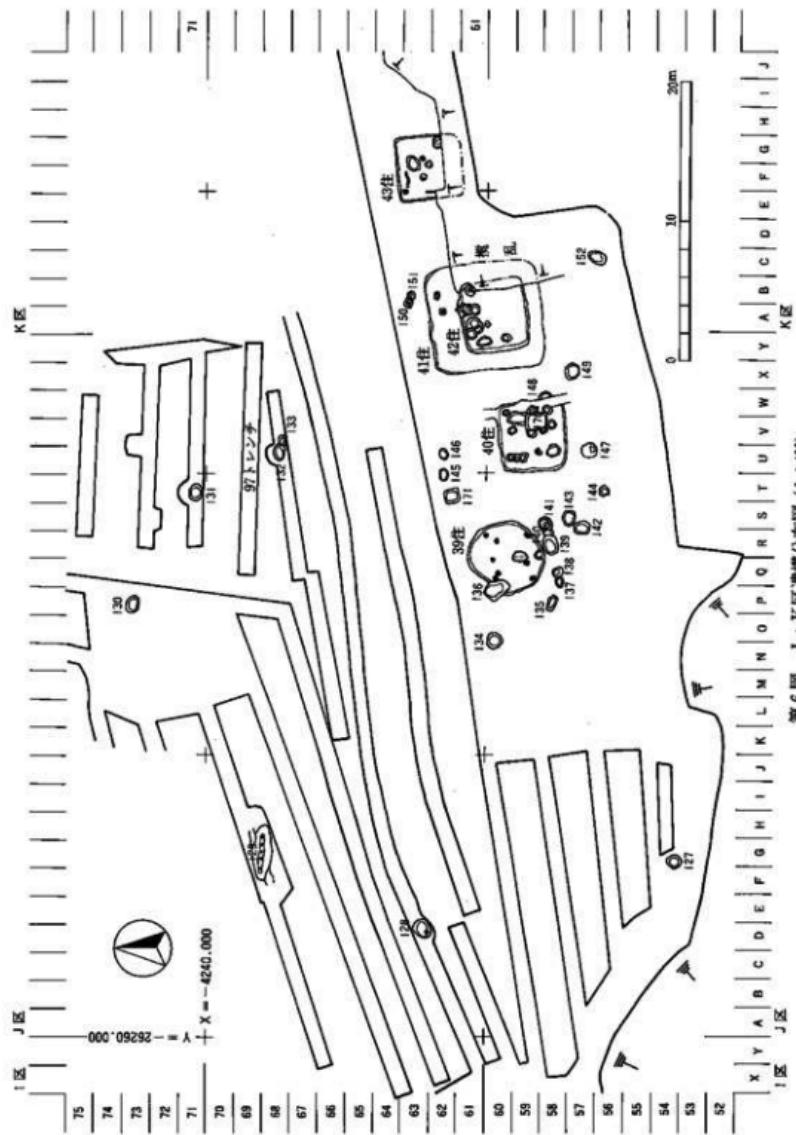


第3图 D·E·F区建構分布圖 (1:400)



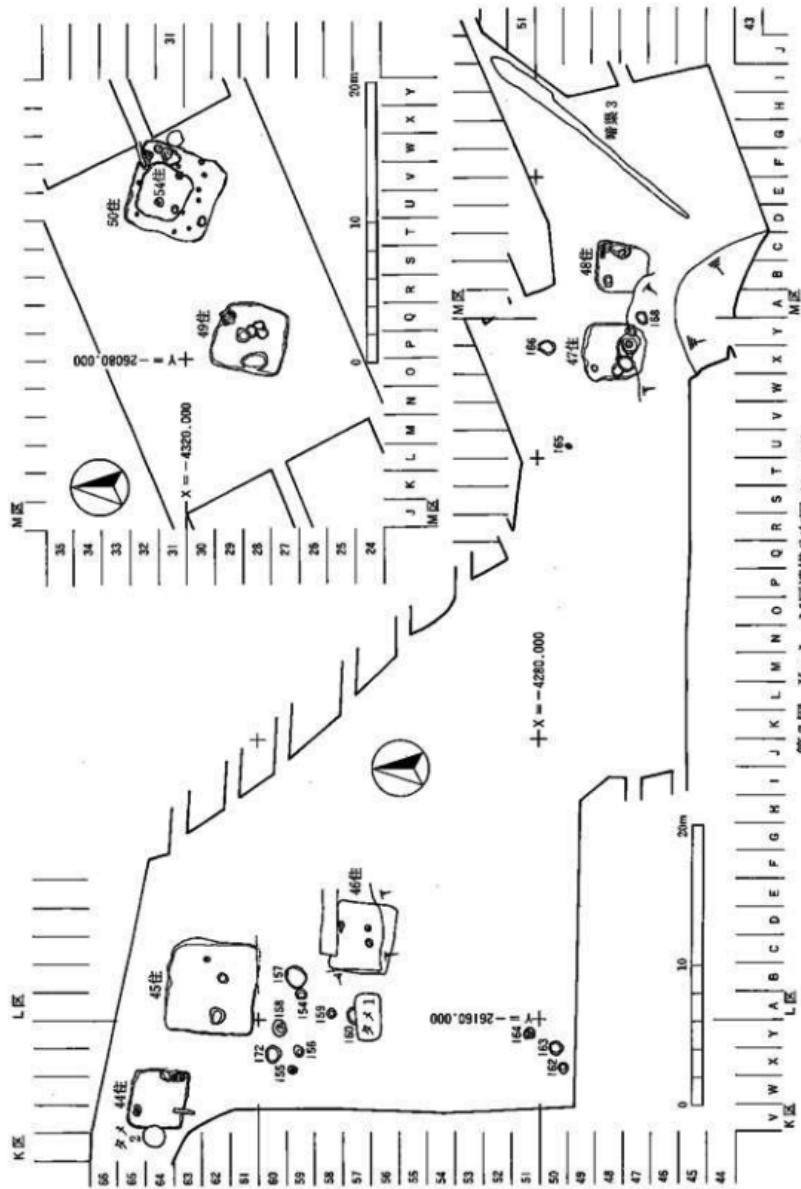
第4回 F・G・H区遺構分布図 (1:400)





第6図 J・K区遺構分布図 (1:400)

第7図 K・L・M区連繩分布図 (1:400)



VI 遺構と遺物

これから掲載する遺構図はすべて埋没過程を含んだ最終的な姿を表している。但し、覆土中の石や遺物がその遺構の時期を決定づけるものなのか、後の所産によるものかが判断できたものは文中にそれを記述した。なお、第6・20号住居跡は欠番である。

1 繩文時代

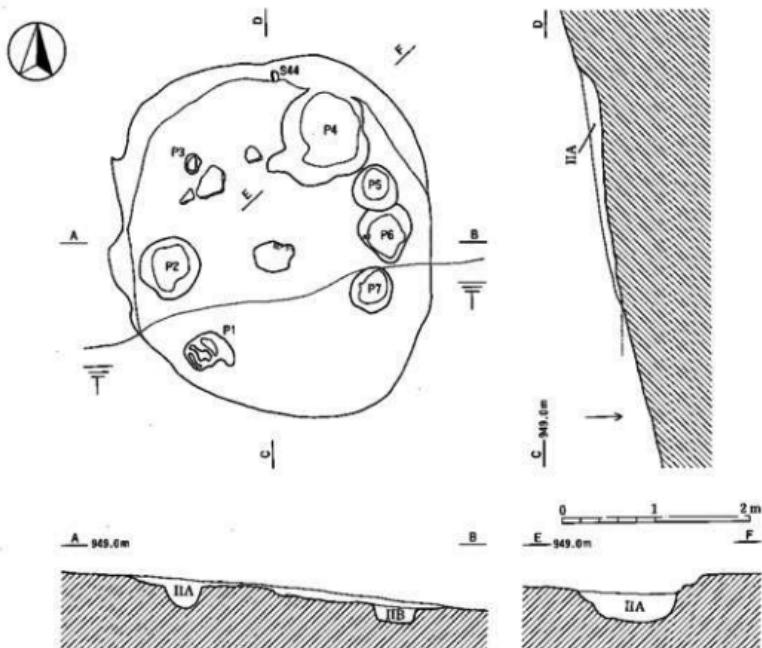
(1) 住居跡と竪穴状遺構

第1号住居跡 (第3・8・52・58図、写真7)

位 置：DJ～DL-66～68グリッド、南緩斜面。
検 出：III層の上面で明瞭に検出した。
覆 土：II層を基調とする自然埋没である。
規模・形態：長径387cm×短径347cmを測り、長円形である。
床 壁：南側の床のおよそ1/3程度が流出しており、南半に壁は存在していない。北側は壁の高さが20cm程でなだらかである。
柱 穴：P1～P3、P5～P7の6基が柱穴と考えられる。P4は貯蔵穴であろう。
炉 ト：掘り込みをもたない地床炉で、範囲は44×32cmでやや不定形である。住居跡のほぼ中央に位置している。
遺 物：土器片僅少。籠烟式の深鉢口縁(68)は連続逆三角形の肥厚口縁部直下に地文の縄文があり、胴下半まで満たされていたと思われる。P5覆土上層からは、和歌山県鷹島や兵庫県大歳山に通ずる西日本の土器の底部で、円形の5ヶ所を内側へ押圧して星形を作り出したものが出土したが陶化できなかった。これらから、本跡は前期末～中期初頭と考えることができる。石器は磨石(44)と偏平石皿の計2点がある。

第2号住居跡 (第3図)

位 置：DO～DQ-65グリッド、南緩斜面。
検 出：III層の上面。竪穴のほとんどを水田造成で失っており、床も残っていない。住居跡とする根拠はないが、形状・規模の推定から住居跡の残骸を見て間違いない。
覆 土：検出時点で既に床下であり、残存していない。
規模・形態：残存部で387×70cmを測る。円形と思われる。



第8図 第1号住居跡実測図(1:60)

床・壁・柱穴・炉・遺物：残存していない。

第3号住居跡 (第3・9・52図、写真8)

位 置：DS～DU-65～68グリッド、南緩斜面。

検 出：III層の上面である。柱穴と土壤化した掘り形の一部で平うじてプランを確定した。

覆 土：残存していない。

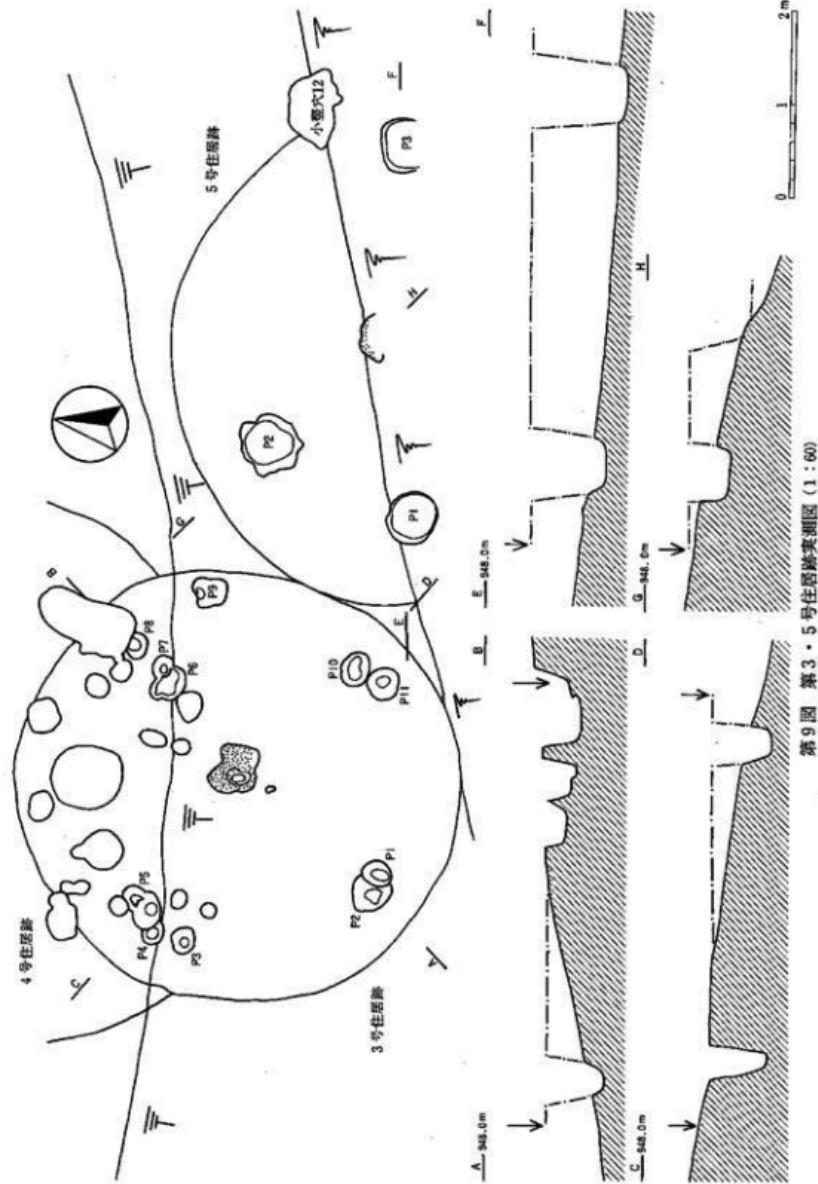
規模・形態：径240～230cmを測り、円形である。

床・ 壁：床は北側半分が第4号住居跡に切られ、南側半分が流失しており、壁は残存しない。

柱 穴：床の4隅に2穴ずつ存在している。P2・P4・P6・P11→P1・P5・P7・P10の建て替えた痕跡と推察される。

炉 ：地床炉か、もしくは炉石を抜かれており、範囲は30×26cmでやや不定形である。住居のほぼ中央に位置している。

遺 物：床下から暗ヶ峰式、結節浮線文の土器片(69)が出土した。本跡は第4号住居跡に先行する前期末の住居跡であろう。



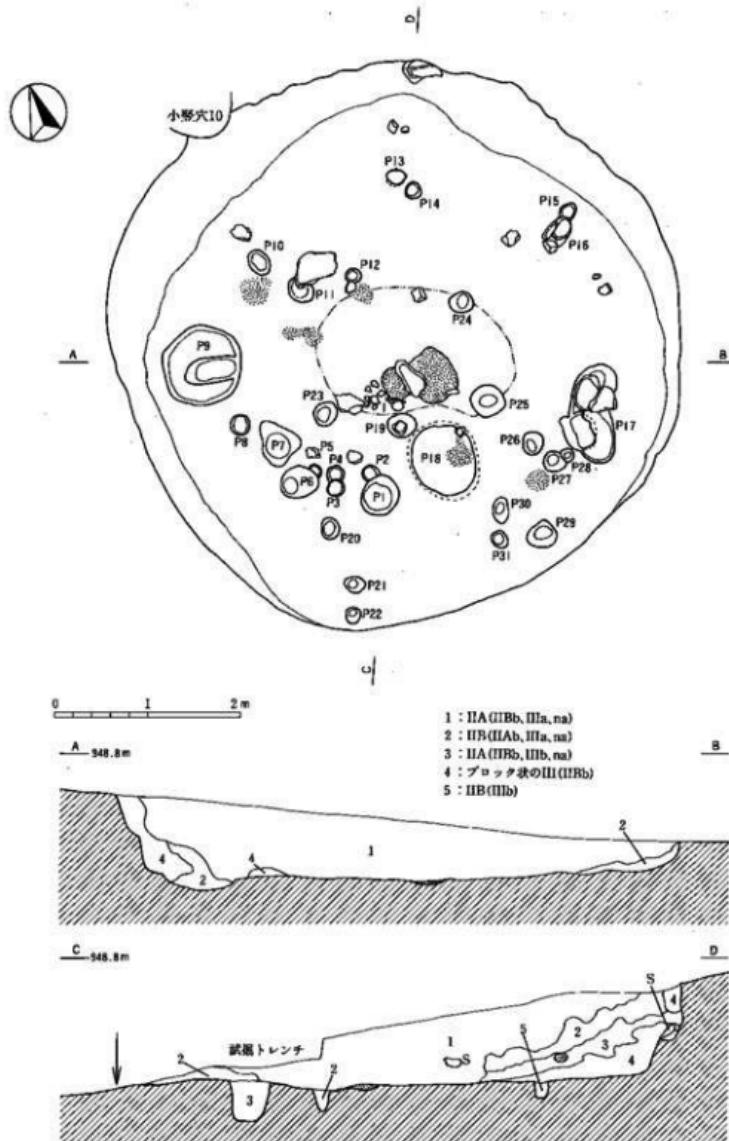
第9圖 第3・5號住居跡測圖 (1:60)

第4号住居跡 (第3・10・40・52・55図、写真9・71・111~113・117・130)

- 位 置: DR~DU-66~70グリッド、南緩斜面。
- 検 出: III層の上面である。南側1/3は3号住居跡を切っている。
- 覆 土: Iを基調にする黒褐色土に、北壁際にIIを基調とした暗褐色土とロームの流入した三角堆土があり、自然埋没である。
- 規模・形態: 最大径706cmを測り、円形である。
- 床 壁: 炉の周辺によく叩き締められた堅い床をもつ。また焼土の抜がりが6ヶ所に分かれ観られる。南壁は流失しており存在していない。南に傾く斜面のため南壁の残りは良くなかったと推察される。北壁は最大で104cmを測る。
- 柱 穴: P1・P6・P7・P11・P24・P25等の群と、P20・P8・P10・P13・P14・P15・P16・P17・P27・P28・P30等の群との、二重の環状配列が看取される。これら以外のピットも柱穴の可能性があり、10~20cm前後径の多数の木で上屋を支えたと考えられる。P18は内部で抜がっており、大きさ・深さから貯蔵穴であろう。
- 炉 : 地床炉で長径62cm×短径46cmの楕円形で、住居跡の中央からやや南側に位置する。
- 遺 物: 炉の西脇より梨久保式の深鉢(1)が復原できたが炉芯を成すものではない。その他、結節浮線文や沈線を施した土器片(70・71)など少量が出土した。これらより本跡は中期初頭に比定される。P27付近の焼土の中に約1000片の黒曜石のチップが含まれており、覆土下層からも多量の黒曜石片が採集され、黒曜石製の石鏃(1~6)も覆土中より出土している。以上より本跡は石器工房的な性格をもつと推測される。その他、チャート製のスクレーパー(16)が出土している。

第5号住居跡 (第3・9図)

- 位 置: DU~DX-65~67グリッド、南緩斜面。
- 検 出: III層上面である。床面が流出しており柱穴と一部残存している掘り形とで辛うじてプランを推定した。南下半は水田造成で破壊されている。
- 覆 土: 既になかった。
- 規模・形態: 南側半分が破壊されている。残存部で274×104cmを測る。残存している北側より推定されるプランは円形である。
- 床 壁: 検出段階で既に床面を割っており、床面は残部より検出面から最大47cm上のレベルにあったと推定される。
- 柱 穴: P1~P3が柱穴と考えられる。その他は残っていない。
- 炉 : ほとんど残っておらず、僅かに焼土・炭化物が認められるが詳細は不明である。残存部は22×10cmを測る。
- 遺 物: 土器片僅少。詳細は不明である。



第10図 第4号住居跡実測図 (1:60)

第7号住居跡 (第3・11・52図、写真10)

- 位 置：ED～EF-69～71グリッド。
- 検 出：III層の上面で見つかった。
- 覆 土：IIを基調とする。
- 規模・形態：径840cmの円形。
- 床 壁：よく叩き締められた貼り床をもつ。北壁が2cm程残るのみで、南側はほぼ床面が露出しており、壁は残っていない。
- 柱 穴：P1～P4の4本の主柱穴とする。
- 炉 方形石囲炉で33×28×-11cmを測る。炉底は焼土が生成されている。やや北側に寄る。遺存状態は良好である。
- 遺 物：土器片僅少。床面より曾利II式土器片(72)が出土した。覆土最上部より磨製石斧が1点出土している。

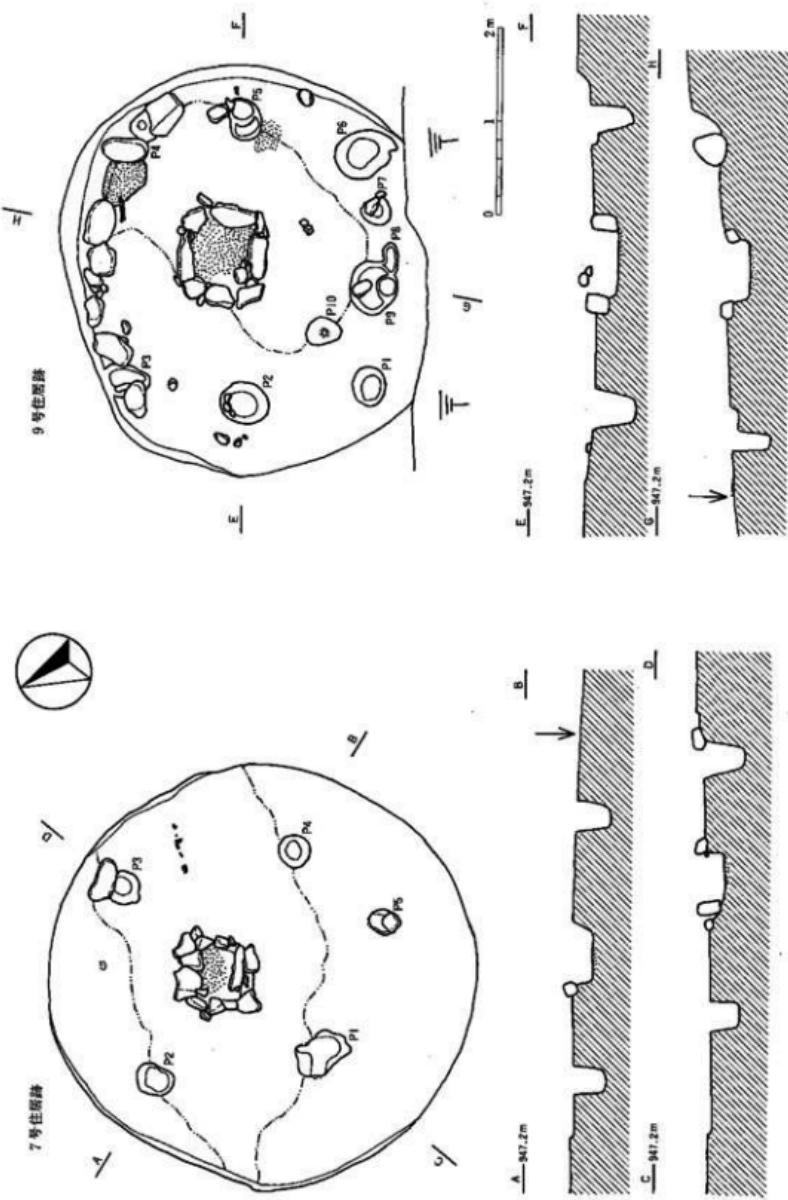
第9号住居跡 (第3・11・52図、写真12)

- 位 置：EG～EI-67～69グリッド。
- 検 出：III層の上面で見つかった。
- 覆 土：IIを基調とする。
- 規模・形態：440×388cmの隅丸長方形である。
- 床 壁：よく叩き締められた貼り床をもつ。壁は南西側の2/5周ほどは流失して残っていない。壁の残存部では緩やかな傾斜で立ち上がる。
- 柱 穴：P1・P2・P5・P6の4本主柱である。
- 炉 方形石囲炉で、内法26cm、深さ14cm強を測り、やや北東側に寄る。遺存状態は良好である。炉底は焼土が生成されている。北東の隅に28×21cmの規模で、明らかに床面上で火が焚かれた痕が存在する。北壁は20cmを測り、北壁際に入頭大の礫が並ぶ。祭壇と称される鹿島石列に関連したものか。
- 遺 物：土器片僅少。条線と沈線による唐草文系の(73)、繩文のみの(74)、(21)と同様な器形の鉢胴部文様帶(75)、(31)と同様なキャリバー形深鉢の口縁部文様帶(76)から、曾利II期の住居跡である。

第10号住居跡 (第4・12・40・41・52図、写真11・13・14・72・73)

- 位 置：FV～FX-65～67グリッドの尾根平坦部から南斜面に移行したところ。
- 検 出：II層下部～III層上面で見つかった。小竪穴22号(落とし穴)に切られる。南側1/5程度が流出している。
- 覆 土：IIを基調とする。北壁際で約100mmのローム・ブロックを50%含有する暗褐色土

第11圖 第7・9号住居断面測図 (1:60)



があり、自然埋没である。

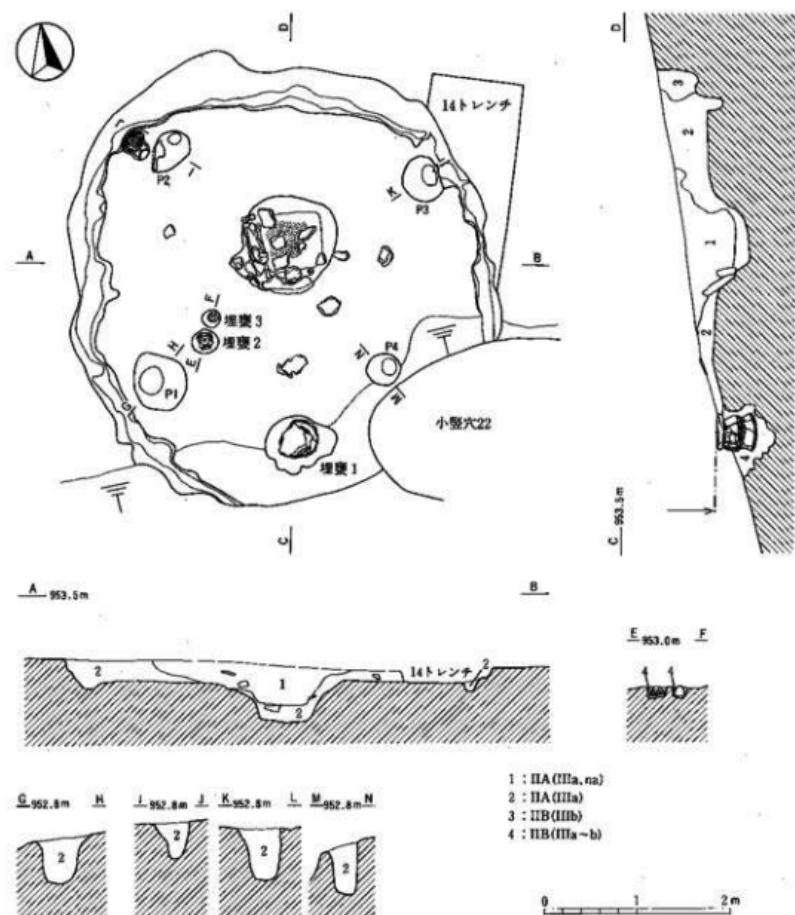
規模・形態：480×460cmの隅丸方形プランである。

床 壁：弱い貼り床をもつ。北壁は垂直に近く、壁直下に幅5～18cmの周溝が巡る。

柱 穴：P1～P4の4本主柱である。

炉：石囲炉であるが、南側と西側の炉石が残存するのみである。炉底はよく焼けている。

中央よりもやや北側に寄る。



第12図 第10号住居跡実測図 (1:60)

遺物：奥壁のP2脇床面に、深鉢（5）が底部を欠損してはいるがほぼ形状を保ったまま存在した。入り口部には底部を打ち欠いた逆位の埋甕（2）が埋設され、平石で蓋をされていた。更に炉の左側45度の位置より、下胴部のみを用い、底部中央を穿孔した逆位の埋甕2点（3・4）がほぼ南北に並んで埋設されていた。その他の土器片は少なく、条線と沈線による（77・78）などが出土した。

第11号住居跡（第4・13・41・52・56図、写真119）

位置：FX～GA-61・62、南急斜面。

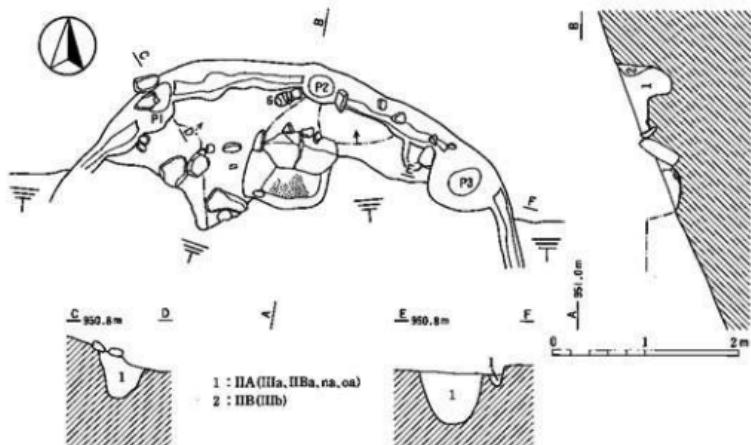
検出：II層下部～III層上面で見つかった。地山中に人頭大の円礫が多数含まれ、構築には難を伴ったことだろう。

覆土：IIを基調とする。北壁際にロームが流没する自然埋没である。

規模・形態：残存長で512×184cmを測る。南下半以上を欠損している。当初から半円形プランの住居跡が報告されているが、第13号住居跡や第23号住居跡と同様に等高線方向に長軸がある住居跡と考えられ、推定プランは隅丸長方形である。

床・壁：よく叩きしめられた貼り床をもつ。南側は、第35号住居跡のように黒色土中に床をもっていたと考えられる。北壁は垂直に近く、壁直下に幅19～34cmの周溝が巡る。北壁高は36cmを測るが、急傾斜のため検出面に炉石が露出し、それ以南は床も残らないという有り様であった。

柱穴：北壁際に3基が壁柱穴気味に巡り、それらは周溝で結ばれる。



第13図 第11号住居跡実測図（1:60）

炉 : 石器炉と思われるが北側の炉石が残存するのみである。炉底はよく焼け、焼土塊がのっていた。奥壁に接近し、北壁から76cmである。

遺物 : 覆土中は少なく、床面上は僅少である。(6)は床面遺物だが、第14号住居跡検出面の破片と遺構間接合する。(79)は曾利II期の口縁部無文帯、(80)は曾利II期の口縁部文様帯である。後期初頭の(81・82)、早期の(83)は尾根上方からの流没と考えられる。覆土中から黒耀石の大きな原石(19)が出土した。本跡は竪穴の形態と立地も加味して曾利III期と考えている。

第12号住居跡 (第4・14・41・55・56図、写真114・123)

位置 : GC~GE-61~63グリッド、南斜面。

検出 : 北端はIII層上面で、南下はII層下面で見つかった。地山中の拳大~人頭大の礫が多数露出していた。

覆土 : IIを基調とする黒褐色土に最長30cm以下の礫を含み、北壁際でφ~50mmのローム・ブロックを40%含有する暗褐色土の三角堆土があり、自然埋没である。

規模・形態 : 南半が流失している。残存長456×180cmである。等高線方向に長軸がある隅丸長方形のプランが推定される。

床 : 壁:貼り床で壁高は20cm。

柱 : 穴:浅いものの、P1・P2が柱穴と考えられる。2つを結ぶと長軸方向に重なり、この線上に炉ものり、平坦部に作られる同時期の住居と異なる配列を示す。傾斜地の制約を受けた配列と考えられる。

炉 : 積層を34cm程掘り込み、周縁部を大小の石で囲んだ形態だが、石が全周していたか判然としない。炉底の地礫がよく焼ける。奥壁に接近し、北壁から64cmである。

遺物 : 土器・石器があるが少ない。(7)は覆土上層より復原した。覆土中の土器片のうち沈線で構成され、本跡に代表的な(84・85・87)を掲載した。(86)は後期初頭のものであろう。石器は横刃形石器2点(23他1点)と石錐(7・8)で、石錐(8)は炉内より出土した。本跡の時期は第11号住居跡同様、曾利III期と考える。

第13号住居跡 (第4・14・41・52・58図、写真15・16・74)

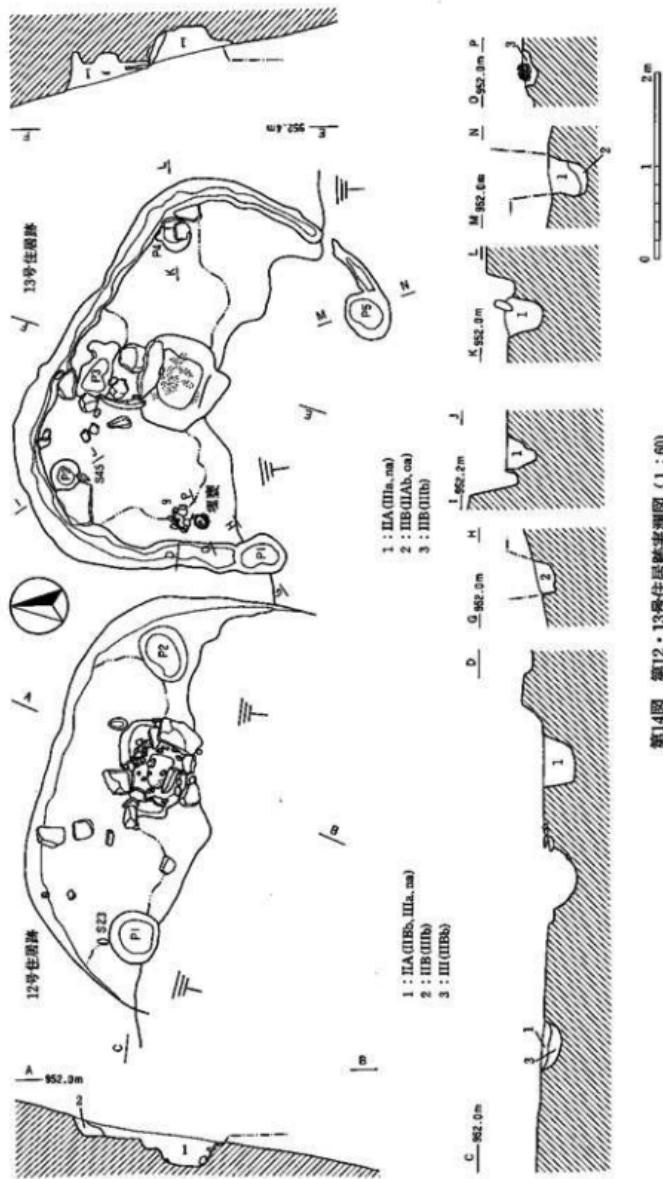
位置 : GE~GG-61~63グリッド、南急斜面。

検出 : II層下部で検出した。このような斜面に竪穴住居跡の存在は予測できず、重機による先行トレーニングで本跡があたり、この南斜面を拡げるきっかけとなった。

覆土 : 土: φ~30mmのローム・ブロックを10%含有するが、自然に埋没したものであろう。

規模・形態 : 436×326cmの隅丸長方形である。

床 : 壁:弱い貼り床をもつ。壁高は最深の山側で30cmを測るが、傾斜地のため南側は流失し



第14圖 第12・13号住居施設実測図 (1 : 60)

ている。10~30cm幅、深さ10cm強の周溝が壁直下にまわる。

柱穴：P1・P2・P4・P5の4本主柱と考えられる。P2・P4脇の礫は居住時に設けられたものと思われる。

炉遺：北壁から83cmで、北側のみ炉石が検出された。炉内は焼ける。

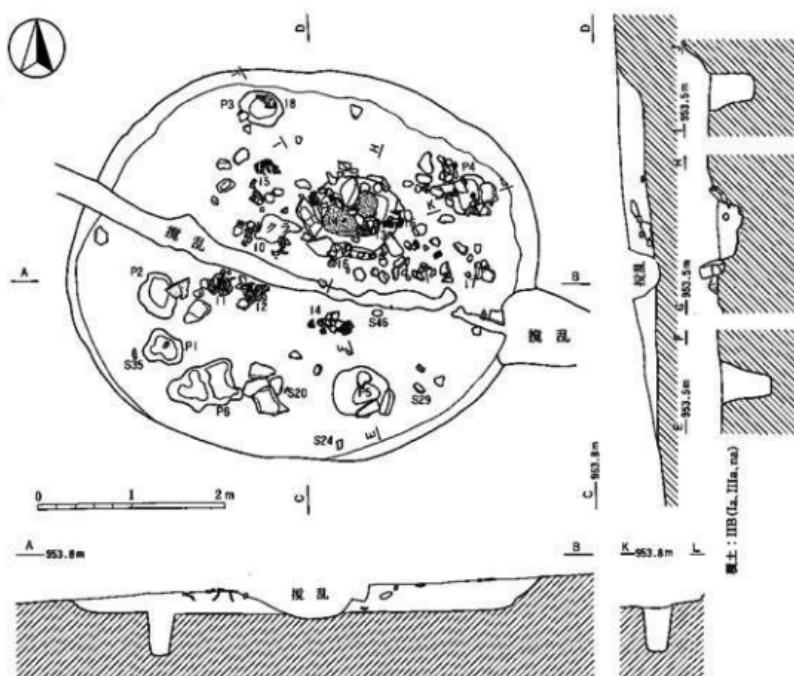
物：覆土中の遺物は少ない。主軸（短軸）線から入り口部に近い60度西方向に底部を打ち欠いた逆位の埋甕（8）、傍らに深鉢（9）があった。覆土からは（88~90）が出土した。石器は（45）の磨石（凹石面をもつ）のみ出土。本跡は12号住居跡に近接するが併存したはずではなく、先行して曾利II期に構築されたと考えられる。

第14号住居跡（第4・15・41~43・55~58図、写真17・18・75~82・126）

位置：GA~GD-66~68グリッド、尾根平坦部のへりに位置する。

検出：II層中の検出で見つかった。

覆土：IとIIIのブロックを含有する暗褐色土で、IIを基調とする。自然埋没と思われる。



第15図 第14号住居跡実測図（1:60）

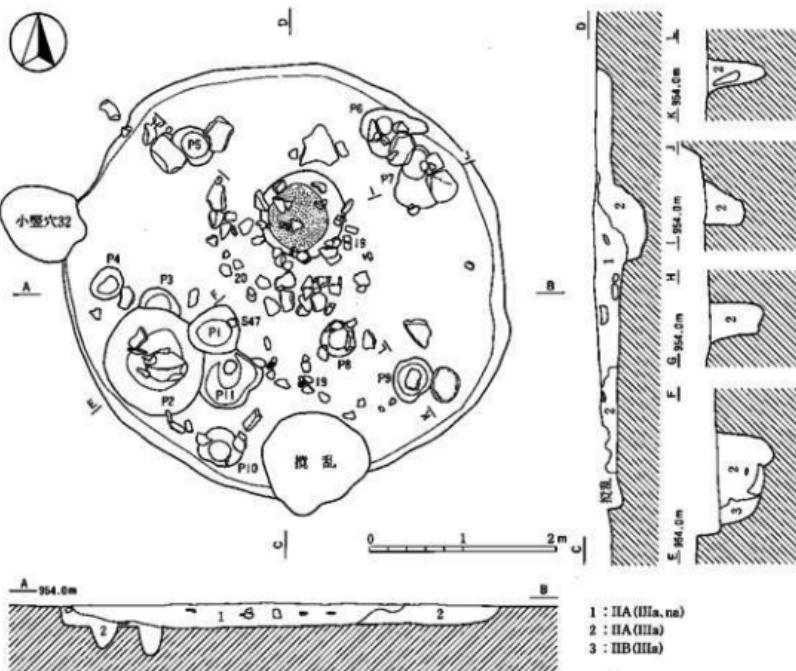
規模・形態：長径480cm×短径425cmの長円形である。

床 壁：床は掘り形を踏んで平坦にしただけで、壁高は最大で36cmある。

柱 穴：P2～P5の4本を主柱穴とする。

炉 方形石囲炉で、内法60cm、深さ20cm強を測る。炉底は焼土が生成され、奥壁に寄る。

遺 物：土器と礫が大量かつ無秩序に覆土中に浮いて出土。集落の拠点である北東方向から埋没過程で投棄されたものと考えられ、出土は北東側に集中する。9個体を復原（10～18）し、これを除いた土器片は少量となった。曾利II期に出現した住居と思われるが、床面～検出面まで土器片は接合し、単層なので判然としない。曾利II期は縄文のみを施した（10）、唐草文系の（14・15）、釣手土器（18）があり、他は区画の有無によらず横走または垂下する沈線または条線を主体とするが、口縁部文様帯を持つものと持たないものにより、曾利III期とIV期に分け得る。主要な文様は（10～18）に網羅されていると考え、拓影は掲載しなかった。石器は（17・20・24・29・35・46）など、量・バリエーションとも多い。



第16図 第15号住居跡実測図 (1 : 60)

第15号住居跡 (第4・16・43・52・55・59図、写真20・115)

位 置：GE～GH-67～69グリッド。

検 出：III層上面で見つかった。

覆 土：IIを基調とし、 ϕ ～10mmのローム・ブロックを微量含有する黒褐色土で、色調の微妙な漸移状況から2分層した。レンズ状の堆積であり、典型的な自然埋没である。

規模・形態：径473～463cmの円形。

床 壁：掘り形を踏み固めたもので、特に堅硬な部分はない。壁高は最大で19cmである。

柱 穴：4本主柱で、P11・P5・P6・P9からP2・P5・P7・P9へと建て替えが成されたと考えられる。P2は異様に大きく、長径で120cmに及ぶ。P5・P7・P9の傍らに入頭大以上の礫が寄せられている。

炉 ト：円形で30cm程掘り込まれ、よく焼けている。石回いは無い。やや奥壁の北壁に寄る。

遺 物：土器と相俟って100個近い拳大前後の礫が炉を中心投棄される。遺物は比較的多い。浅鉢2個体(19・20)が復原でき、(20)は第14号住居跡と遺構間接合した。覆土中の土器片は(91～94)のように曾利II～III期にわたるが、III期のものが凌駕する。石器は石錐・磨石・打製石斧がある。(13・47)を図示した。

第16号住居跡 (第4・17・43・44・52・53・56・57・59図、写真19・21・83～87・131)

位 置：GI～GL-67～70グリッド。

検 出：III層上面で見つかった。

覆 土：断面レンズ状の自然堆積で、中央では微量、壁際では少量から多量のロームを含有する黒褐色土で、2分層された。

規模・形態：573×565cmの隅丸方形。

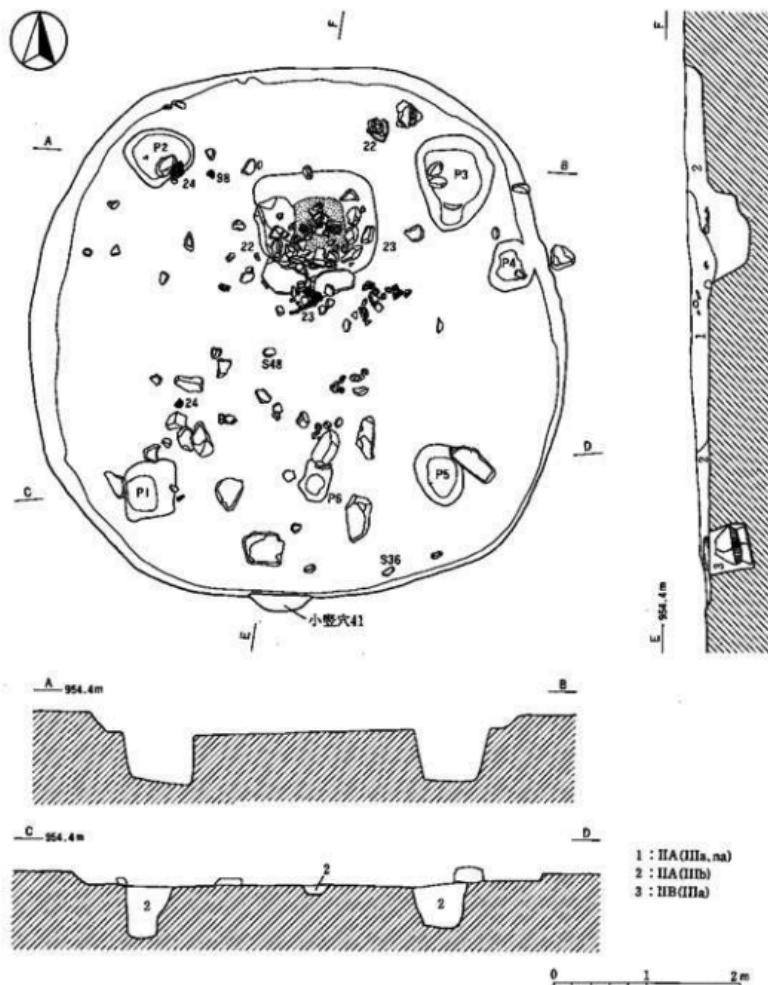
床 壁：床はあまり堅硬でない。壁は傾斜し、検出面からの深さは最大でも19cmである。

柱 穴：P1～P3・P5の規則的な4本主柱で、いずれも床面から50cm前後掘り込まれていて。P1・P5の傍らに巨礫が配されていた。

炉 ト：1辺130cm前後の大形の石回炉と考えられるが、北側と東側の炉石は持ち去っていた。

遺 物：土器・石器ともに極めて多い。拳大越えの礫とともに炉の内外に投棄が集中していた。入り口部には平石を冠した逆位の埋甕が設けられていた。通常ではX字状把手付鉢となる器形だが、把手は当初より付けられなかったようだ。この器形では最大級である。この埋甕(21)と浅鉢・深鉢各2個体(22～25)を図化した。(21)をもって曾利III期の所産とする。(22・24)は第17図に示すようにかなり離れた接合があり、後発のIV期のものであることからも埋没過程で投棄されたものであろう。中期初頭の深鉢(26)も覆土中より出土したがこれは人為的な混入で、例えば本跡

より後発の住居構築の際などに偶然そこに在ったものを埋没しきらないくぼみ(本跡)に投棄したものであろう。拓本は(95~98)で、唐草文系のものや当遺跡ではあまり見かけない重弧文など、曾利II期のものも少なくない。石器は(25・36・48)を含む7点の出土があった。(25)はP5から出土している。



第17図 第16号住居跡実測図(1:60)

第17号住居跡 (第4・18・44・45・53・55・57・59・60図、写真22~24・88~93・132・133)

位 置: GI~GK-72~74グリッド。

検出：Ⅲ層上面で見つかった。

覆 土：中央部はⅠ、周縁部はⅡを基調とするレンズ状の堆積で、自然埋没である。

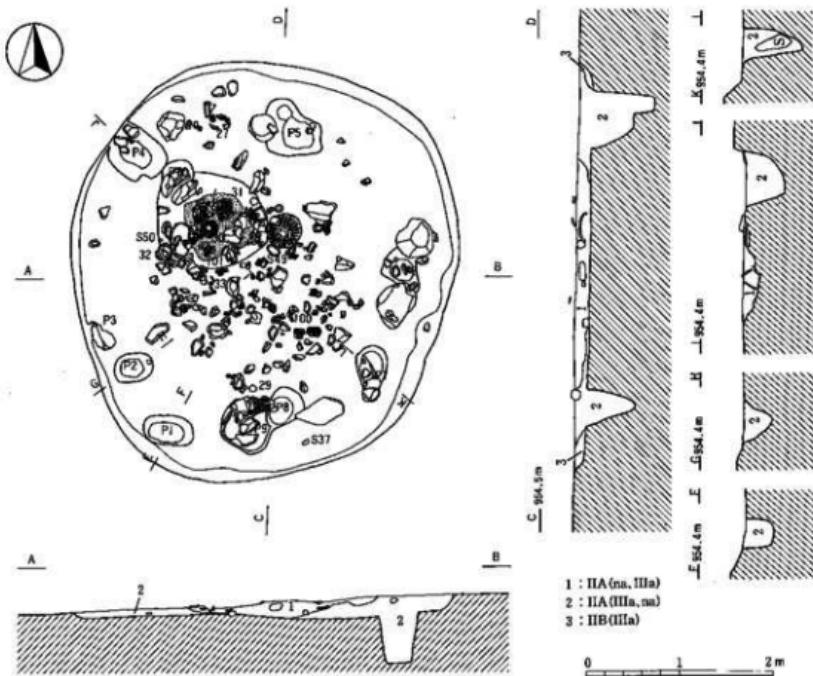
規模・形態：長径455cm×短径409cmの長円形。

床・壁：床は検出面から6～14cmの深さで、あまり堅歯ではない。壁は比較的緩やかに立ち上がる。

柱 穴: P9 を除いて柱穴と考えられ、環状に巡る。

炉 : 15cm程度の浅い掘り込みをもつ地床炉で、掘り込み範囲は102×114cmでやや不定形である。北西側に寄る。中央に深鉢の上半を用いて逆位に据え、炉芯としている。

遺物：土器・石器とともに出土量・密度とも最多・最大である。中期後葉の集落の中で、最も初層に出現した住居と考えられ、結果的に大量の遺物が埋没過程で投棄されたと



第18図 第17号住居跡実測図（1:60）

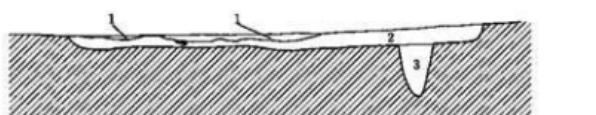
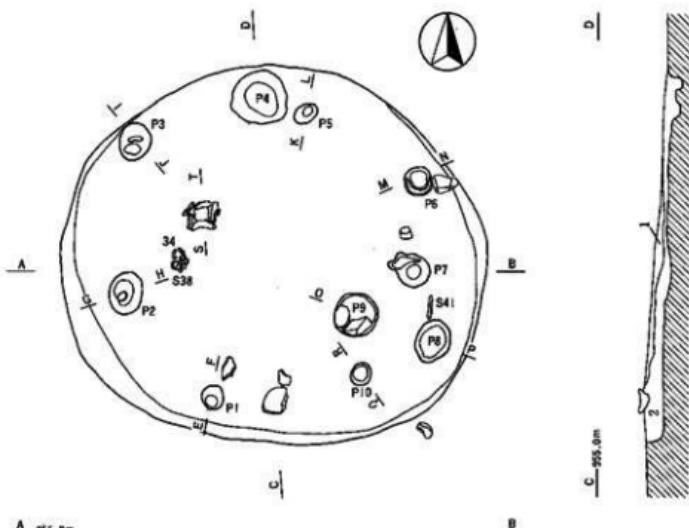
思われる。本跡の土器は(27~33)で、曾利II期に特徴的な縄文の施文、キャリバ一型の器形が目立つ。(30)は炉芯に用いられていた。拓本は(99~101)。(100)は両耳壺片か。石器は(9・10・37・49・50・56・57)を掲載した。石皿は磨石とのセット関係で、穀物の擦りつぶしの用途として通常とらえられるが、(57)のような形状のものは穀物とは無関係であり、磨製石斧製作にのみその用途が求められる。この用途についてもっと取り沙汰されるべきであると常々感じている。

第18号住居跡 (第4・19・45・53・57・58図、写真25・26・128・134)

- 位 置: GO～GR-73～75グリッドで、尾根平坦部から北斜面へ移る平坦部突端。
- 検 出: III層上面で見つかった。
- 覆 土: 2分層したが、いずれも黒褐色で漸移的であり、ローム・ブロックを上層は ϕ ～10mmで5%、下層は ϕ ～100mmで15%含有する。基本層序のIIに相当する。
- 規模・形態: 長径453cm×短径403cmの長円形。
- 床・壁: 特に堅くはない。壁の立ち上がりは傾くが急で、検出面から19cm以下の深さをもつ。北壁は北斜面にかかり、残っていなかった。
- 柱 穴: P1～P3・P5・P6・P7・P10が柱穴と考えられ、環状を成す。P9は貯蔵に関係した施設と思われる。
- 炉 : 細長い礫を5つ並べ、深くは埋設しない。方形石壠炉で中心部より北東方向へ寄る。炉石に被熱の様子がなく、焼土も全く検出されず、規模は31×38×-18cmと小さい。使用の痕跡が窺えないものである。
- 遺 物: 僅少。床面に深鉢底部(34)があった。中期中葉である。拓本は(102)。石器は3点で、すべて凝灰岩製の磨製石斧で、(38)と(41)を図示した。(38)は欠損後の磨きと剝離調整により新たな刃部をつくり出している。乳棒状石斧(41)は未製品ではなく、使用頻度が少ない完形品とみる。

第19号住居跡 (第4・20・46・56・58～60図、写真27・28・94・95・121・124・135)

- 位 置: GM～GO-63～65グリッド。
- 検 出: II層下面～III層上面で見つかった。
- 覆 土: レンズ状の自然堆積で、中央～上層部においてI、周縁部～下層部においてIIを基調とし、壁際には近づくほどロームのブロック径と含有率が増す。
- 規模・形態: 径475～453cmのほぼ円形。
- 床・壁: 貼ってはいないが堅固で、壁は傾き、北側で比較的緩やかである。緩斜面にあるため、北壁で深さ47cm、南壁で8cmである。北西側と南東側では壁直下、北東側では壁からやや離れて周溝が断続する。



$\frac{E_{555.0m}}{F} \quad \frac{G_{555.0m}}{H} \quad \frac{I_{555.0m}}{J} \quad \frac{K_{555.0m}}{L} \quad \frac{O_{555.0m}}{M}$



$$\frac{M_{55.0m}}{N} \quad \frac{Q_{55.0m}}{R} \quad \frac{S_{55.0m}}{T}$$

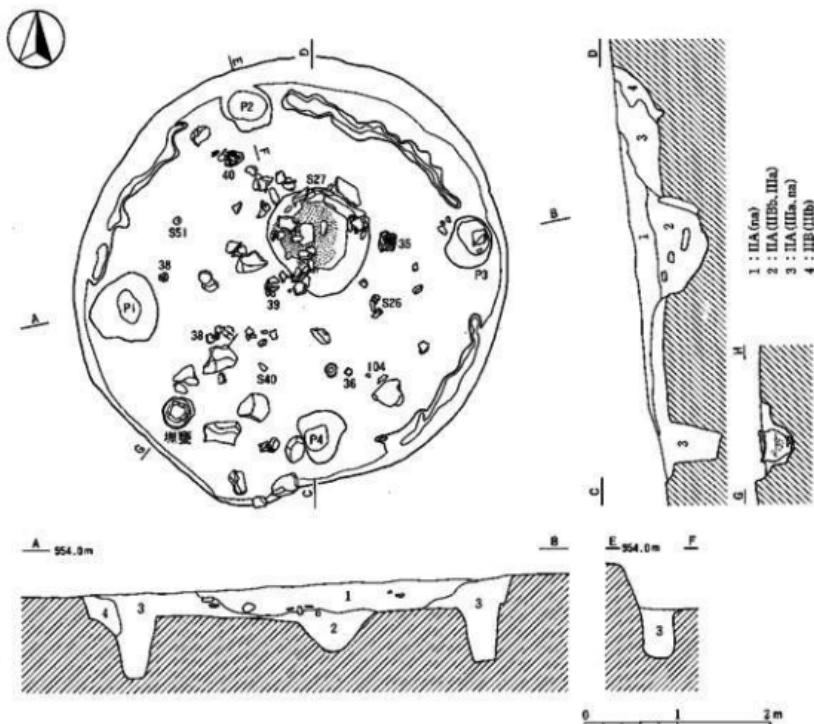
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

- 1 : II A (IIIa, na)
 - 2 : II A (IIIb, na)
 - 3 : II A (na)
 - 4 : II A

A horizontal number line starting at 0 and ending at 2π . There are 8 tick marks labeled $\frac{\pi}{4}$ each, dividing the interval into 7 equal segments. The labels are 0, $\frac{\pi}{4}$, $\frac{\pi}{2}$, $\frac{3\pi}{4}$, π , $\frac{5\pi}{4}$, $\frac{3\pi}{2}$, and 2π .

第19図 第18号住居跡実測図（1:60）

- 柱 穴：規格的な4本柱で床から52～65cmも掘り込まれている。
- 炉 北側の炉石が残存するのみだが、方形石囲炉であったと考えられる。長辺で112cmを測り、巨大化している。炉底はよく焼ける。
- 遺 物：(37)は正位の埋甕で無節の縄文で全体を施文した深鉢の胴部のみを用いている。このほか(35・36・38～40)の5個体を復原できた。(38)は第14号住居跡覆土と遺構間接合し、(40)は炭化物が付着し、煮沸に用いられたことがよく分かる。(38)は絹条体、(39)は無節縄文の押し付けが観られる。(39)は凹状の口縁で、1つのみの把手は欠損している。曾利II期に出現した住居と考えられ、(39・40)は混入であろう。土器片には(103・104)などがある。石器は11点中5点(26・27・40・51・52)を図化した。(52)は叩石としても用いられている。石器の半数は打製石斧である。



第20図 第19号住居跡実測図 (1:60)

第21号住居跡 (第4・21・46・53図、写真29・30・96・134)

位 置 : GP~GR-61・62グリッド、南緩斜面。

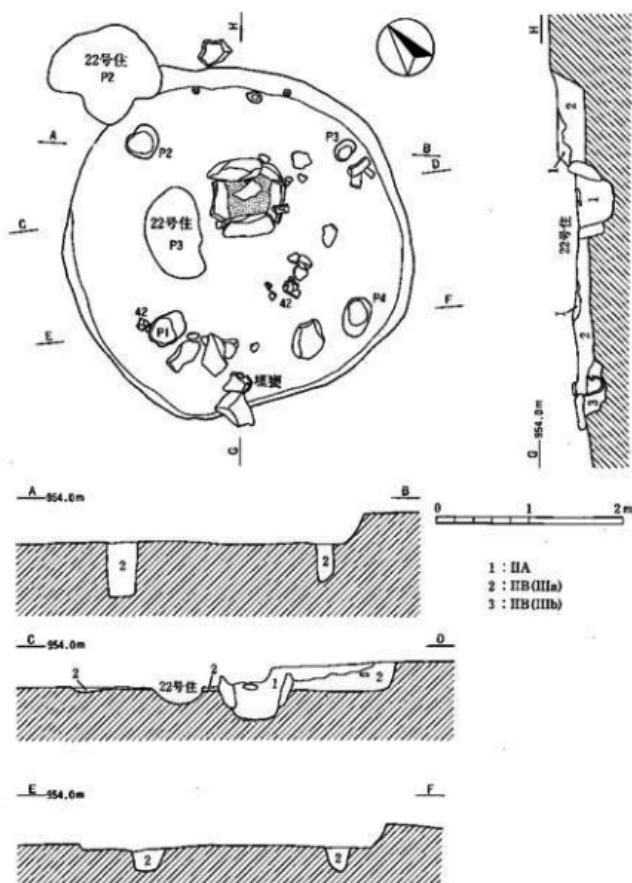
検 出 : 平安住居跡第22号住に切られるが、東側・南側ではII層下面において明瞭だった。

炉石が第22号住居跡の床面以上に露出しており、第22号調査時から遺物が頻出した。

覆 土 : IIを基調とする自然堆積で、2分層した。

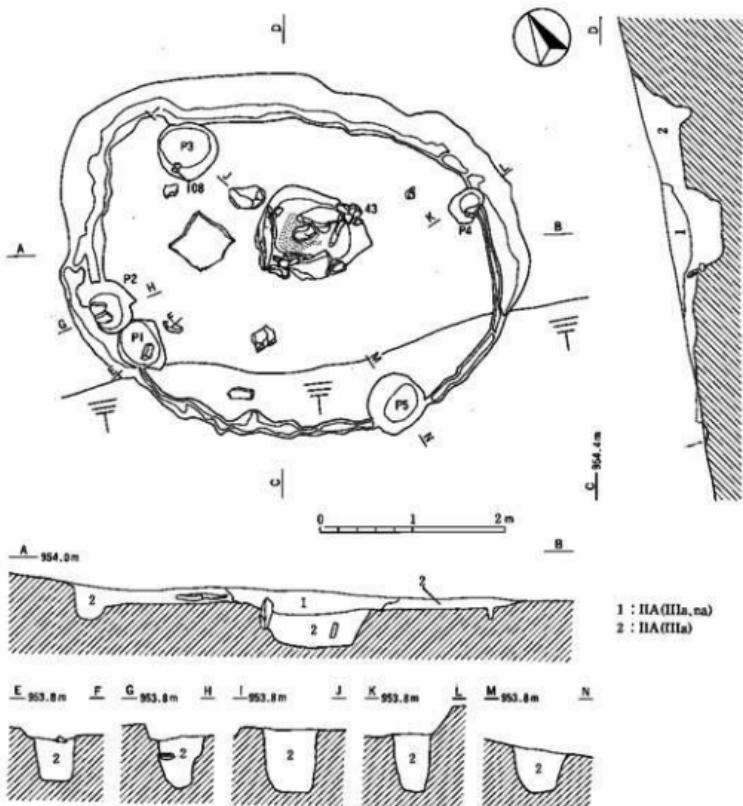
規模・形態 : 径373cmの円形である。

床 壁 : 叩いてはいないが、比較的堅固な床をもつ。緩斜面にあり、北東は検出面からの深



第21図 第21号住居跡実測図 (1:60)

- さ36cm、南側では10cmに満たない。北西～西壁は切られて残らない部分もある。
- 柱穴**：P1～P4の4本主柱で長径24～44cm、深さ23～59cmと差が大きい。奥壁（北東）で径は12cm以内だが、60～80cmと異様に深い壁柱穴3基の内部は空洞化していた。
- 炉**：方形石窯炉で規模は77×83cm×31cm。炉底は焼け、炉石は床面から10cm以上露出する。
- 遺物**：(41)は正位の埋甕で、底部から胴部にかけて打ち欠いてある。蓋石と思われる平石が斜面の下方にずれ落ちていた。粗雑な沈線が施された(42)は離れた土器片が接合し、埋没過程の投棄だと思われる。拓本は(105・106)。石器は、図を掲載していないが凹石が2つのみ。埋甕をもって曾利III期とできる。



第22図 第23号住居跡実測図 (1:60)

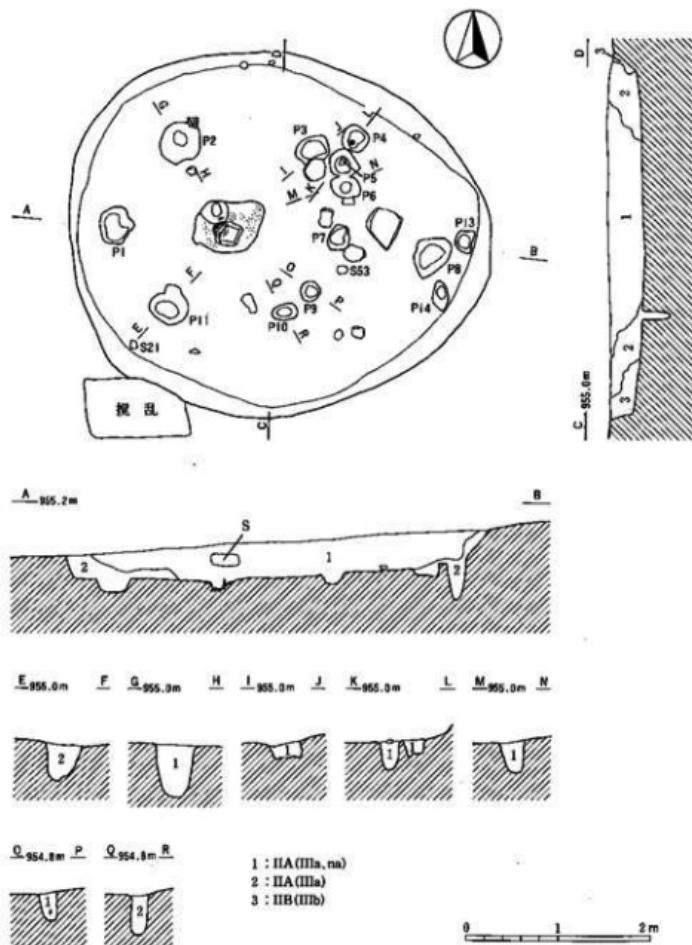
第23号住居跡 (第4・22・47・53図、写真31・97)

- 位 置：GS～GV-58～60グリッド、南斜面。
- 検 出：遺物や落ち込みが検出面から観られ、住居跡の存在は調査当初から判ったが、竪穴は丸いという先入観から、小竪穴との重複としてIII層上面で検出したが、小竪穴は存在せず、等高線方向に長い住居跡であることが判明した。
- 覆 土：自然埋没で、IIよりも若干腐植が進行した黒褐色土で、平断面とも中央部ほど暗い色調を呈し、中央部はφ～20mm、周縁部はφ～50mmのローム・ブロックを含有する。
- 規模・形態：505×391cmの隅丸長方形プラン。
- 床 壁：貼り床ではないが、比較的堅い。壁は60度ぐらいの傾斜で北東側で壁高52cmだが、傾斜地のため南西側では残らない。壁直下に周溝が全周する。
- 柱 穴：P1・P3・P4・P5の4本主柱で壁柱穴気味に壁に寄り、周溝に重なる。P2も柱穴として申し分ないが、他の3本との関係で位置が不適正なためP1を掘り直したか。
- 炉 125×98cmだが、石圓いは方形を成していたと思われる。炉北西の大きな平石は被熱し、北東側の炉石を抜き棄てたものか。炉の底部は著しくは焼けない。
- 遺 物：唯一の床面遺物、炉脇の(43)を図示した。これより曾利III期に帰属される。石器は出土しなかった。覆土上層に棄てられた遺物が多い。(107・108)を拓影化した。

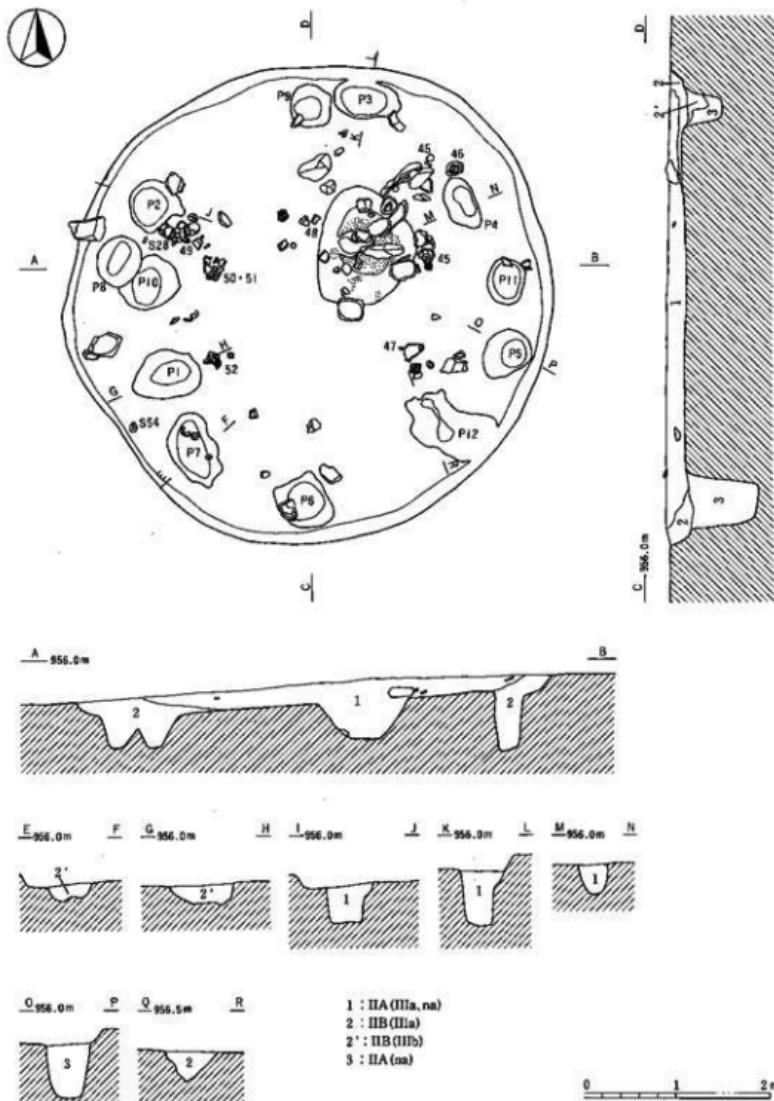
第24号住居跡 (第4・23・47・53・55・56・60図、写真32・34・98・118・120・136)

- 位 置：GU～GX-63～65グリッド。
- 検 出：III層上面で明瞭に見つかった。
- 覆 土：断面は壁際にローム・ブロックを含有した三角堆土をもち、中央部はIを基調とする単層である。
- 規模・形態：長径462cm×短径393cmの長円形である。
- 床 壁：踏まれて堅い。中央部に較べ、周縁部はせり上がっている。壁は傾き、25～38cm検出面から下がる。
- 柱 穴：P1～P3・P5～P7・P9・P10が環状を成すが、P1・P3・P7は他の穴の深さに比して柱穴とは考えにくい。P8・P13・P14は入口施設に関係する柱穴であろう。
- 炉 5cm程度窓んだ不整形の地床炉の中央に、深鉢の胴部2/5周を埋設したもので、うっすらと焼土が形成されている。埋設土器片の内部は10cm程度の深さがある。炉の範囲の北端に深さ33cmのピットがあるが、この中は被熱していない。
- 遺 物：覆土から床まで僅少。炉に用いられた土器(44)は胴部上端が度重なる使用で摩耗

し、覆土中の同一個体で炉に用いられなかった部分と接合したが、摩耗部分が観察できる状態で復原は止めた。出土少ない土器片の中から(109~112)を拓本で掲載した。(110)は平出III類A式、(111)は有孔鉢付土器口縁、(112)は無文。石器はスクレーパー(18)、粗製石匙(21)、凹石(53)がある。



第23図 第24号住居跡実測図 (1:60)



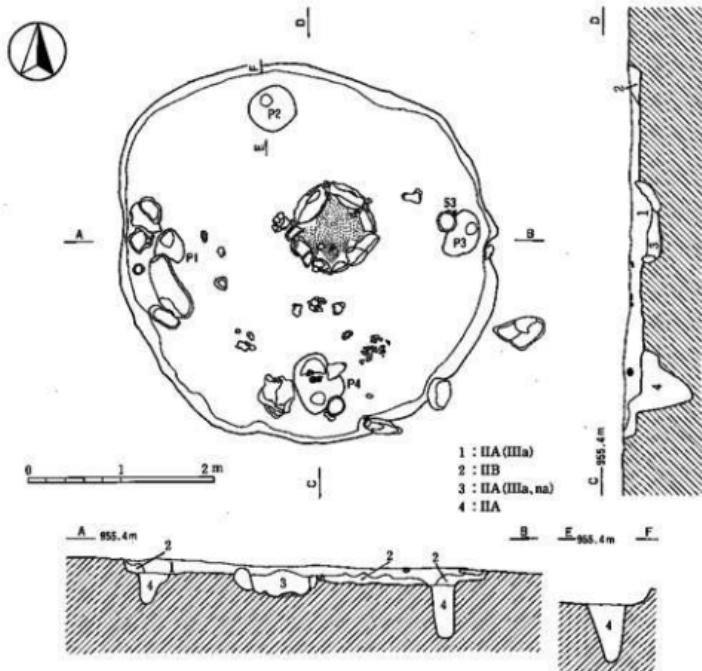
第24図 第25号住居跡実測図 (1:60)

第25号住居跡 (第4・24・47・48・53・55~57図、写真33・99・100・116・125・136)

- 位 置：HB～HD-60～63グリッド。
- 検 出：II層下面で見つかった。
- 覆 土：IIを基調とする黒褐色土で、壁際は暗褐色となる。φ～30mm以下の微量のローム・ブロックを含有する。
- 規模・形態：径516～507cmの円形で、該期の他の住居跡に比して入り口部が西に振れる。
- 床 壁：床はあまり堅緻ではなく、壁は50度程傾き、検出面からの深さは最大25cmを測る。
- 柱 穴：4本柱を基本とする上屋構造と考えられ、切り合い・位置関係からP10・P9・P11・P6→P2・P3・P5・P6→P8・P9・P5・P6と建て替えが想定される。P1・P7は入り口施設に関係するピットであろう。
- 炉 石：石圓炉と考えられるが、廃絶時かその後、破壊されている。炉石を除いた内法は東西方向で92cmある。炉底は焼ける。北東部に寄る。
- 遺 物：埋没過程で多くの遺物が投棄された。(45～52)を実測、図化したが、曾利II～IVまで幅があり、床面から検出面までよく接合している。遺跡全般に言えるが、つくりが小ぶりで極めて粗雑である。拓本は(113～115)。(113)は僅かに縄文が認められる。石器は、石鐵、打製石斧(15・28・30・34)、凹石(54)がある。(15)は基部を局部的に磨いている。(30)も局部磨製。

第26号住居跡 (第4・25・48・53図、写真35・36・101)

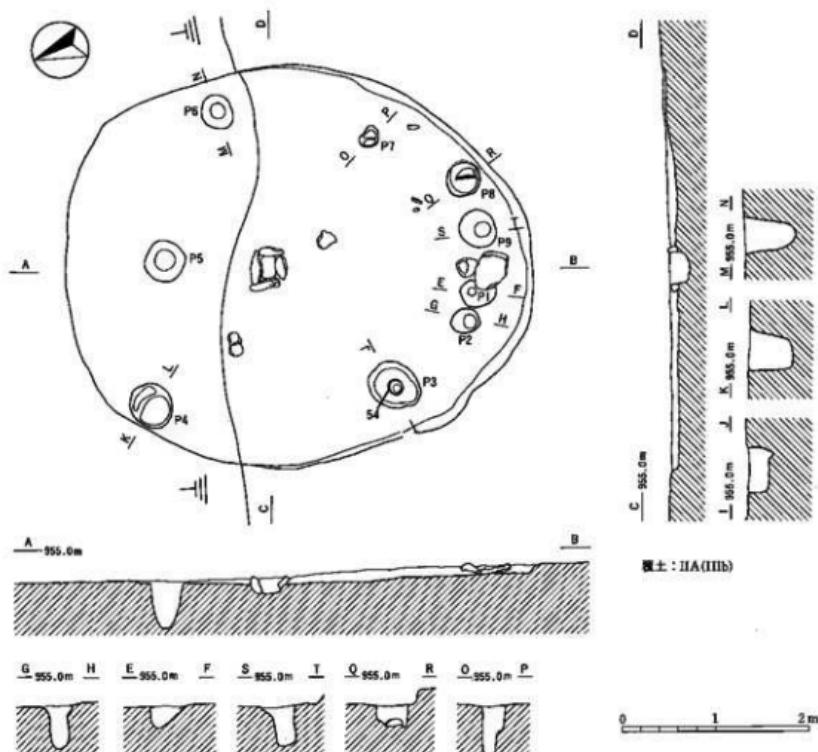
- 位 置：HA～HC-69～71グリッド。
- 検 出：III層上面で明瞭であった。
- 覆 土：Iを基調とする黒褐色土で、底部・壁際でやや明るい色調となる自然堆積。微量のローム・ブロック(φ～50mm)を含有する。
- 規模・形態：434×407cmで円形。
- 床 壁：掘り形を平坦に踏み固めただけで、あまり堅緻ではない。壁は垂直ではないが、急な立ち上がりである。
- 柱 穴：主柱穴P1～P4が48～62cm床から掘り込まれる。入口部の両側のP1・P4は平石や枕石状の大きな石が柱の脇に配される。
- 炉 石：大きめの平石7枚の間隙を小砾で塞いだ94×96×-20cmの方形石圓炉で極めて良好な遺存状態であった。
- 遺 物：遺物は多いが埋土中に浮いたものが多く、土器片はあまり接合しない。投棄の惨状を示す。胴下半を欠く下伊那タイプの深鉢(53)が床面上P3脇に置かれていた。拓本は(116・117)で、(116)は横走する交互の刺突文。石器は、凹石と磨石各1点がある。



第25図 第26号住居跡実測図 (1 : 60)

第27号住居跡 (第4・26・48・53・58図、写真38・102)

- 位 置：GV～GX-73～75グリッドで、尾根平坦部から北斜面へ移る平坦部突端。
- 検 出：耕作土を取り除いた時点で、炉石や床面直上の乳棒状磨製石斧が露出していた。北半は床面～床下に達し、既に覆土がなかった。III層上面で、北半は掘り形の残痕を拾ってプランをつかんだ。
- 覆 土：深いところでも10cmであり、IIが堆積していた。
- 規 模・形 态：長径500cm×短径435cmの長円形。
- 床 壁：床は叩き締めてはいないが、比較的堅い。壁は僅かしか残っていない。
- 柱 穴：P2～P9が柱穴と考えられ、やや整わないが環状を成す。
- 炉 焔：ほぼ中央に細長い石4つを方形に据えた石囲炉38×47×-12cmがあるが、焼土は皆無で使用的痕跡はない。立地も含め、西方で同時期の第18号住居跡と共通項が多い。
- 遺 物：土器片は(118・119)を含む30片程度、(54)はP3直上にあり、輪積みに沿って欠損した深鉢の下半部の破断面を磨って(凝口縁)、鉢として再利用したものであ



第26図 第27号住居跡実測図 (1 : 60)

る。石器は乳棒状石斧（42）がある。（42）はかなり使用が進行し、当初は（41）程度の長さをもつものと考えられる。

第28号住居跡 (第4・27・53・57図、写真37)

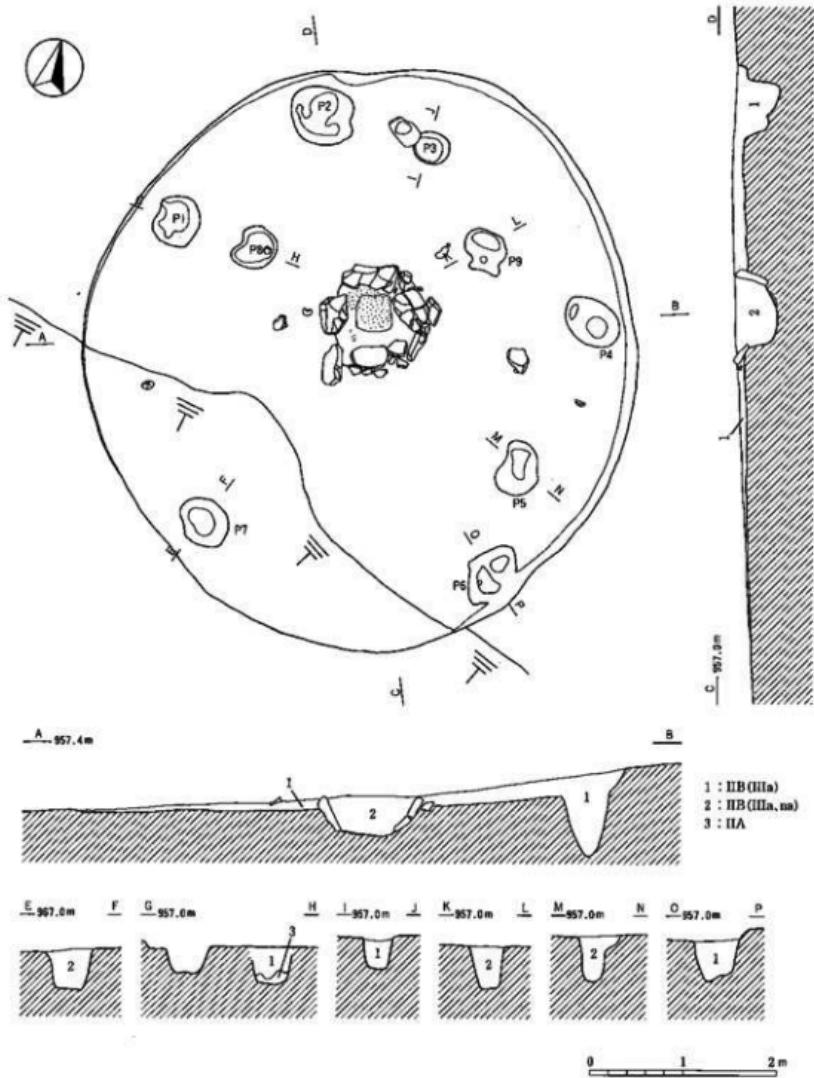
位 置: HG~HJ-58~61グリッド。

検 出: 表土剥ぎの時点から疊・遺物が頻出した。II層下部~III層上面で検出したが、明瞭ではなかった。

覆 土: IIが単層で堆積する。

規模・形態: 径622~586cmで、円形といえる。

床・壁: 床はやや軟弱で壁は傾く。南西側の壁は検出できなかった。

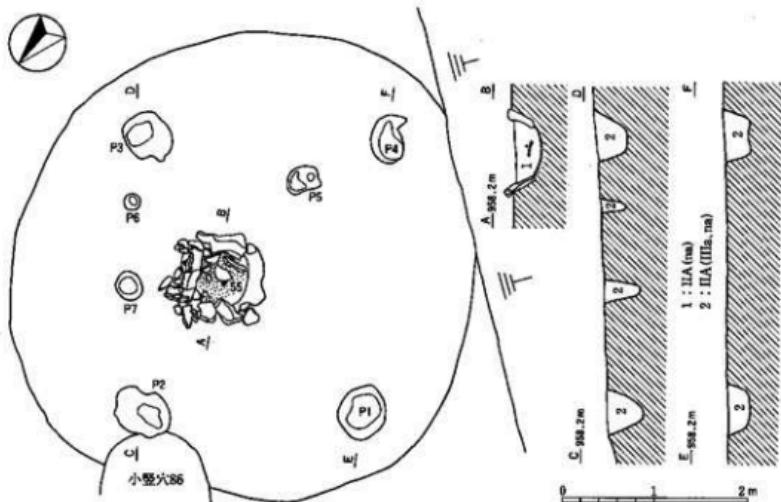


第27図 第28号住居跡実測図 (1 : 60)

- 柱** 穴：P1・P3・P4・P6・P7の5基が主柱穴と考えられる。P8・P9は床下検出ピットで、本跡への帰属性は不明である。
- 炉** :やや炉石は動いているが、 $123 \times 115 \times -30\text{cm}$ の方形大型石匂炉で、平石や角礫合計16個を配する。底は焼ける。
- 遺物** 物：遺物は少くないが、ほとんどが覆土上層に投棄されたもので、床面遺物がない。
個体としてはひとつも復原できなかった。破片のうち、(120～122)を拓本化した。
石器は、凹石1点と打製石斧3点がある。凹石と打製石斧(31)は床面出土である。

第29号住居跡 (第5・28・49・53・55図、写真39・103)

- 位** 置：HO～HQ-60～62グリッド。
- 検** 出：農道下から見つかった。農道の盛土・碎石を取り除く途上から炉石が露出した。III層中の検出。小豊穴86に切られる。
- 覆** 土：検出面で既に床下であった。炉の覆土はIIより腐植が進行した黒褐色土である。
- 規模・形態**：径492cmの円形。掘り形を拾って辛うじてプランが分かった。
- 床** ・ 壁：検出面が既に床下で、床も壁も残っていない。
- 柱** 穴：主柱穴はP1～P4で、残存する深さは検出面から25、36、60、26cmである。
- 炉** : $96 \times 92\text{cm}$ の方形石匂炉で、検出面から33cmの深さが残る。底はよく焼ける。
- 遺物** 物：炉内から(55・123)が割れて出土した。これらは敷いてあったものではない。

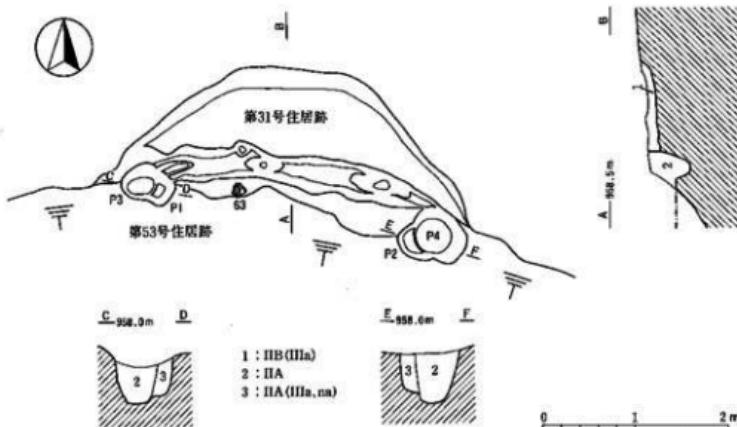


第28図 第29号住居跡実測図 (1:60)

(55) は隆沈線や渦巻状の区画が無く、口縁部を除く全体を刺突だけで充填している点で特異。(123) は(38)と同様な区画が見られる。床下から石錠(11)が出土した。本跡は曾利III期か。

第31・53号住居跡 (第5・29・49・53図)

- 位 置：HY～IB-58・59グリッド。
- 検 出：農道下のIII層中より検出し、当初1軒の第31号住居跡として掘り下げに入った。農道の南側は水田造成により尾根の原地形が削られて崖状となっており、第53号住居跡の壁を調査途上ではこの崖と誤認していたが、直下に周溝が巡り柱穴が見つかるに至り、竪穴住居跡と判明した。床面レベルに著しい差があり、覆土が縦に分けられるという点から、第31号住居跡を第53号住居跡が切ると判断した。第31号住居跡は、壁線の弧の描き方と規模、平坦な底面が住居跡のそれらであると考えたが、住居跡であるという確証はない。竪穴状遺構と呼ぶべきか。
- 覆 土：第31号住居跡の方はIIを基調とする暗褐色土、第53号住居跡の方はIIより腐植の進行した黒褐色土で、それぞれローム・ブロックを、 $\phi \sim 30\text{mm}$ で5%、 $\phi \sim 70\text{mm}$ で15%含有する。
- 規 模・形 狀：いずれも過半を失うので不明だが、第31号住居跡は径4m強の円形、第53号住居跡は長径5m前後の隅丸長方形のプランと推測する。
- 床 ・ 壁：第31号住居跡は平坦で堅くない床から緩やかに壁が立ち上がる。第53号住居跡は垂直ではないが、急な壁直下に周溝が巡り、床の状況は残存部が僅か過ぎて不明である。



第29図 第31・53号住居跡実測図 (1:60)

る。検出面との比高はそれぞれ16cm、29cmである。

- 柱 穴：第53号住居跡はP3・P4→P1・P2の建て替えが認められる。4本主柱と推測される。第31号住居跡の残存部には柱穴は無い。
- 炉 　：水田造成で破壊されて不明。
- 遺 物：第31号住居跡は土器片が僅少。曾利IV期の(124)、有孔鍔付土器(125)を図化した。第53号住居跡は唯一の遺物として土器底部(63)のみである。床面遺物である(63)から第53号住居跡は曾利IV期、第31号住居跡はそれ以前としか言えない。

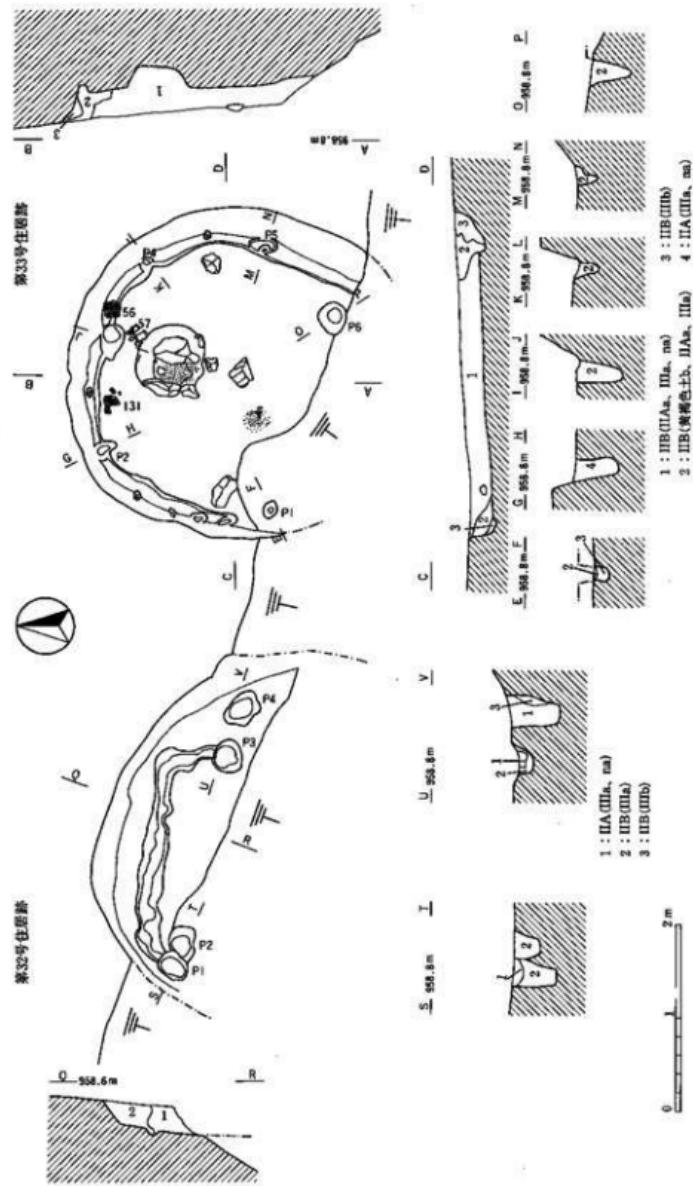
第32号住居跡 (第5・30・53図)

- 位 置：IH～IJ-55・56グリッド
- 検 出：両側の地形を水田造成で壊された幅3mの農道下にわずかに残る。III層上面で不明瞭に検出される。水田造成で破壊を受け、残存部は全体の1/4か。
- 覆 土：周縁部にII、その上にIが堆積する。
- 規模・形態：径420cmの円形と推測される。380×128cmが残存。
- 床 　壁：床は軟弱。壁は曲線的に立ち上がり、検出面からの深さ28cmを測る。壁から6～30cm離れて、幅12～29cmの周溝が床面から9～17cmの深さでP1・P3間を巡る。
- 柱 穴：P2・P4→P1・P3の建て替えが観られた。4本柱と推測される。
- 炉 　：水田造成で破壊されて不明。
- 遺 物：土器片僅少。文様が分かるのは(126・127)のみである。中期後葉と思われるが判然としない。

第33号住居跡 (第5・30・49・54図、写真41)

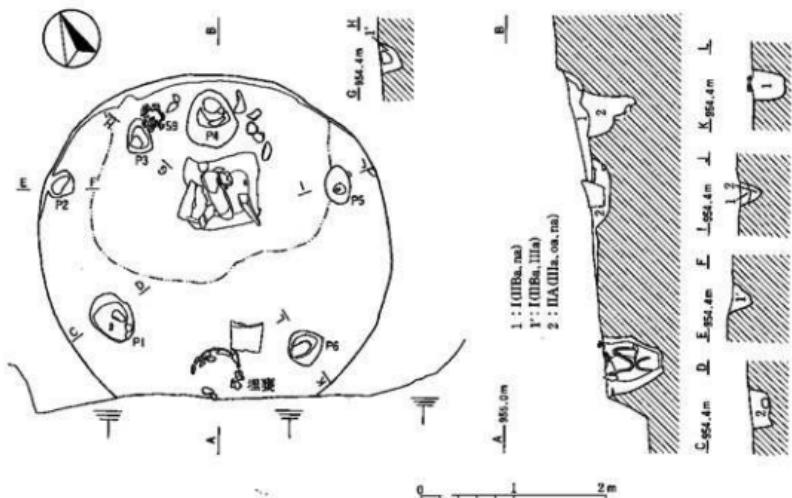
- 位 置：IK・IL-55～57グリッド。
- 検 出：農道下で生きた面が残り、その両側は水田造成で破壊されたが、その農道下にあって過半が破壊を免れた。III層上面で比較的明瞭であった。
- 覆 土：IIが堆積。壁際に三角堆土があり、自然埋没である。
- 規模・形態：欠損部を推測して径350cmの円形。
- 床 　壁：床は堅なく凹凸が激しい。壁は一般的な傾きで、壁直下に周溝が一巡する。検出面からの深さ32cmで、周溝は幅15cm前後、床面からの深さ4～13cmである。
- 柱 穴：柱径の差はあれ、P1～P6はすべて柱穴と考える。この他にピット番号を付さない小さな壁柱穴が周溝内に6基ある。
- 炉 　：方形石圍炉であったが、南北の炉石が持ち去られている。規模は78×72×-20cmで、かなり奥壁に接近する。
- 遺 物：(56・57・131)とも床面遺物である。石器は無かった。本跡は曾利IV期である。

第30圖 第22·33号住居断面測量圖 (1 : 60)



第35号住居跡 (第5・31・49図、写真43・104・105)

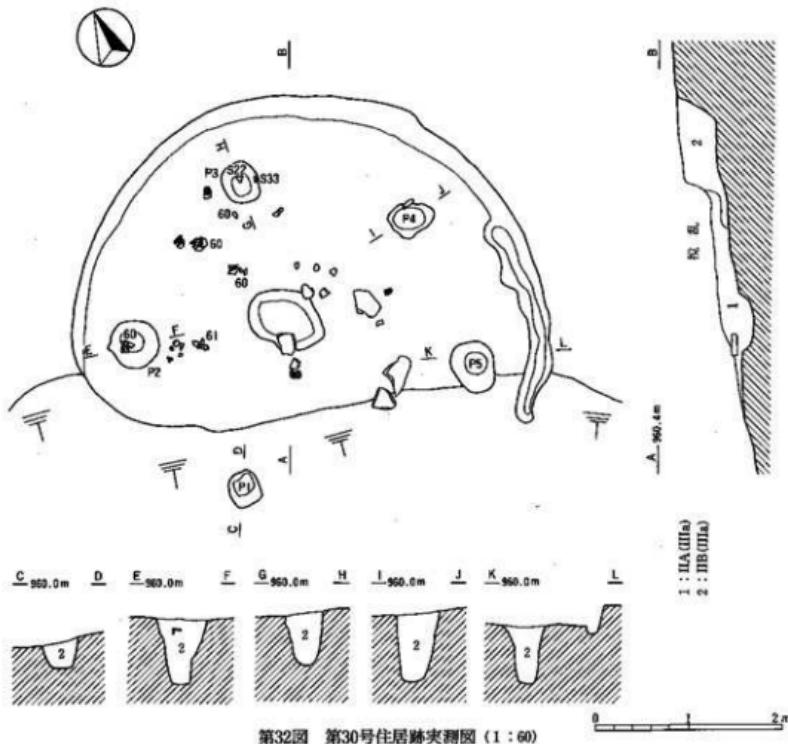
- 位 置：II～IK-47・48グリッドで尾根斜面端部。
- 検 出：西側でIII層上面、北東側でII層中、南東側でI層下面という異なる層に跨がって検出された。傾斜地に造られたためである。現耕土を除くと炉石と埋甕が露出した。
- 覆 土：IIを7%程含んだIが単層で堆積する。
- 規模・形態：径377cmの円形。
- 床 壁：奥壁から炉の周辺に貼り床をもつ。漆黒の腐植土中に床を貼ってあったため、掘り損じて抜いてしまった。曲線的に立ち上がる壁は北側のみ残り、壁高30cmである。
- 柱 穴：P1・P2・P4・P5・P6が柱穴と考えられる。
- 炉 炉：方形石圍炉で、北側炉石は土圧でか、炉の中央へ80度程ずれ込んでいる。埋甕北東脇の平石は埋甕の蓋ではなく、南側の炉石と考えられる。規模は78×74×15cmで、やや奥壁に寄る。底部の焼土はごく僅かであるが、炉石はよく焼けている。
- 遺 物：正位の埋甕(58)は底部から胸部への立ち上がりの一部、底部の一部と、X字状把手を打ち欠いて埋設してあった。口縁部は1片が接合し、打ち欠いてあったのではなく、耕作で失われたと考えられる。(59)は奥壁の床面上に置かれたものである。(58・59)を除いては遺物は極めて少ない。石器は出土しなかった。本跡は曾利II期に出現した住居である。



第31図 第35号住居跡実測図 (1:60)

第35号住居跡 (第5・32・50・55・58図、写真107・122・127・129)

- 位 置: IS~IV-57~59グリッドの南緩斜面。
- 検 出: III層上面~中で明瞭。
- 覆 土: 中央部にIIより腐植の進行した黒褐色土、周縁部にIIが堆積する。
- 規模・形態: 径510cmの円形と推定されるが、南1/3を流失している。
- 床 壁: 床は竪穴のままで特に堅緻な部分は無い。壁は北側の約半周が遺存する。最深40cmで、傾斜は急である。
- 柱 穴: 5基の主柱穴が検出された。床から68~75cm掘り込まれている。
- 炉 : ほぼ中央部に76×60×-16cmの掘り込みをもつ。埋土中に $\phi \sim 5$ mmの焼土粒を1%未満含有するが炉底・炉壁は焼けず、使用した痕跡が無い。炉石は一切無い。
- 遺 物: 土器は床~覆土出土の破片から(60)を復原した。(61)の浅鉢は内外に漆を塗り、底部は平底を作り出さず丸底であり、丸底部分にも繩文を施してある。漆は遺存が



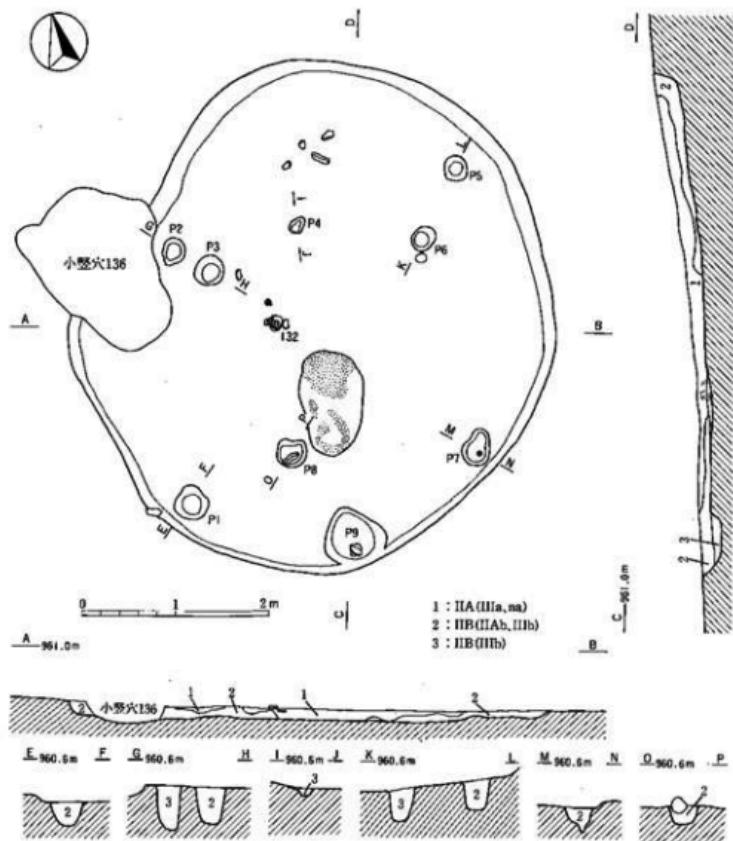
第32図 第30号住居跡実測図 (1:60)

悪く、外側は塗彩内容が分からぬが、内面は6角形と同心円をモチーフとしているようだ。これらより本跡は新道～藤内Ⅰ期に相当する。石器は種類が多く、10点以上を出土した。石鏃(12)、石匙(22)、打製石斧(32・33)、乳棒状石斧(43)を図化した。

第39号住居跡 (第6・33・53・54図、写真45)

位 置: JP~JS-58~61グリッド。

検出：三層上面で見つかった。



第33図 第39号住居跡実測図（1:60）

覆 土：中央部から上層にⅠを基調とする黒褐色土、周縁部から下層にⅡを基調とする暗褐色土が堆積。自然埋没である。

規模・形態：490×550cmの不整長円形。

床・壁：床はあまり堅緻ではなく、地形の傾斜をそのまま床面に受け入れているので、北端と南端では床面の絶対高が50cmも違う。壁高は検出面まで9～25cmで緩やかである。

柱穴：P1～P3・P5～P7が柱穴と考えられる。

炉：わずかに窪んだ地床炉で66×112cmの不整長円形。

遺物：覆土中に(129・130)、床面に(132)の中期初頭土器片、石器は打製石斧・スクレーパーがあったが遺物は極めて少ない。(129)は結節縄文、(130)は結節浮線文と格子目状の沈線文で、(132)は蹄場遺跡を示標とするいわゆる「竈目」が施文されている。

第51号住居跡 (第5・34・49・54図、写真53・106)

位置：II～IL-49～51グリッド、南斜面。

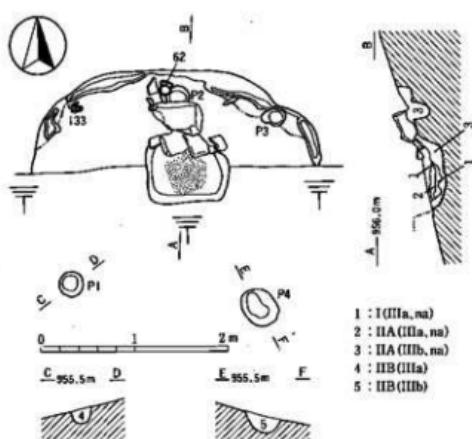
検出：III層上面で、ロームの褐色に対し黒色の半月形に見つかった。下半を流失していたが、主柱穴2基は下部が残存していた。

覆土：IとⅡを基調とする黒褐色土が堆積する。炉内はレンズ状堆積が観られた。

規模・形態：310×145cmが残存するが、320×280cm前後の隅丸長方形か。

床・壁：残存部は全面貼り床で、垂直に近い壁が最深16cmを測る。壁直下に周溝が断続する。

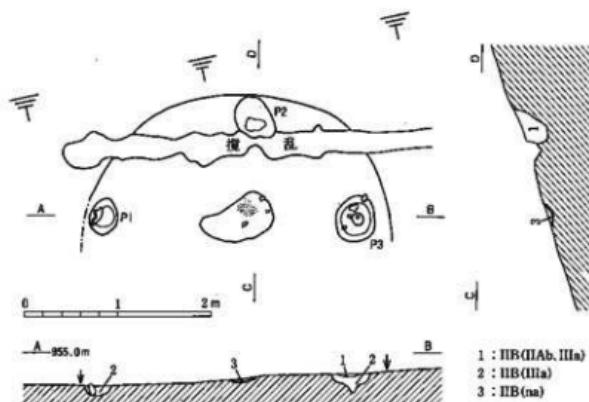
柱穴：P1～P5が柱穴と考えられる。



第34図 第51号住居跡実測図 (1:60)

炉：88×74cm×35cmで、南端は流失しているので本来方形であると推定される。炉石は北側のみ残る。底部は焼けている。

遺物：小型の唐草文系深鉢(62)が口縁を欠損して奥壁際に置かれていた。(133)も床面遺物だが曾利IV期で時期が合わない。これら以外の土器片は僅少である。石器は無い。



第35図 第52号住居跡実測図 (1:60)

第52号住居跡 (第5・35図)

- 位 置：IE・IF-49・50グリッド、南急斜面。
- 検 出：I層中で、炉底部と柱穴の下部が先ず検出された。北半のプランは掘り形の範囲をつないだものである。
- 覆 土：炉内・柱穴内ともIIを基調とする。
- 規 模・形 态：円形の竪穴だったと思われるが不明。
- 床 ・ 壁：検出面で、床も壁も残っていないかった。
- 柱 穴：P1～P3の他に2基即ち5本主柱と推測される。
- 炉 一：少なくとも20cm程度の掘り込みはもっていたと思われるが不明。
- 遺 物：皆無である。

(2) 小 竪 穴

小竪穴はいわゆる「穴」であり、検出面において下方へ掘り込みのあるものの総称で、形状や用途によって呼称を変えることはせず、検出時点において順次登録した。このため、様々な性格のものを含み、調査時点で擾乱や倒木痕と判明したもの、穴の体を成さなかったものは欠番とした。遺物・覆土により、縄文か平安かのある程度積極的な時期判定を試み、疑問符付きも含めて縄文と思われるものは126基を数える。これらのうち、担当者が重要であると判断したもの、拓影掲載土器片を出土したものを含む2割に相当する26基を図化し、以下に説明を加える。なお、図表から読み取れる情報は極力記述せず、図表から読み取れる情報以外の情報が無い場合は、特に項を設けないものとする。

小豊穴3 (第3・36図、写真63)

当遺跡でも最も古相の住居跡群があるD区の南斜面にあり、長軸が等高線の方向にある落とし穴である。坑底は長方形となる。底部小穴は深さ12~25cmである。遺物は皆無である。

小豊穴8 (第3・36図、写真55)

当遺跡でも最も古相の住居跡群があるD区の南斜面にある。断面で最下層は、この小豊穴を掘ったときに周りに積み上げられたローム・ブロックが、そのまま埋没したものと考えられる。用途は不明で、遺物は皆無である。古代以降の土坑の可能性もある。

小豊穴21・25 (第3・36・54図、写真57・137)

集落の拠点からやや外れた尾根頂部にあって隣接する。中央に角礫が底部より少し浮いてある。小豊穴21は、角礫の直上に当遺跡では希有な加曾利E系の大きな破片(134)があった。角礫・土器片とも意図的に配されたもので、墓坑ということも推測できる。

小豊穴22 (第4・36・54図、写真64)

落とし穴である。底部小穴は坑底から14~33cmの深さがある。その在り方から、打ち直しがあったと考えられ、再利用されている。坑底は溝状を成す。尾根の南斜面にあって、長軸は等高線の方向にある。粗雑な沈線文による曾利III期の土器片(135)を出土し、第10号住居跡を切る。

小豊穴40 (第4・36・54図)

G区尾根平坦部南端に位置し、(136)を出土している。

小豊穴42 (第4・36図)

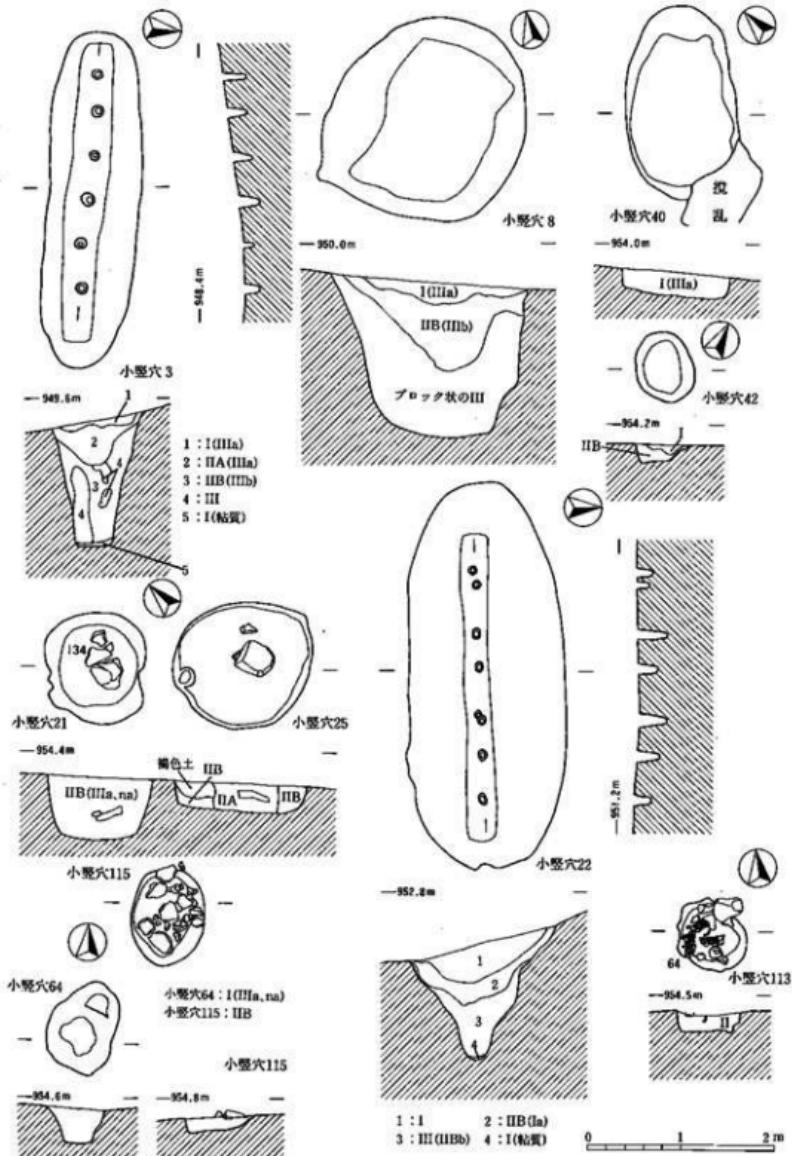
G区尾根平坦部に在り、(137)が出土した。

小豊穴47・48 (第4・37・57・60図、写真58・137)

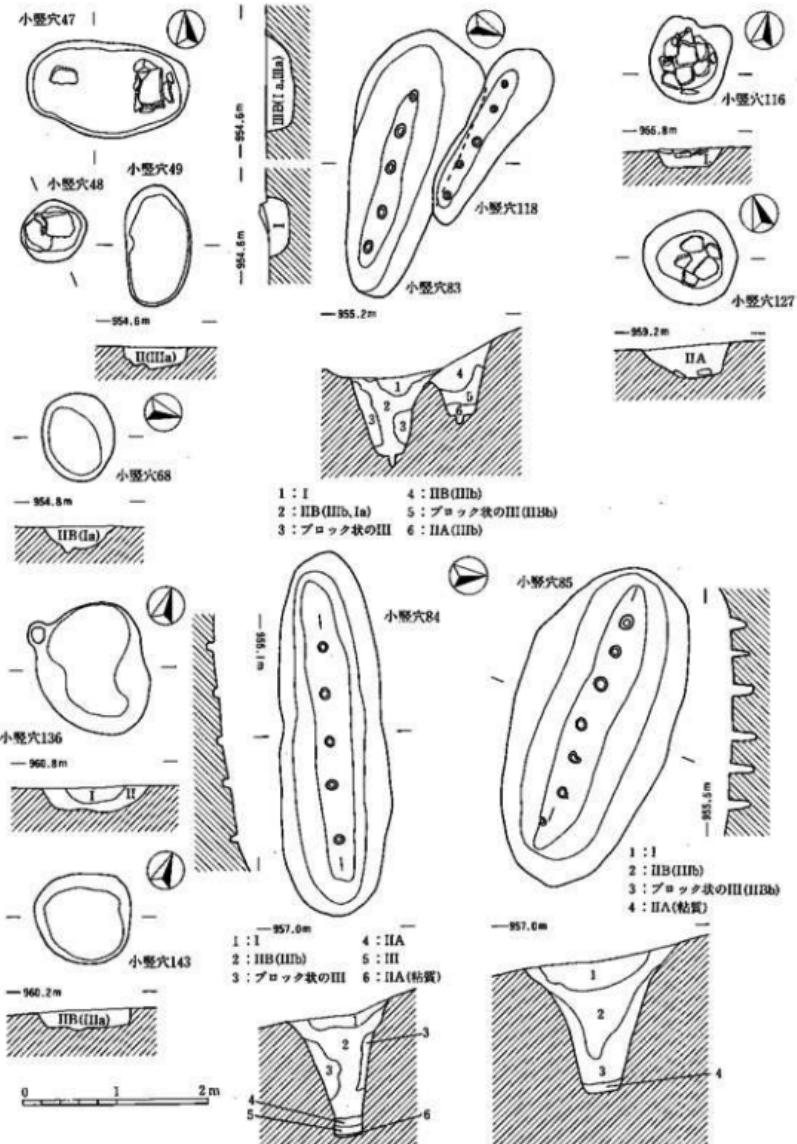
いずれも集落の拠点であるG区尾根平坦部の北端に位置する配隕坑である。小豊穴47は拳大以上の角礫を箱状にし、平石で覆ったような配隕状況である。土坑墓とも推測し得る。小豊穴48は平石3枚を主体に組んである。この平石とは別に打製石斧(34)と磨石兼凹石(55)が出土した。

小豊穴83・118 (第4・37図、写真67)

いずれも落とし穴であり、118を83が切る。H区の南急斜面に位置する。ともに自然な埋没状況にあるが、83の断面は壁際に大きなローム・ブロックが貼り付く。上方にやはり落とし穴である小豊穴84・85があり、当遺跡の7つの落とし穴のうち、4つが4×8m程の範囲に集中する。



第36図 小型穴群実測図(1) (1:60)



第37図 小窓穴群実測図 (2) (1 : 60)

小豊穴84・85 (第4・37図、写真65・66)

隣接する落とし穴とともに自然埋没、長軸は等高線方向にある。坑壁の勾配が屈折する構造は同じだが、短軸径と底部小穴の深さが異なり、微妙な工法の違いから併存したとは考えにくい。

小豊穴113 (第4・36・50図、写真59・108)

集落の拠点であるG区の尾根平坦部の北端にあり、覆土中に深鉢3/4個体分の土器片が碎けて無秩序に詰まっていた(64)。この土器より曾利III期の土坑とする。

小豊穴115 (第4・36図)

G区の尾根平坦部の北端にある屋外集石炉で、礫38個から成る。礫はよく被熱している。

小豊穴116 (第4・37図、写真61)

屋外集石炉で、礫17個から成る。礫はよく被熱している。当遺跡で最も集落の拠点であるG・H区尾根平坦部の北東の外れの北斜面の始まり部分にある。

小豊穴127 (第6・37図、写真62)

J区のほとんど遺構がない南斜面に単独である配石炉である。集石炉の数多くの集石を取り除くと、坑底に本跡のような配石が見られる場合があるが、その上部の集石をもたない屋外炉である。石は被熱している。

小豊穴129 (第6・38図、写真68)

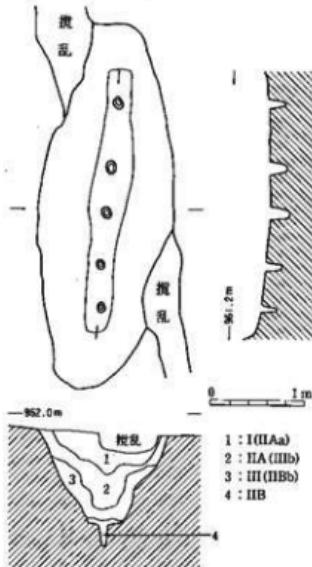
落とし穴である。他に遺構がほとんど無いJ区の尾根頂部に単独で在り、長軸の方向は尾根の方向である。底部小穴の深さは約20cmである。坑底が長方形を成す。

小豊穴136 (第6・37・54図)

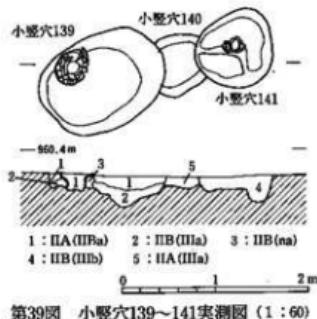
第39号住居跡を切る。中期初頭の小豊穴である。結節縄文土器片(139)が出土した。

小豊穴139 (第6・39・51図、写真60・109)

輪積み成形の繋ぎめから下半を欠損した梨久保式の深鉢(65)を、正位で坑底に据える。籠目状の集合沈線文である。同時期の第39号住居跡が隣接するが、明らかにそのプランには取り込まれない。



第38図 小豊穴129実測図 (1:60)



第39図 小豊穴139～141実測図 (1:60)

小豊穴141 (第6・39・54図)

中期初頭の遺構が集中するJ区の南縁斜面に在る配薙坑で、坑央部に板状の角巻を7つ花弁の様に組んで配する。本跡出土の(140)は結節浮線文を口唇にもち、その下に交互の刺突文が施される。

小豊穴143 (第6・37・54図)

中期初頭の小豊穴である。結節繩文土器底部(141)が出土した。

(3) 遺構外の遺物 (第51・54・55図、写真110・138)

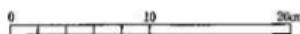
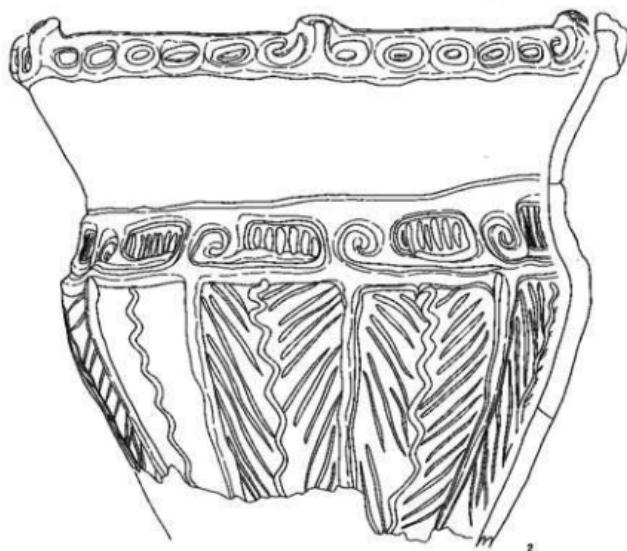
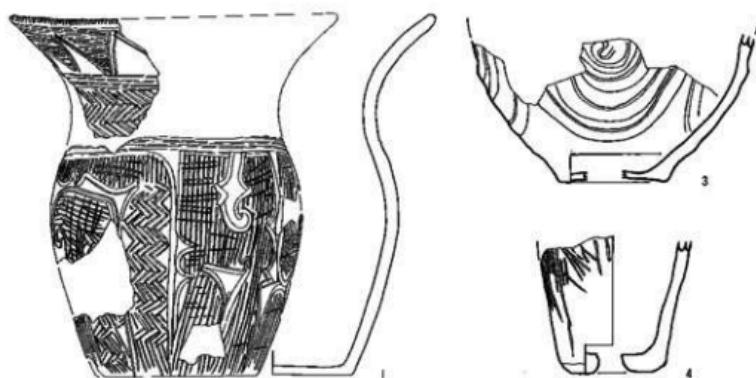
土器底部(66)はHD-68グリッド出土で、第26号住居跡の東2mに位置する。II層下面に正位にあり、遺構に伴わない。中期のものと思われるが耕作で上過半を失っており、判然としない。

(67)はGP-GY-60～70付近で、地権者が耕作中に偶然掘り出したものである。曾利II式で、遺存度も良い。住居跡に帰属するとすれば、第21号住居跡か第23号住居跡であろう。

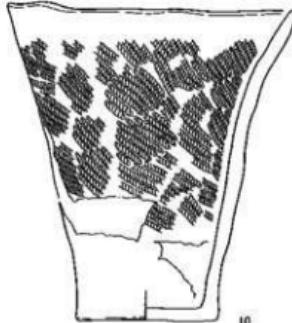
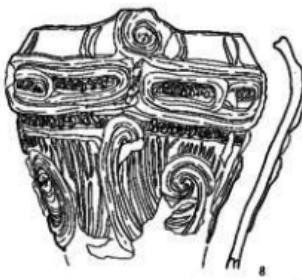
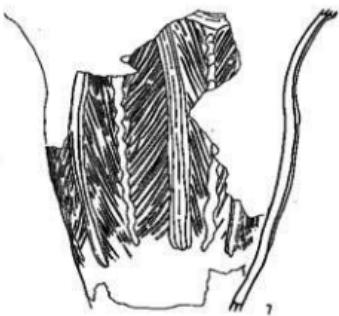
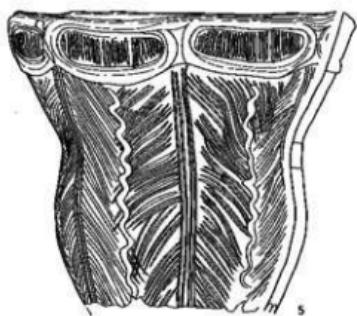
包含層の土器片はG・H区を中心に多く、整理箱にして7つ以上になるが9割以上は曾利II～IV期のものである。中期後葉のものについては、既に住居跡出土の掲載土器で当遺跡に観られる文様の類型はほぼ網羅できたものと考え、遺構外の土器片の拓本は、中期後葉以外の当遺跡では少數のものや希有なものに限定して掲載することとする。掲載遺物は(138・142～151)がある。

(144・145)は繩文早期の土器片で、(145)は纖維を多く含み、(144)は外面、(145)は内外面ともに条痕文が観られる。(144)はFW-63グリッド、(145)はFW-65グリッドで出土した。(142・146・150)は中期初頭の土器片で、いずれも結節浮線文が観られる。(142)は口縁部区画内の集合沈線、(150)は横走する結節沈線と三角刺突が観られる。(142)は97トレンチ、(146)はGE-68グリッド、(150)はJM～JP-69～74グリッド付近で出土した。中期中葉では、J区検出面で区画内を連続爪形状に充填する(143)、I区検出面で抽象文(151)が見つかった。(138・147・148)は後期初頭の土器片と考えられ、(138・147)は頸部から胴部にかけての深鉢の括れ部分で、(138)は圧痕のある陸帯が垂下し、(147)と(148)は繩文を磨り消す。(138)はGR-72グリッド、(147)はGL-66グリッド、(148)はGR-58グリッドから出土した。GE-70グリッド出土の(149)は無文で時期不詳だが、補修孔と称される穿孔が成される。

遺構外出土の石器は27点があり、1/3に相当する9点は完形品であるが、住居跡出土の掲載石器と異なる類型のものがほとんど無いため、垂飾(14)のみ掲載する。GN-62グリッド出土である。

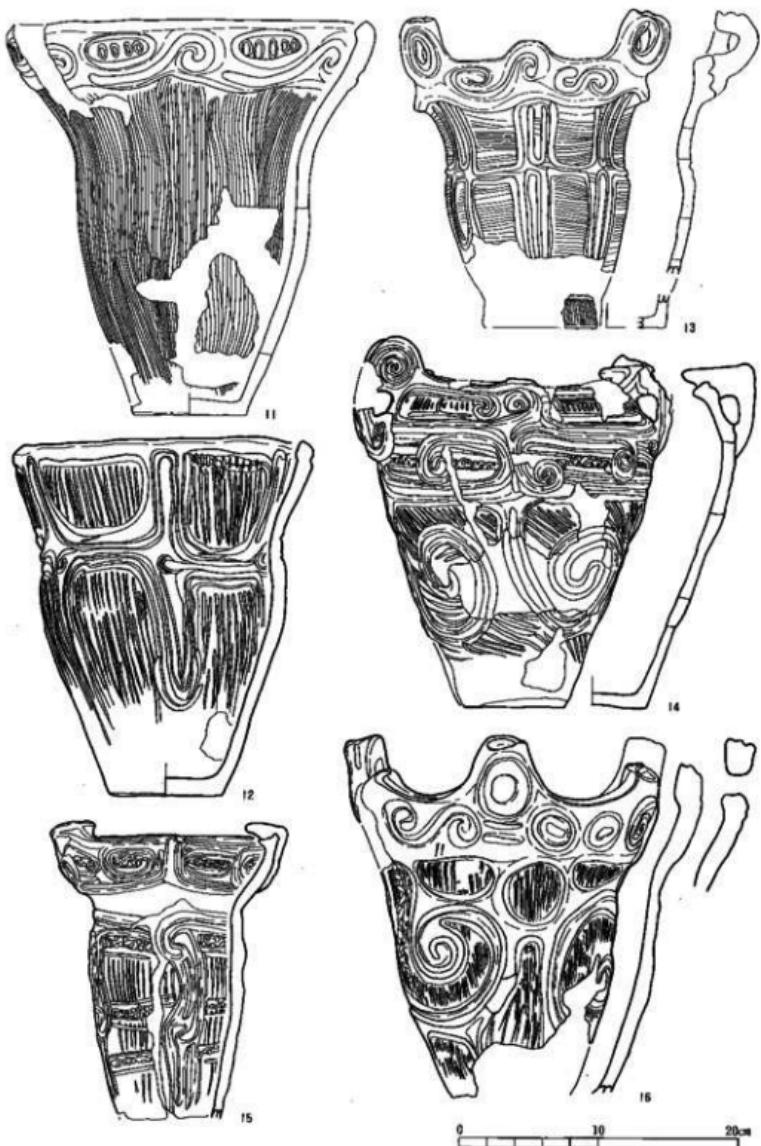


第40圖 繩文土器実測図 (1) (1 : 4)

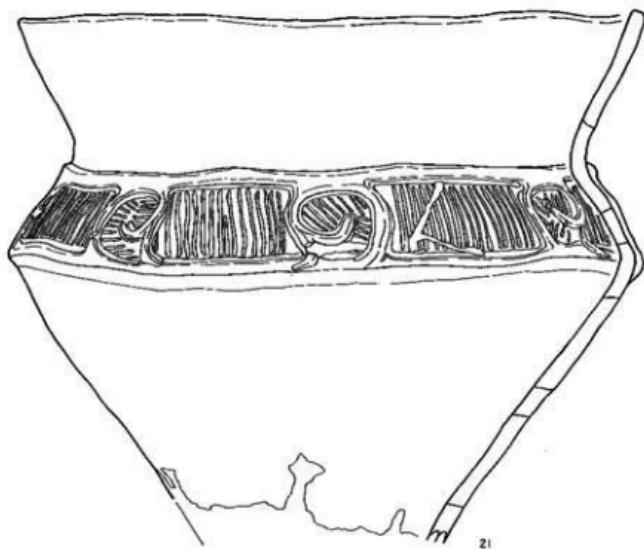
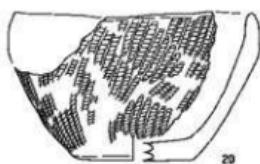
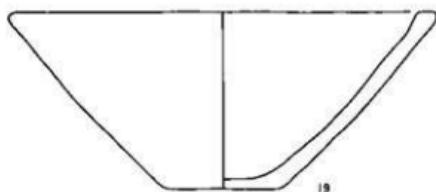
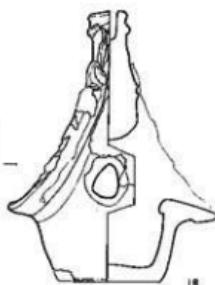
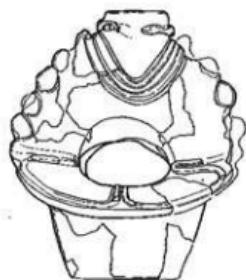
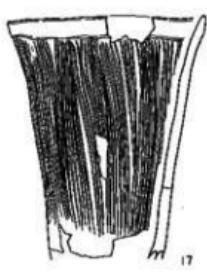


0 10 20cm

第41図 繩文土器実測図 (2) (1 : 4)

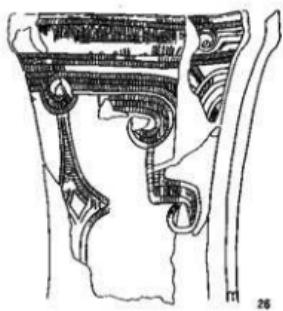
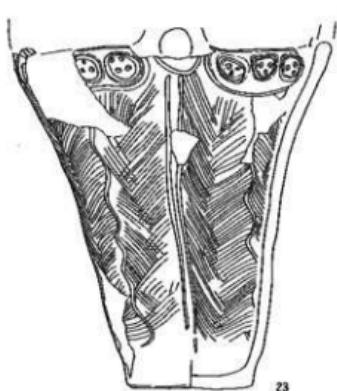
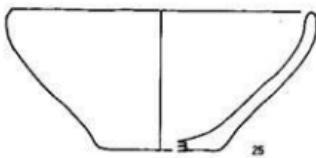
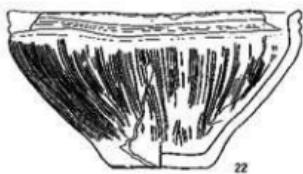


第42図 繩文土器実測図(3)(1:4)



0 10 20 cm

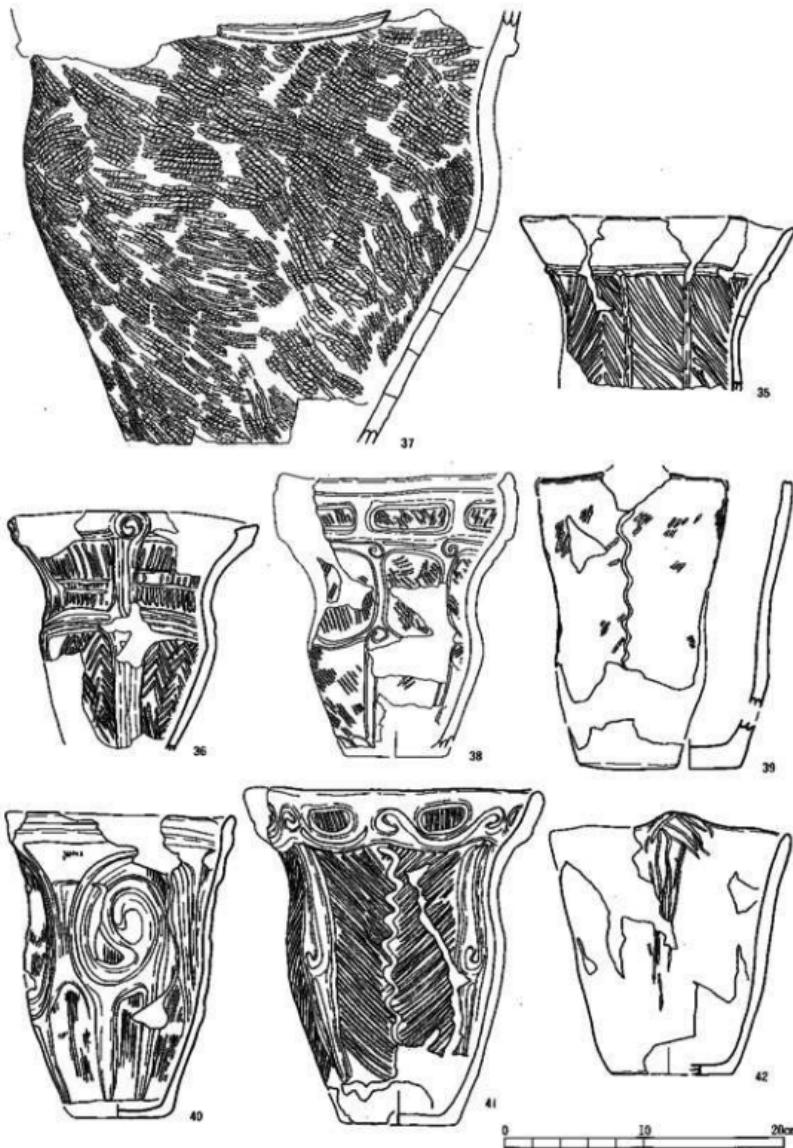
第43図 繩文土器実測図(4) (1:4)



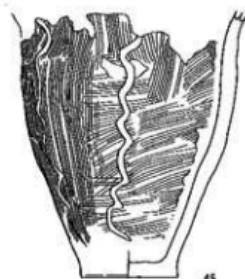
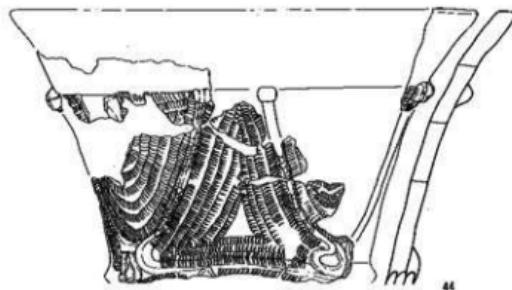
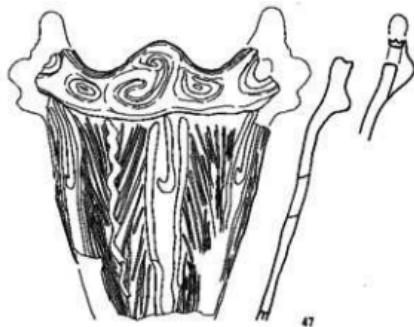
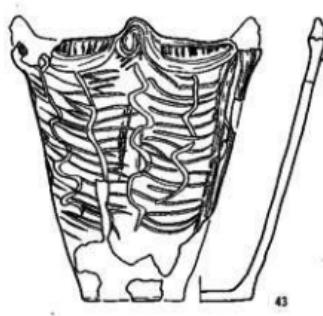
第44図 條文土器実測図(5) (1:4)



第45図 繩文土器実測図(6) (1:4)

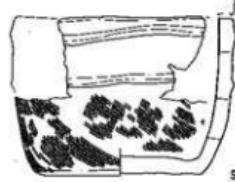
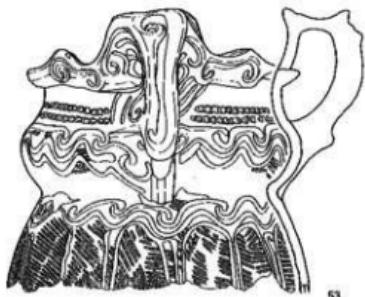
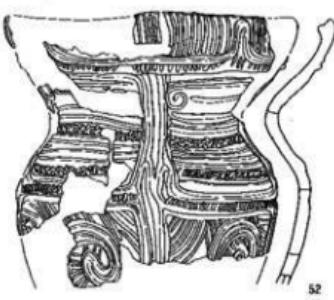
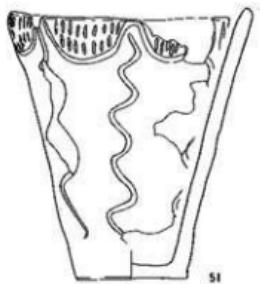
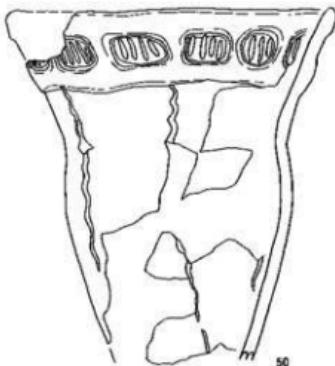
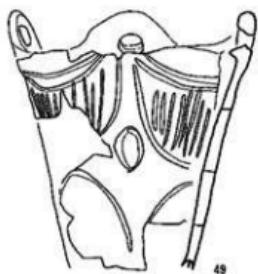
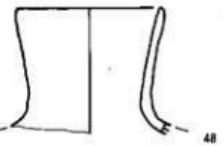


第46図 繩文土器実測図 (7) (1 : 4)



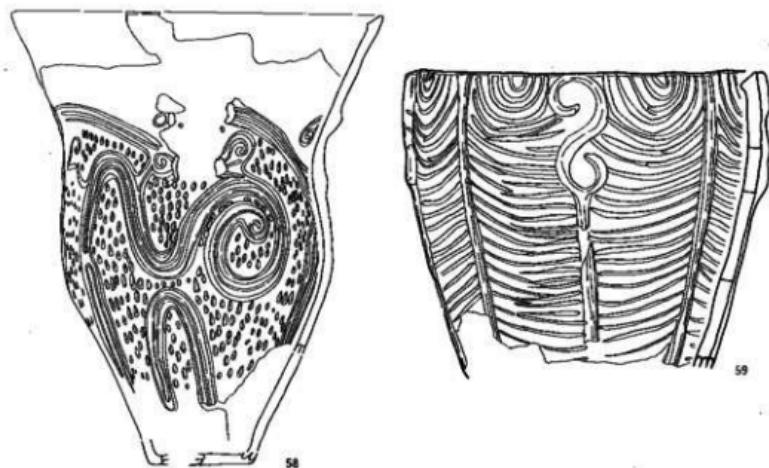
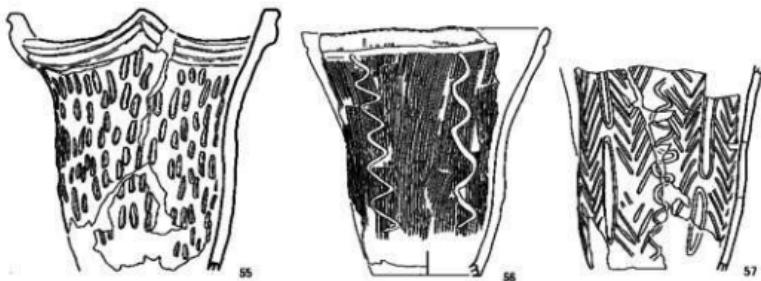
0 10 20cm

第47図 繩文土器実測図(8)(1:4)



0 10 20cm

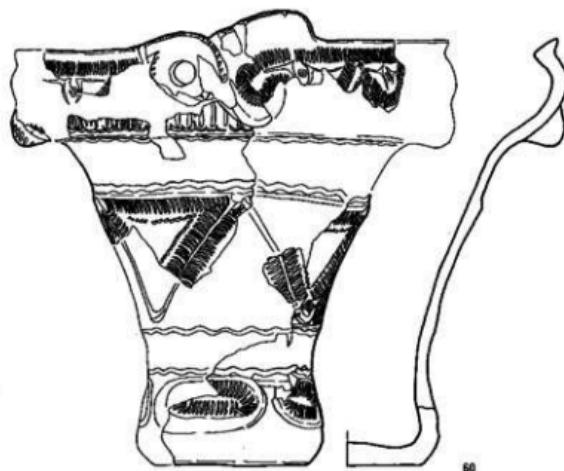
第48図 檜文土器実測図(9)(1:4)



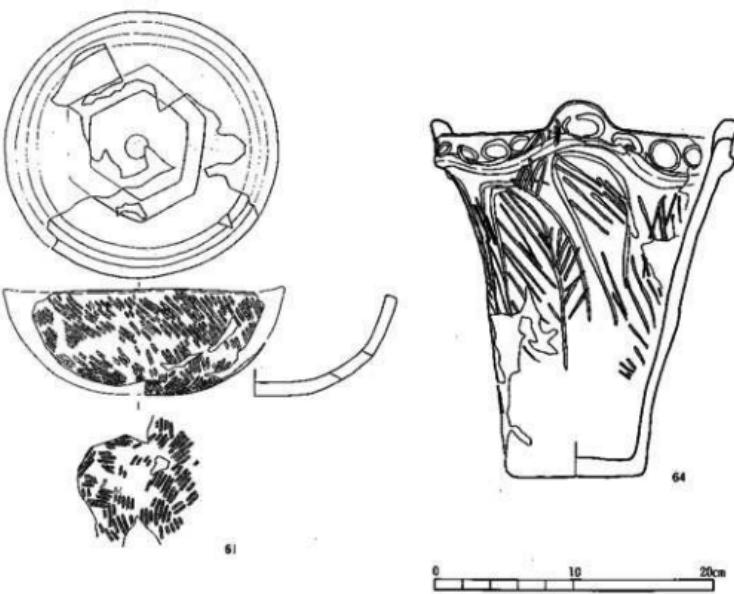
58以外 0 10 20cm

58のみ 0 20 40cm

第49図 純文土器実測図 図(1:4)



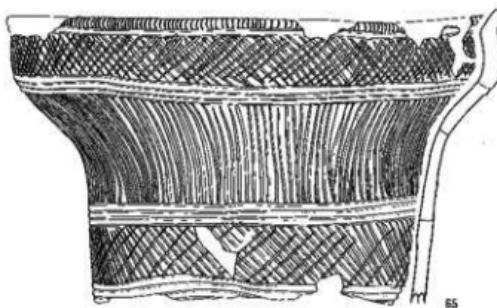
60



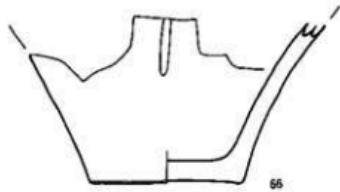
64

0 10 20cm

第50図 繩文土器実測図 (II) (1 : 4)



65



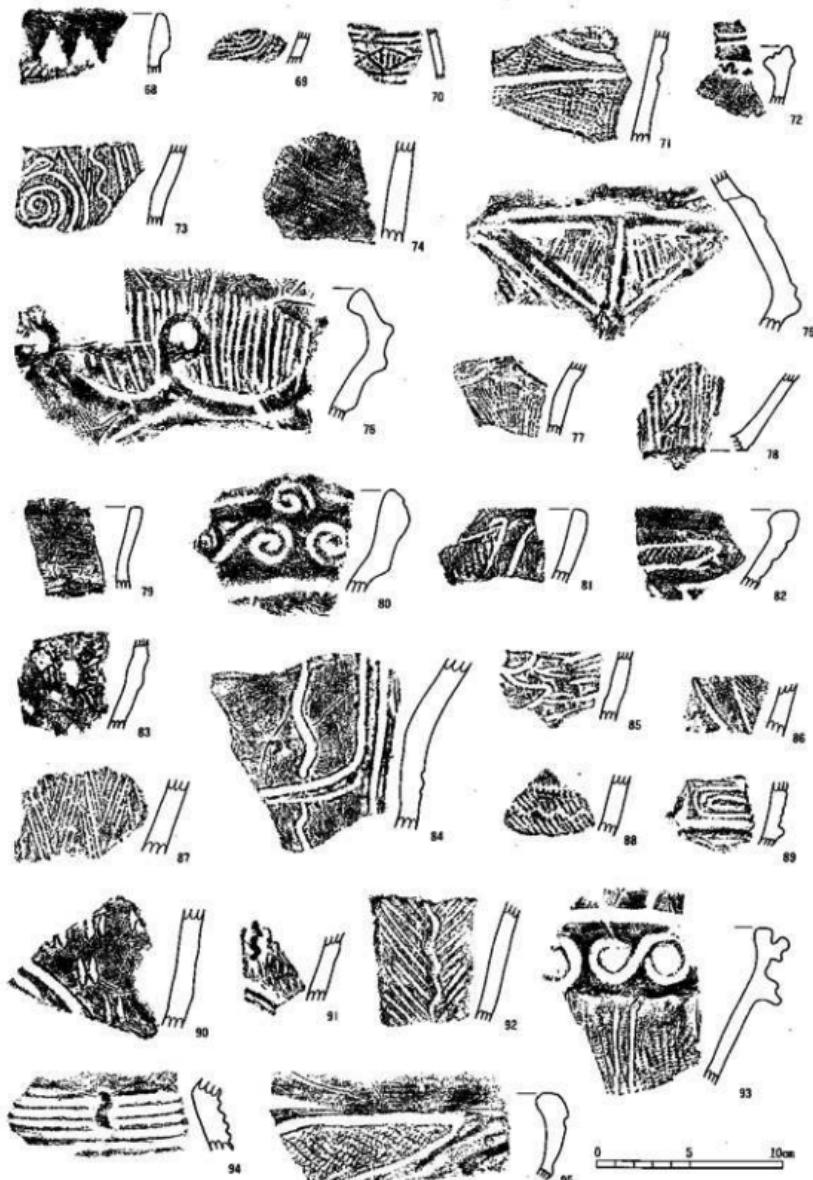
66

0 10 20cm



67

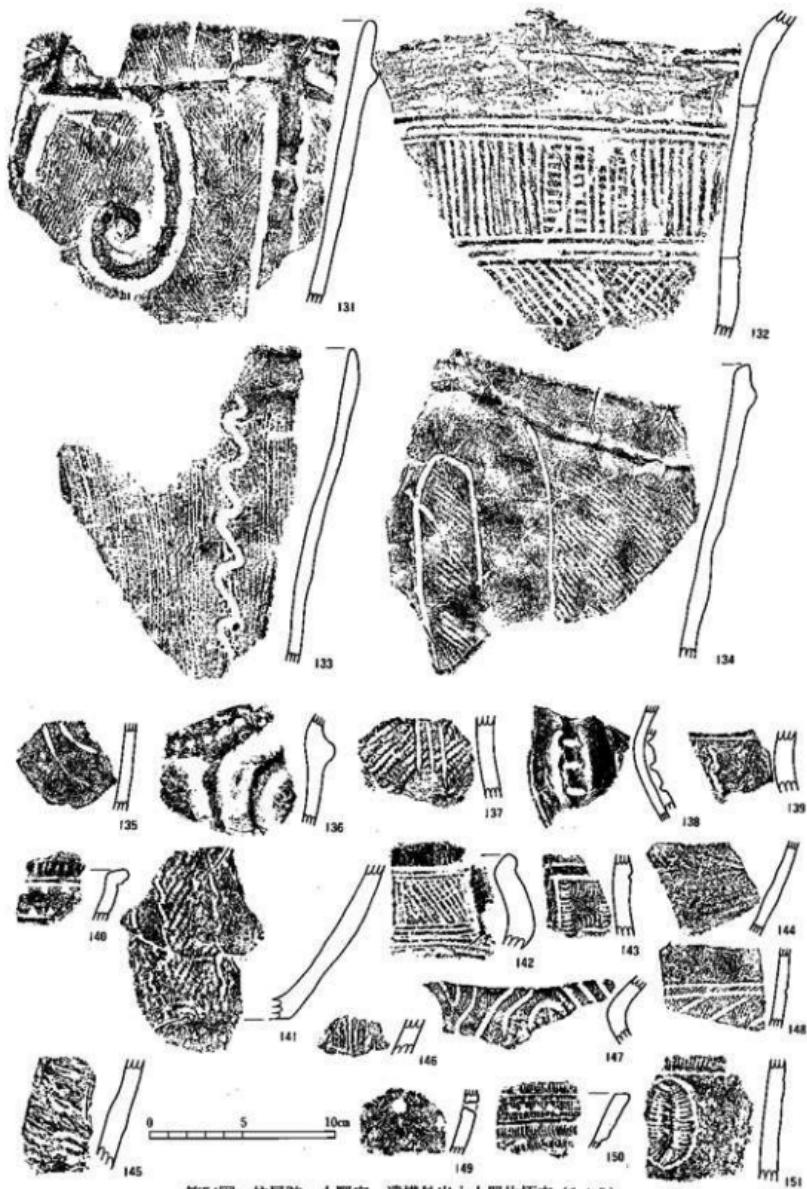
第51図 縄文土器実測図 (2) (1 : 4)



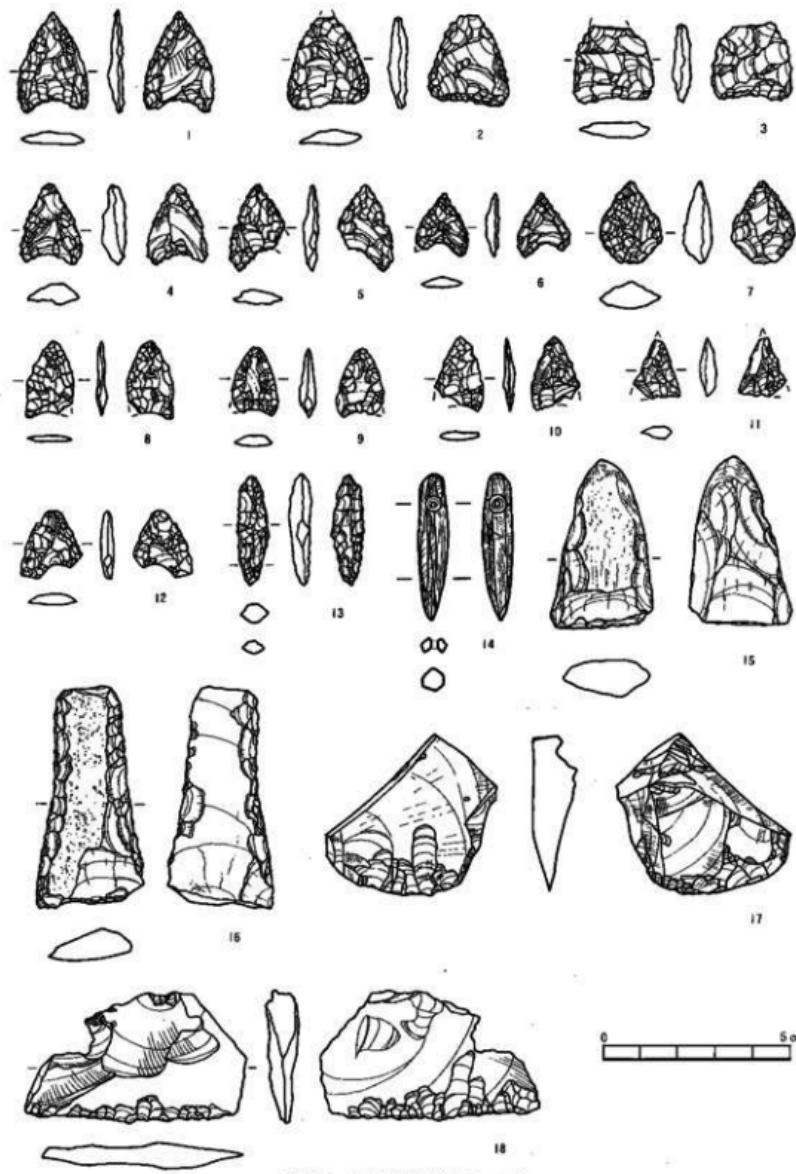
第52図 住居跡出土土器片拓本 (1) (1 : 3)



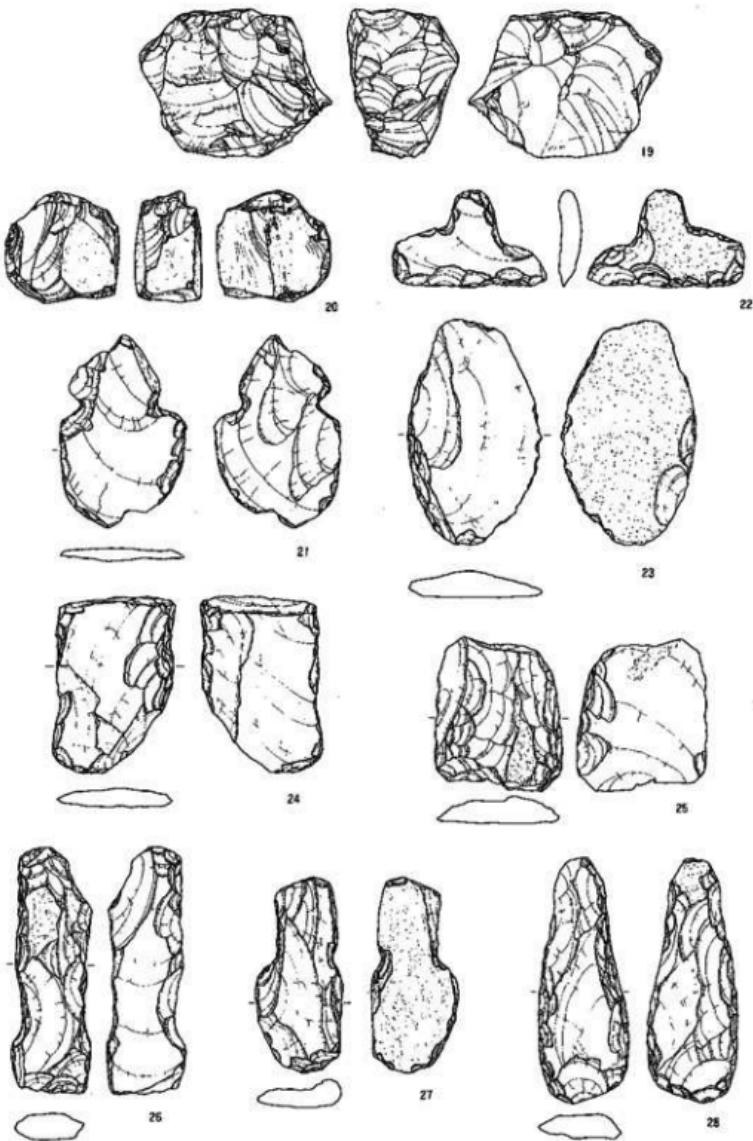
第53圖 住居跡出土土器片拓本 (2) (1 : 3)



第54図 住居跡・小竪穴・遺構外出土土器片拓本 (1 : 3)

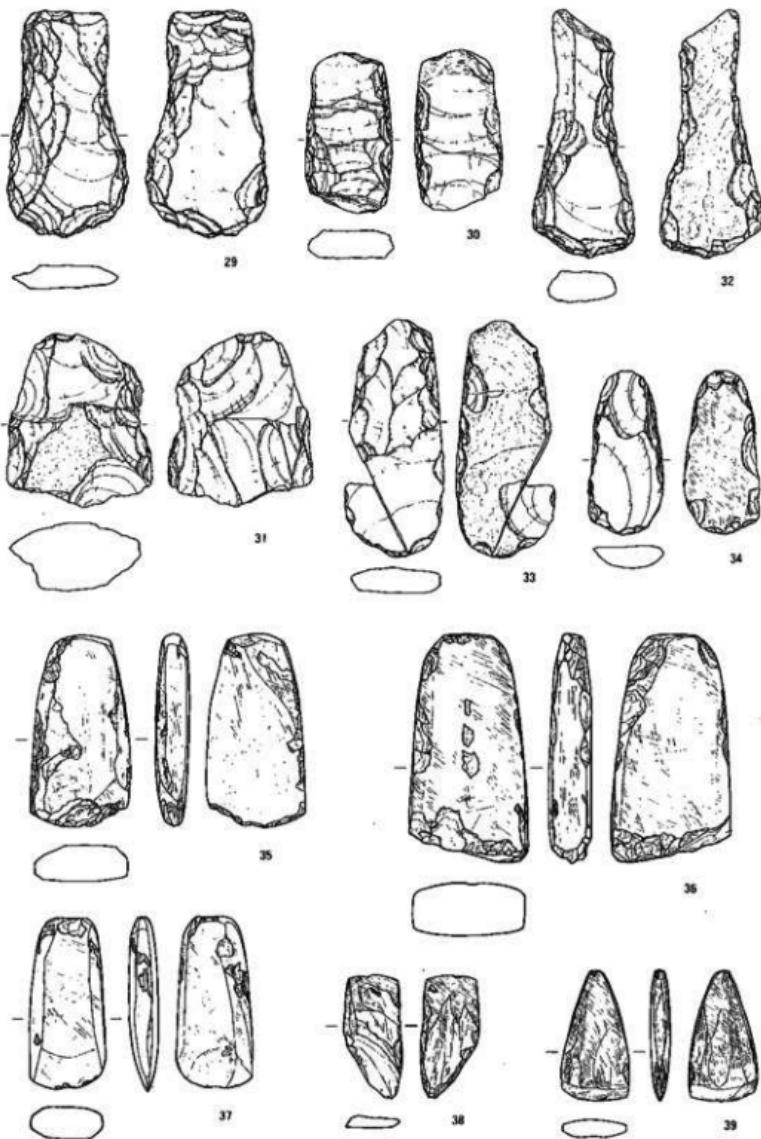


第55図 石器実測図 (1) (1 : 1.5)



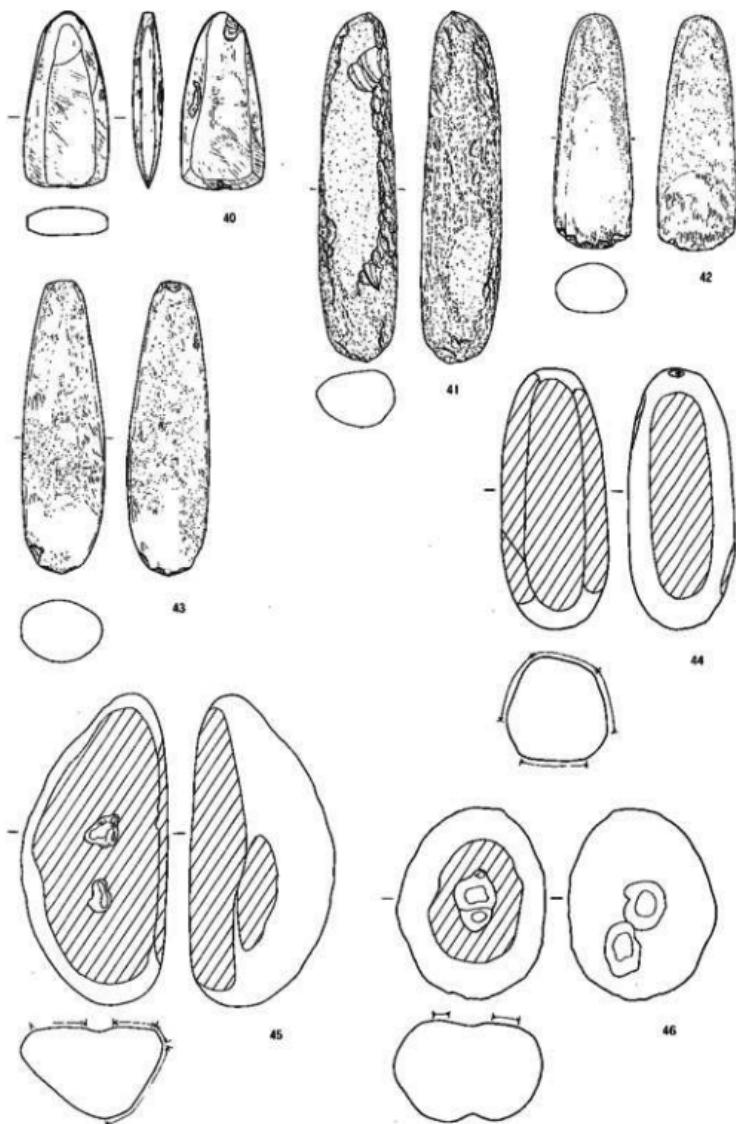
第56図 石器実測図(2) (1:3)





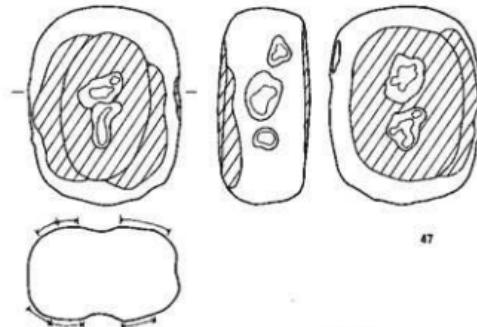
第57圖 石器實測圖 (3) (1 : 3)

0 5 10cm

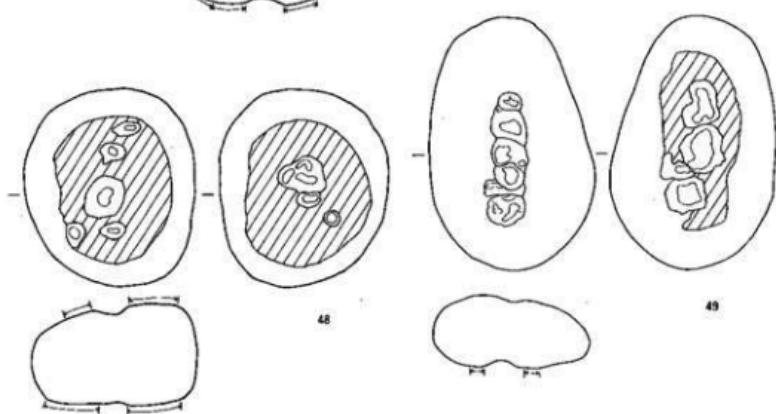


第58図 石器実測図(4) (1:3)

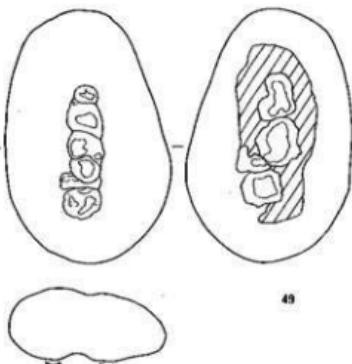
0 5 10cm



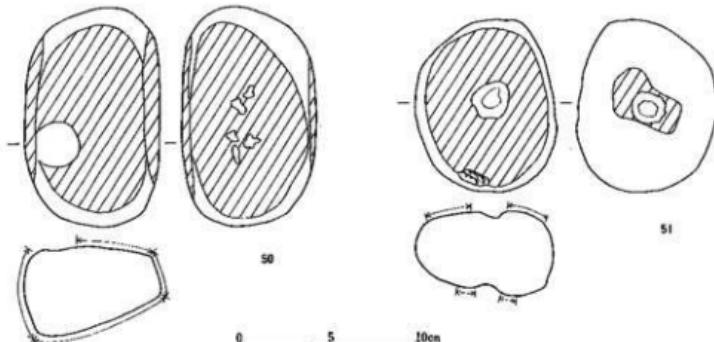
47



48



49

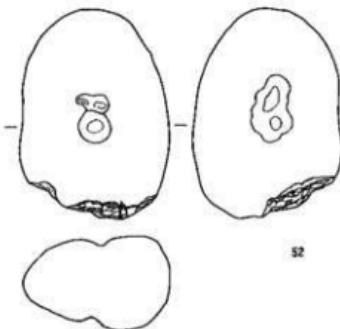


50

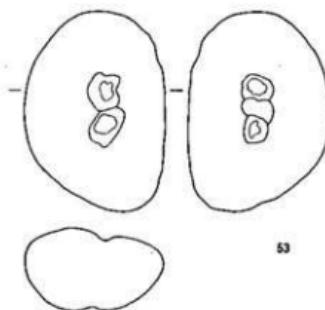
0
5
10cm

51

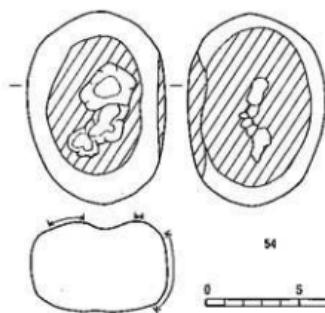
第59圖 石器實測圖(5) (1:3)



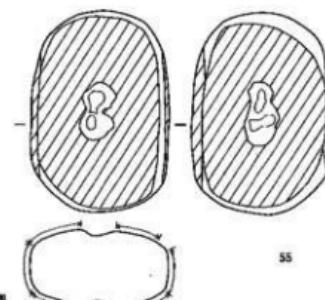
52



53

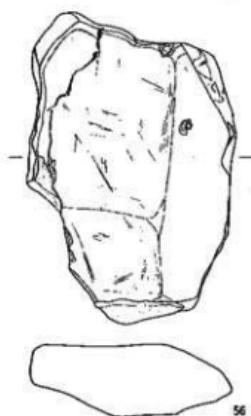


54

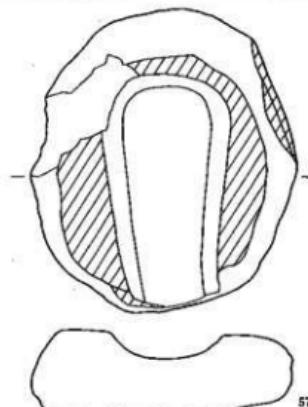


55

0 5 10cm



56



57

0 10 20cm

第60図 石器実測図(6)(1:3, 1:6)

復原揭露器一覽表 1

断土の側の斜面は砂質土層・粗粒土層をあらわす。断面の標の()は既存高をあらわす。口徑・底径の標の一は欠損のため不明をあらわす。

復原掲載土器一覧表

図番号	写真番号	遺跡名	取り上げ番号と出土位置	器種	胎	土	表面	口径mm	底径mm	厚さmm	時	期	備考	
34	18号住	2	深鉢	粗、長石多量・蟹母窓	(74)	—	104	1/5	施内 I	—	—	内面焼化物付着		
35	19号住	1、瓦土、焼出面	深鉢	粗、白砂漠	(120)	190	—	2/5	曾利 II	—	—	口縁部墨み		
36	94	19号住	5	深鉢	粗、長石・黒砂漠	(165)	170	—	3/5	曾利 II	—	—	外面部焼化物付着	
37	28、95	19号住	7(海壁)、14号住、焼出面	深鉢	粗、奥石多量窓	(310)	—	—	3/4	曾利 II	—	—	正位、口縁部・底部打欠	
38	38	19号住	9(海壁)、2号土、焼出面	深鉢	粗、長石多量窓	(204)	160	73	2/3	曾利 II	—	—	遺構間接合	
39	—	19号住	10、瓦土、焼出面	深鉢	粗、蟹母窓	(210)	135	70	1	曾利 IV	—	—	底部のみ	
40	49	19号住	12、瓦土	深鉢	粗、長石多量・蟹母窓	(218)	160	65	4/5	曾利 III、曾利 IV	—	—	前面灰化、褐色、内面焼化物付着	
41	30、96	21号住	櫻窓	深鉢	粗、長石多量窓	(239)	210	80	3/4	曾利 III	—	—	正面打欠、側面・部分打欠、器面磨耗	
42	42	21号住	1、2、瓦土、焼出面	深鉢	粗、白砂漠	(175)	165	85	3/4	曾利 IV	—	—	外面焼化物付着	
43	97	23号住	1	深鉢	粗、長石・蟹母窓	(186)	170	72	1	曾利 III	—	—	—	
44	34、98	24号住	櫻窓切、2、瓦土、焼出面	深鉢	粗、長石多量窓	(194)	335	—	—	新通	土器片埋蔵部の建設土器	—	—	
45	45	25号住	2、6、炉内	深鉢	粗、白砂・黒砂漠	(188)	—	69	3/5	曾利 IV	—	—	底部に木調痕	
46	99	25号住	3	圓耳壺	粗、長石多量窓	(140)	118	75	1	曾利 II	—	—	底部に木調痕	
47	47	25号住	8、瓦土	深鉢	粗、長石窓	(190)	180	—	2/3	曾利 III	—	—	側面荒れ、擦耗	
48	48	25号住	10	圓耳壺	粗、長石窓	(90)	106	—	1/4	曾利 II・III	—	—	—	
49	49	25号住	13、焼出面、H-58グリッド	深鉢	粗、黒砂漠	(161)	166	—	2/5	曾利 IV	—	—	—	
50	50	25号住	15、瓦土、焼出面	深鉢	粗、白砂・黒砂漠	(252)	226	—	3/4	曾利 III	—	—	底部に木調痕	
51	100	25号住	15、瓦土、H-58グリッド	深鉢	粗、長石窓	(193)	162	76	4/5	曾利 IV	—	—	底部に木調痕、外面部焼化物付着	
52	52	25号住	16、17、瓦土、焼出面	深鉢	粗、蟹母窓	(193)	206	—	2/3	曾利 II	—	—	—	
53	101	26号住	5	深鉢	粗、長石・蟹母少量窓	(159)	194	—	2/3	唐草文系下印部タイプ	—	—	欠損後再利用(縫口焼)、内部擦耗	
54	102	27号住	1、P3直上	深鉢	粗、長石窓	(110)	(156)	113	2/5	施内 I	—	—	—	
55	103	29号住	1、炉内	深鉢	粗、白砂・黒砂漠	(170)	170	—	3/4	曾利 III～IV	—	—	—	
56	56	33号住	2	深鉢	粗、蟹母窓	(178)	176	77	1/4	曾利 IV	—	—	—	
57	57	33号住	3、6	深鉢	粗、長石多量窓	(140)	—	—	1/3	曾利 IV	—	—	器面擦耗	
58	104	35号住	櫻窓	深鉢	粗、長石多量・蟹母窓	(650)	594	72	1	曾利 II～III	—	—	底部・X字状配手打欠	
59	105	35号住	1	深鉢	粗、蟹母窓	(212)	246	—	3/4	曾利 II	—	—	内面部焼化物付着	
60	60	36号住	2～6、瓦土	深鉢	粗、長石・蟹母・白砂漠	(303)	275	106	2/5	新通	—	—	丸底に墨文施文、内外面に擦痕	
61	61	107	36号住	5、瓦土	深鉢	粗、長石多量窓	(76)	200	50	1/2	施内 I	—	—	—
62	62	106	51号住	1、瓦土	深鉢	粗、蟹母窓	(116)	—	—	64	3/4	唐草文系下印部タイプ	—	—
63	63	53号住	1	深鉢	粗、長石多量窓	(90)	—	—	2/3	曾利 IV	—	—	底部に木調痕	
64	64	108	小窓穴	1	深鉢	粗、長石・蟹母窓	(242)	213	92	3/4	曾利 III	—	—	底部に木調痕
65	65	109	小窓穴	1	深鉢	粗、長石多量窓	(210)	334	—	3/4	慶久保	—	—	—
66	66	遺構外	遺構外 1	深鉢	粗、長石多量窓	(119)	—	—	108	1/5	不明	—	—	足庵後者窑廬、耕作中出土
67	67	110	遺構外	GF-GY-40-70グリッド	深鉢	粗、白砂漠	(248)	158	84	4/5	曾利 II	—	—	—

石器一覧表 1

図版番号	写真番号	遺構名	取り上げ位置	標	種	石	材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重さg	完形	備考
44	1住	2	出土	磨石	安山岩	安山岩	安山岩	138	62	54	590	完形	
16	117	4住	1住	1	石皿	スクリューバー	チャート	170	168	38	830	完形	圓平
1	111	4住	4住	1	陶土	石縫	黒曜石	58	28	9	15	欠形	
2	4住	4住	4住	1	陶土	石縫	黒曜石	28	18	3	1.52	完形	
3	112	4住	4住	1	陶土	石縫	黒曜石	25	22	3	2.33	欠形	
4	112	4住	4住	1	陶土	石縫	黒曜石	22	21	4	2.15	欠形	
5	113	4住	4住	1	陶土	石縫	黒曜石	22	16	6	1.49	完形	
6	113	4住	4住	1	陶土	石縫	黒曜石	23	14	4	0.9	欠形	
7	114	12住	12住	1	陶土	打製石斧	輝綠岩	17	13	3	0.53	欠形	
8	114	12住	12住	1	陶土	打製石斧	粘板岩	121	40	23	153	完形	
9	119	11住	11住	1	陶土	打製石斧	粘板岩	52	45	5	16	欠形	
10	123	12住	12住	1	陶土	打製石器	砂岩	56	52	13	55	欠形	
11	114	12住	12住	1	陶土	打製石斧	砂岩	94	83	57	450	完形	
12	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	85	49	15	82	欠形	
13	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	砂岩	80	93	15	144	完形	
14	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	砂岩	73	122	15	133	完形	
15	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	22	17	7	2.15	完形	
16	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	21	12	2.4	0.6	欠形	
17	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	安山岩	170	80	53	680	完形	凹石
18	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	安山岩	99	80	55	480	完形	
19	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	安山岩	132	78	63	820	完形	
20	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	安山岩	69	95	14	109	欠形	
21	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	安山岩	46	70	14	51	欠形	
22	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	安山岩	36	48	9	15	欠形	
23	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	安山岩	60	60	36	152	完形	
24	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	安山岩	9	13	3	0.55	欠形	
25	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	122	63	11	113	完形	
26	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	106	53	20	207	完形	
27	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	34	21	8	6	欠形	
28	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	47	70	15	40	完形	
29	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	30	7	5	1.36	欠形	
30	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	17	11	4	0.51	欠形	
31	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	79	47	8	39	完形	
32	124	12住	12住	1	陶土	打製石器	粘板岩	83	72	40	280	欠形	凹石

石器一覧表 2

図版番号	写真番号	遺構名	取り上げ番号 と出土位置	器種	石材	重量kg	幅mm	厚さmm	重きg	完形	備考
47	15生	磨石	1	安山岩	105	81	49	600	完形	凹石	
	131	16生	5	安山岩	138	74	31	370	完形		
	131	16生	2	安山岩	79	74	49	365	欠損		
25	16生	P5	機巧形石器	粘板岩	70	82	14	110	欠損		
	131	16生	8	乳輪状石斧	綠泥岩	97	47	30	230	欠損	
36	131	16生	7	鍛製石斧	蛇紋岩	123	67	28	410	欠損	
	131	16生	7	鉋製石斧	燧灰岩	42	30	8	18	欠損	
48	131	16生	4	磨石	安山岩	105	92	53	640	完形	凹石
	132	17生	105	凹石	安山岩	104	88	42	420	完形	
	132	17生	9	凹石	安山岩	123	72	29	370	完形	
49	132	17生	40	凹石	安山岩	135	89	39	550	完形	磨石
	132	17生	45	機巧形石器	鈣岩	70	103	10	102	完形	
	132	17生	79	機巧形石器?	砂岩	45	81	7	36	欠損	
9	17生	層土	石礫	黑曜石	19	12	4	0.96	欠損		
10	17生	輪出面	石礫	黑曜石	20	13	3	0.54	欠損		
	132	17生	P 3	打製石斧	砂岩	62	64	12	70	欠損	
37	132	17生	72	磨製石斧	蛇紋岩	92	41	17	118	完形	凹石
	132	17生	61	磨石	安山岩	119	83	64	720	完形	
50	132	17生	83	磨石	安山岩	120	73	47	570	完形	
56	133	17生	2	磨石	角閃石安山岩	334	223	77	775	完形	
57	133	17生	26	石皿	角閃石安山岩	326	285	91	1170	完形	
41	128	18生	1	乳輪狀石斧	凝灰岩	165	40	27.4	370	完形	
38	134	18生	2	磨製石斧	燧灰岩	66	32	7	20	完形	
39	134	18生	P 2	磨製石斧	燧灰岩	70	37	9	39	完形	
52	135	19生	9	凹石	粘板岩	110	82	50	480	完形	
	135	19生	輪出面	機巧形石器	粘板岩	58	57	6	37	欠損	
	135	19生	輪出面	石礫	黑曜石	15	10	4	0.45	欠損	
	135	19生	2	打製石斧	安山岩	115	75	14	110	完形	
27	124	19生	10	打製石斧	片麻岩	117	48	14	92	完形	
26	121	19生	4	打製石斧	粘板岩	143	43	13	99	完形	
	126	19生	5	打製石斧	粘板岩	112	50	9	68	欠損	
	125	19生	6	打製石斧	粘板岩	52	45	9	25	完形	
40	125	19生	3	磨製石斧	綠泥岩	97	75	16	122	完形	
	125	19生	3	磨製石斧	綠泥岩	28	34	13	37	欠損	

石器一覧表 3

図版番号	写真番号	遺構名	取り上げ位置 と出土位置	器種	石材	長さmm	幅 mm	厚さmm	重さkg	完形	備考
51	135	19住	8	磨石	安山岩	93	75	46	350	完形	凹石
	134	21住	1	凹石	安山岩	132	115	44	650	完形	
	134	21住	2	凹石	安山岩	80	73	50	650	完形	
18	118	24住	1	スクレイバー	黒曜石	35	47	12	12	完形	
53	136	24住	2	凹石	安山岩	105	72	43	405	完形	
21	120	24住	3	大形粗製石刀	粘板岩	83	82	10	72	完形	
	136	23住	40	凹石	安山岩	116	96	68	855	完形	
54	136	25住	47	凹石	安山岩	99	73	50	435	完形	磨石
	136	25住	21	石鏨	黒曜石	14	11	2	0.3	欠損	
	136	25住	44	打製石斧	褐灰岩	106	56	15	122	完形	
28	125	25住	42	打製石斧	褐灰岩	131	48	13	123	完形	
30	25住	1	掏出面	打製石斧	片麻岩	88	48	13	84	欠損	局部磨製
	116	25住	21	掏出面	粘板岩	45	28	8	13	完形	
136	25住	21	凹石	安山岩	86	74	36	211	完形		
	26住	1	凹石	安山岩	110	70	33	250	欠損		
	26住	6	磨石	安山岩	113	98	50	610	完形		
42	27住	1	乳棒状石杵	綠泥石岩	126	43	27	232	完形		
	28住	1	凹石	安山岩	145	98	56	790	欠損		
	28住	3	打製石斧	片麻岩	103	53	15	99	欠損		
	28住	1	打製石斧	褐灰岩	79	34	7	24	完形		
31	28住	1	打製石斧	褐灰岩	90	80	33	295	欠損		
11	29住	床下	石燃	黑曜石	15	13	5	0.6	完形		
	36住	4	凹石	安山岩	86	68	40	290	完形		
	36住	3	柳刃形石器	褐灰岩	45	78	9	34	欠損		
	36住	1	柳刃形石器?	砂岩	43	88	8	32.43	欠損		
22	122	36住	1	石铲	砂岩	52	83	11	47	完形	
12	36住	1	石铲	黑曜石	18	16	3	0.8	欠損		
32	127	36住	1	打製石斧	褐灰岩	104	55	23	183	欠損	
	36住	2	打製石斧	褐灰岩	125	56	17	154	欠損		
33	36住	6	打製石斧	綠泥石岩	125	52	12	97	完形		
43	129	36住	5	乳棒状石杵	綠泥石岩	157	43	32	340	完形	
	39住	1	凹石	スクレイバー	黑曜石	25	18	4	2.75	完形	
	39住	1	打製石斧	褐灰岩	105	63	13	129	欠損		
	45住	1	乳棒状石杵	綠泥石岩	117	48	35	300	欠損		

石器一覽表 4

図版番号	写真番号	遺構名	取り土上位置	器種	石 材	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	完形	備考
	137	小窓穴24	使用痕のある剝片	馬鹿石	44	21	3	3.45	完形		
	137	小窓穴25	使用痕のある剝片	馬鹿石	45	22	8	8.02	完形		
	137	小窓穴32	石皿	安山岩	106	108	32	480	欠損		
34	137	小窓穴46	打製石斧	海綿岩	86	40	12	61.02	完形		
55	137	小窓穴48	磨石	安山岩	108	73	38	450	完形	凹石	
	137	小窓穴49	凹石	安山岩	75	55	31	133.51	完形		
	137	小窓穴78	打製石斧	蛇紋岩	63	49	14	55.54	欠損		
	22	スクリイバー	黑曜石	38	23	9	8	8	欠損		
	25	スクリイバー	頁岩	46	18	8	9.6	完形			
	29	スクリイバー	黑曜石	28	13	3	1.1	欠損			
	2	凹石	安山岩	75	66	34	190	完形			
	15	機刃形石器	海綿岩	32	93	7	22	欠損			
	10	機刃形石器	砂岩	70	86	13	111	欠損			
14	138	遺構外	1	砂岩	40	8	7	3.44	完形		
	138	遺構外	11	石錐	馬鹿石	28	8	6	1.27	完形	
	138	遺構外	18	石錐	黑曜石	23	17	3	0.9	欠損	
	138	遺構外	12	石錐	黑曜石	15	10	2	0.2	欠損	
	138	遺構外	7	石錐	黑曜石	26	12	4	0.7	欠損	
	138	遺構外	9	石錐	馬鹿石	22	13	2	0.47	欠損	
	138	遺構外	3	石錐	黑曜石	20	11	4	0.6	欠損	
	138	遺構外	4	石錐	黑曜石	15	10	2	0.28	欠損	
	138	遺構外	30	石錐	黑曜石	18	12	3	0.35	欠損	
	138	遺構外	21	石錐	チャート	25	17	4	1.2	完形	
	138	遺構外	8	石錐	馬鹿石	17	13	3.5	0.56	完形	
		打製石斧	海綿岩	123	63	28	264	完形			
		打製石斧	粘板岩	50	50	11	39	欠損			
		打製石斧	砂岩	73	52	16	62	欠損			
		打製石斧	海綿岩	95	42	12	73	完形			
		打製石斧	粘板岩	68	38	13	38	欠損			
		打製石斧	海綿岩	33	48	13	22	欠損			
		打製石斧	粘板岩	73	53	8	40	欠損			
		打製石斧	海綿岩	30	40	16	28	欠損			
		打製石斧	粘板岩	102	49	20	156	欠損			
		遺構外	17	安山岩	105	96	38	455	完形	凹石	

2 平安時代

(1) 住居跡と竪穴状遺構

第8号住居跡 (第3・61・76図、写真141)

位 置：EF～EH-66・67グリッド、南緩斜面。

検 出：III層上面で見つかったが、南側半分以上を水田造成により削り取られており、北壁の付近が僅かに残るだけである。

覆 土：IかIIを基調とする土が自然堆積する。

規 模・形態：残存部で173×60cmを測る。残存部が少ないのでハッキリしないが方形と思われる。

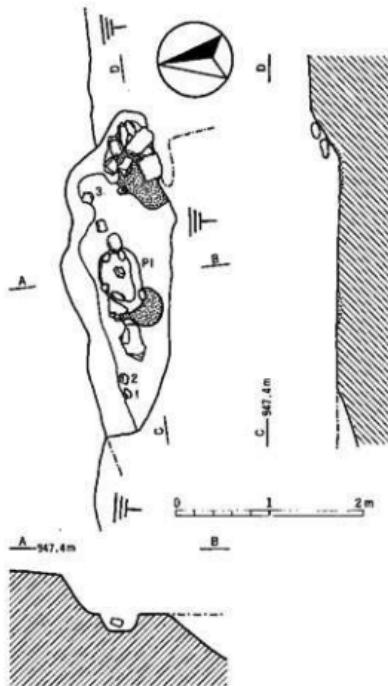
床・壁：床はよく叩き締められてしっかりとおり、残っている北壁は標高24cmを測り、およそ45度で傾斜している。

ビット：北壁の際にP1が残っているのみである。用途は不明である。

かまど：住居跡の東の端にある。火床は確認できるが、廃絶時の破壊か、袖石とみられる角礫が火床周辺に散乱して袖の原形はつかめない。

炉：P1の南に接して地床炉がある。

遺 物：灰釉陶器碗(1)と土師器坏A(2～4)がある。(1)は大原2号窯式で、濱かけ施釉、内面全面施釉か自然釉で口縁部に炭化物が付着し、灯明皿か。(2～4)はロクロ調整、底部回転糸切りで、(2)は墨書「巣」とある。いずれも床面遺物である。これらから本跡は10世紀前半の住居跡である。



第61図 第8号住居跡実測図 (1:60)

第22号住居跡 (第4・62・76図、写真29)

位 置: GO~GQ-61~63グリッド、南緩斜面。

検 出: 北東部はIII層上面において極めて明瞭であったが、南西側では覆土が残っておらず、
掘り形も深くなかったため分かりにくかった。第21号住居跡(縄文)を切る。

覆 土: IかIIを基調とする土が自然堆積する。

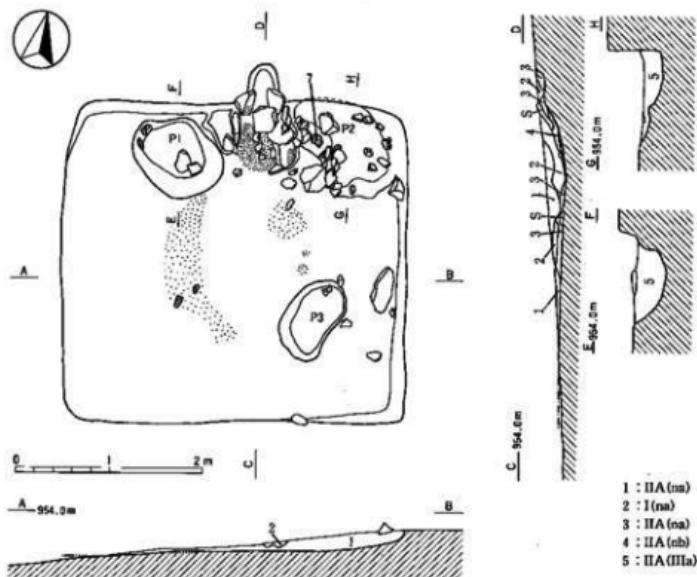
規模・形態: 372×342cmの方形。

床・壁: 床は軟弱で、壁は垂直に近く、検出面からの壁高20cmである。検出可能なレベルでは、南壁と西壁は残っていないかった。床面中央部に焼土が拡がる。東壁際に第21号住居跡の炉石が床面より高くまで突出していたが、これを敢えて抜去せずに居住したようだ。これは火床や他の床面のレベルや床面遺物のレベルと比して確実であり、調査時に下げ過ぎてしまったからではない。

ビ ッ ト: かまどの両脇と南東床面にある。とりわけかまど右脇のものは袖からコーナーに達し、北壁を抉る大穴である。

か ま ど: 石組で北壁中央付近にあり、火床はよく発達している。

遺 物: (5~9)がある。(5~7)は床面遺物で、何れもロクロ調整、底部回転糸切りである。黒色土器A坏A(5)は内面に暗文様のミガキがある。土師器坏A(6・



第62図 第22号住居跡実測図 (1:60)

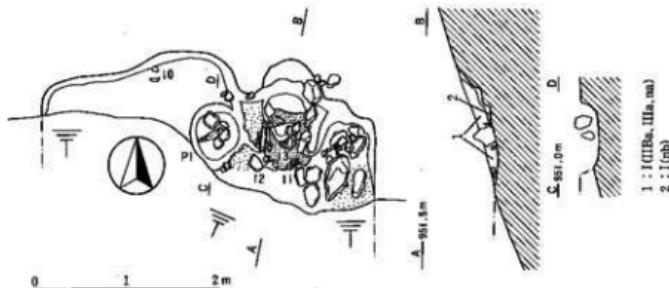
7) は歪みが大きく、粗雑なつくりである。灰釉陶器碗 (8) は大原 2 号窯式である。土師器小型壺 (9) は武藏台付壺の模倣か。本跡は10世紀前半と考えられる。

第30号住居跡 (第4・63・76図、写真40)

- 位 置：GE～GG-60・61グリッド、斜面端部に近い斜面にある。
- 検 出：斜面において等高線方向に細長く黒い落ち込みは、当初落とし穴と捉えていたが、角礫が頻出し、次いで焼土粒と坏破片が検出されて、平安住居の一部と判明した。北端から 1/3 弱が残存する。
- 覆 土：I が単層で自然埋没。
- 規模・形態：東西方向で 358cm、斜面方向は最長で 165cm が残存する。方形であろう。
- 床 壁：床は平坦だが礫がらで、これは地山の状態である。壁は垂直に近く、検出面からの最深部は 21cm である。
- ビ ッ ト：かまど左脇に浅いものが 1 基ある。
- か ま ど：北東コーナー寄り北かまで、石組の外側をロームで固める。火床はよく焼け、左袖付近にも焼土が塗がる。
- 遺 物：床面土器 (10～13) があり、10世紀前半から中頃。土師器壺 A (10)、黒色土器 A 壺 (11) はロクロ調整、底部回転糸切りが残る。(11) は内面に暗文状のミガキがみられ、高い器台・浅く大きく開く体部は盤に近い。灰釉陶器碗 (12・13) は漬けかけ施釉、大原 2 号窯式である。(12) は多治見産か。(13) は内面平滑で、転用窯の疑いがある。

第34号住居跡 (第5・64・76図、写真42)

- 位 置：IM～IO-53～55グリッド、南斜面にある。
- 検 出：農道から下位の畠への下り坂のアプローチとして軽トラックが踏み固めていたとこ



第63図 第30号住居跡実測図 (1:60)

ろである。表土を剥ぐとかまど石が露出した。しかし、これを方形石窯と思ひ、縄文住居跡として調査を開始した。直線的な北壁が現れてからも、覆土が人為的な埋没様相を示すため、縄文住居の竪穴を壊す擾乱と誤認して、スコップでタヌキ掘りに近い状態で掘り下げてしまったが、幸い壁面や床面を破壊せずに済んだ。

覆 土：I中に ϕ ~70mmのローム・ブロックを含有する人為的埋没とみた。

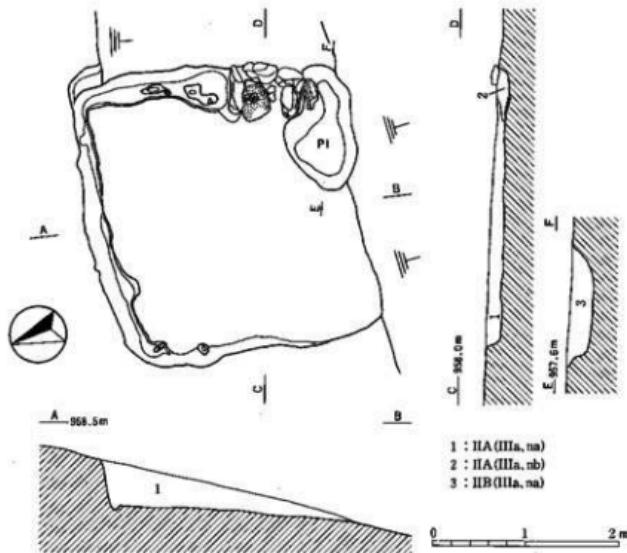
規模・形態：東西方向で322cmをはかる。斜面方向は、あと僅かのところで床面が途切れる。残存長は290cmである。形態は方形がやや歪む。

床 壁：軟弱ではないが、細かな凹凸がある。壁の傾斜は直線的で、北壁の高さは56cmにも及ぶが傾斜がきつく、南壁は全く残らない。北壁・東壁直下にごく浅い周溝状のくぼみがあるが、竪穴構築時のものであろう。

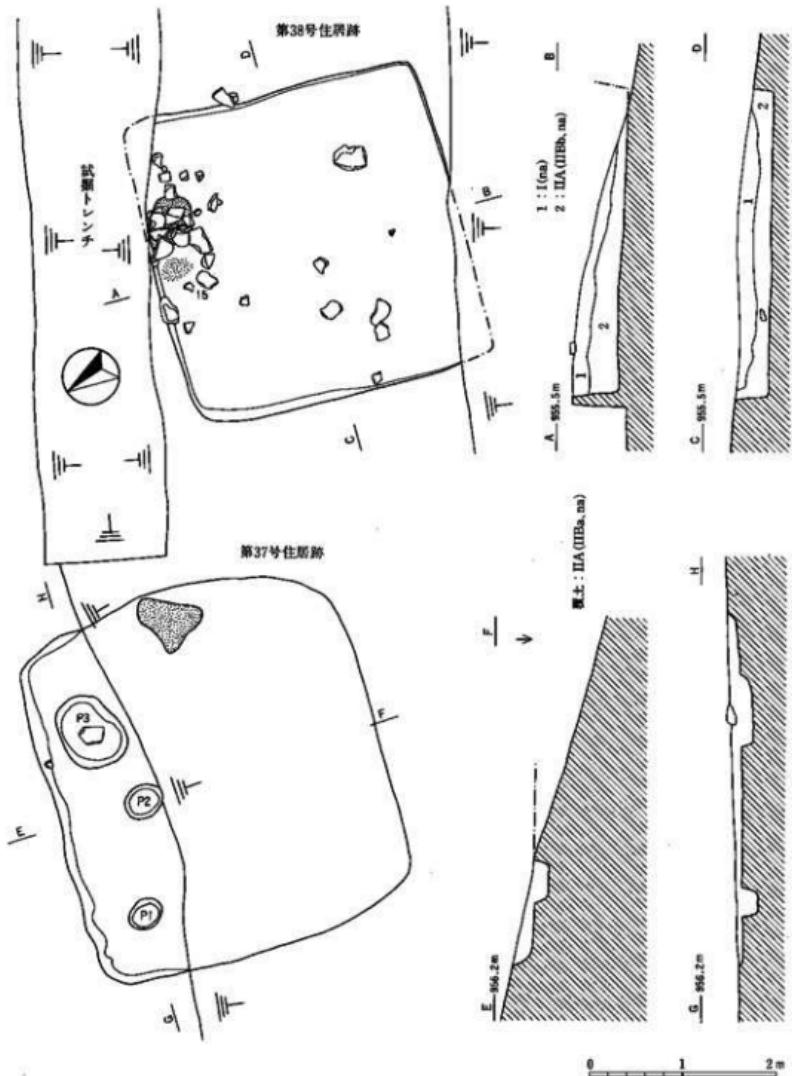
ピット：かまど右脇に細長い大穴がある。中からは何も検出されず、人為的埋没である。

かまど：石組が左右の袖と壁方向にある。南東コーナーに寄る。火床の焼けは激しくない。

遺 物：火床直上に重なった1個体分に満たない、薄手で内外面カキ目調整の土師器甕底部(14)が復原できた。覆土中は遺物がほとんど無く、黒色土器A片が1片出たのみである。



第64図 第34号住居跡実測図 (1:60)



第65図 第37・38号住居跡実測図 (1 : 60)

第37号住居跡 (第5・65図)

- 位 置：IP～IR-49～51グリッドで南斜面にある。
- 検 出：尾根方向の1/3弱が残る。谷方向の南端は床下70cmに及ぶが、掘り形の影響か何故か明瞭に観えた。
- 覆 土：Iを基調とする単層である。
- 規模・形態：358×404cmで長方形。
- 床・壁：床はI層下面にあり、軟弱である。壁は傾斜し、最深部で20cm。
- ビット：3基を検出。地山と覆土の差が不明瞭だったが、焼土粒・炭化物の含有を手掛かりとした。
- かまど：東壁中央に火床のみ残存する。
- 遺 物：覆土中に繩文土器が数片流れ込むが、本跡帰属のものは皆無である。

第38号住居跡 (第5・65・76図、写真44)

- 位 置：IR～IT-47～49グリッドで斜面の端部にある。
- 検 出：重機による先行トレンチでかまどが当たった。トレンチで北東コーナーを僅かに破壊した。I層中である。
- 覆 土：上層にI、下層にIを基調とする黒褐色土の2分層で、自然埋没である。
- 規模・形態：一辺330cmの方形。
- 床・壁：I中に黒い床をもち軟弱なため、一部下げ過ぎた。黒い壁はほぼ垂直である。
- かまど：北壁中央よりやや東に寄る。火床は確認できるが、廃絶時の破壊か、袖石とみられる角礫が火床周辺に散乱して袖の原形はつかめない。
- 遺 物：床面遺物の灰釉陶器皿(15)は刷毛塗りにより施釉した光ヶ丘1号窯式で、9世紀後半に時期決定し得る。

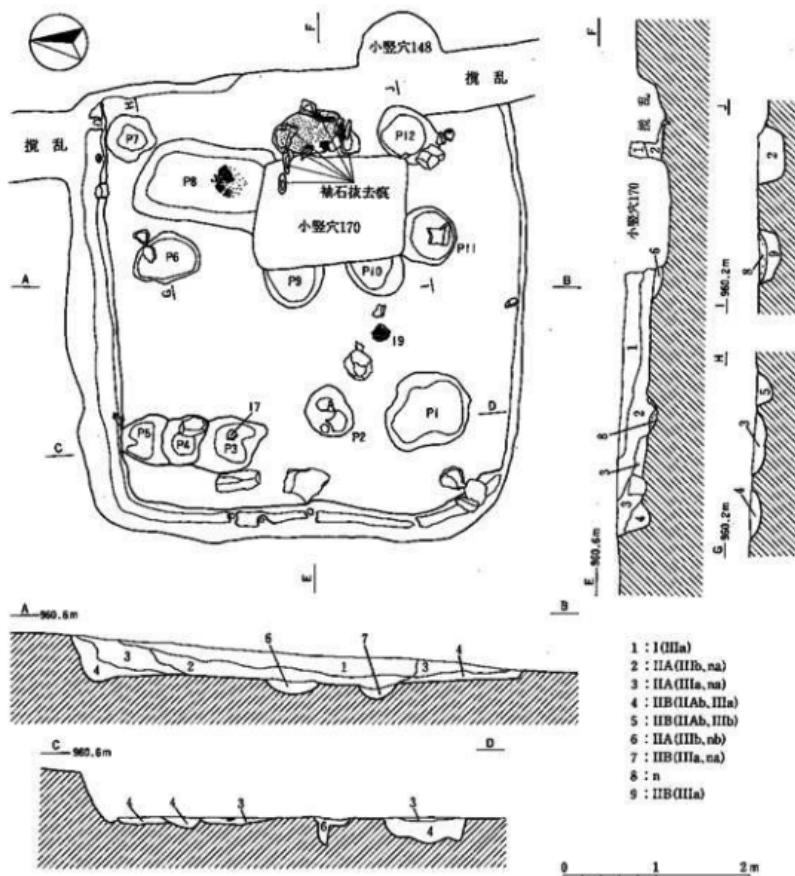
第40号住居跡 (第6・66・76図、写真46)

- 位 置：JU～JW-58～60グリッド。
- 検 出：II層下部～III層上面で明瞭であった。小豎穴170に切られている。
- 覆 土：壁際にIIを基調とする三角堆土があり、それ以外はIを基調とするレンズ状堆積で、自然埋没である。
- 規模・形態：500×494cmの方形。
- 床・壁：床は比較的堅く、壁は急傾斜で最大44cmの高さがある。西壁・北壁直下に幅20cm前後で、深さ7cm以内の浅い周溝がある。
- ビット：ビットの数が多い。P2・P9・P11は焼土が充填されるが、P2・P9は人為的埋没であり、焼土は現位置ではない。P6・P10・P12も少なからず焼土ブロックを

含有する。全部が同時に機能していた筈ではなく、居住期間中に個々が何らかの機能をもったと思われる。特に深いものはない。

かまど: 東壁中央付近にあり、攪乱と小竪穴170に壊されるが、抜去された袖石の痕跡と火床が残存する。

遺物: 他の平安住居に比して須恵器・土師器とも甕片が多いが、よく粉碎されて投棄の様相を示し、復原には至らない(19・20)。黒色土器A椀(16)は内面暗文風のミガキ、底部回転糸切り後および外面クロ調整、同蓋(17)は内面上半放射状のミガ



キ、下半ヨコミガキ、外面上半ハケ後ナデ、下半回転ナデ調整、同坏A（18）は内面下半タテミガキ、上半ヨコミガキ、外面ロクロ調整、逆位の墨書「百」？がみられる。土師器甕（20）は内外面ハケ目、口縁部のみロクロ調整で、甲斐型の甕片である。（17・19）が床面遺物で、時期は9世紀後半に求められる。

第41・42号住居跡（第6・67・77図、写真47・48・142）

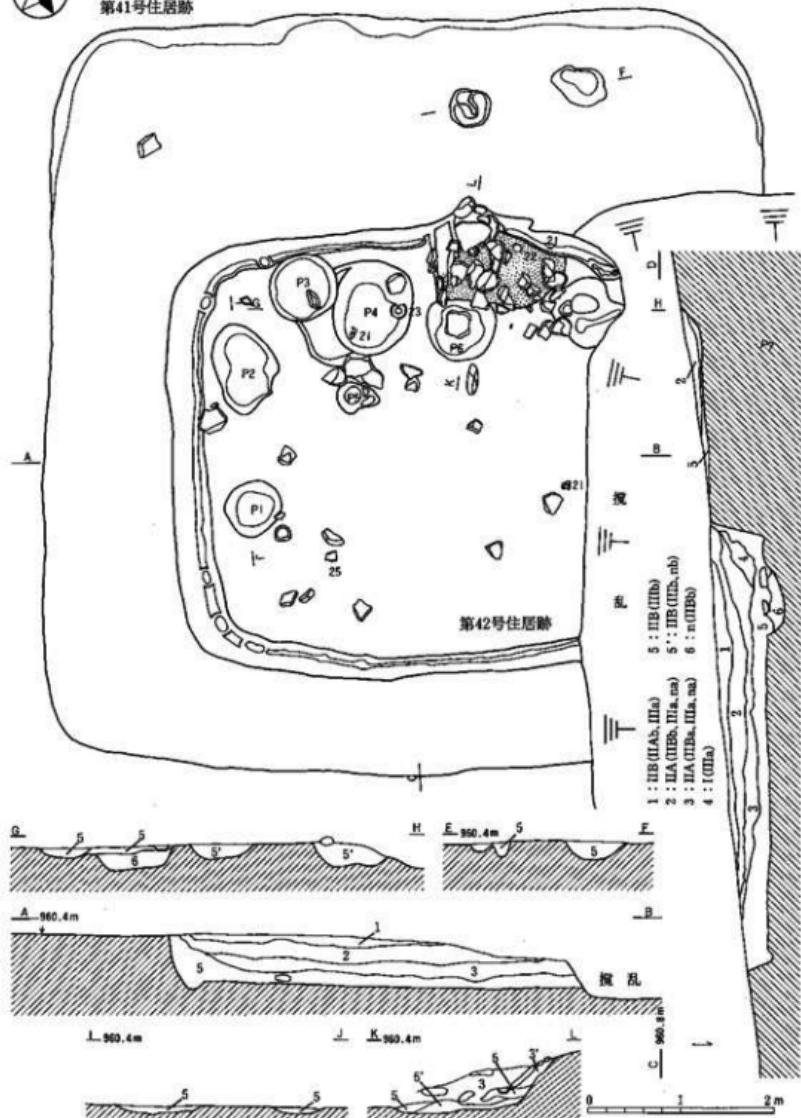
- 位 置：第41号住居跡はJX～KC-58～63グリッド。第42号住居跡はJY～KB-59～62グリッド。いずれも南緩斜面にある。
- 検 出：1層下部～II層下部で、2重のプランを確認した。内側が第42号住居跡である。第41号は住居跡である確証はなく、第42号住居構築時の整地に關係するものかもしれない。いずれも東端を水田造成で失う。
- 覆 土：第41号住居跡は上層にI、下層にII。第42号住居跡は主に4層あり、最上層は暗褐色土、2層・3層はIを基調とし、最下層はIIを基調とするレンズ状の堆積である。いずれも自然埋没である。
- 規模・形態：第41号住居跡は760×810cm、第42号住居跡は一辺490cmで、共に隅丸方形である。
- 床 壁：第41号住居跡は北側1/3に床と壁が残り、床は堅く、壁は比高20cmの平均的な傾斜である。第42号住居跡は堅緻な床をもち、垂直に近い壁が最深56cmを測る。壁直下には幅20cm程度、深さ5cm前後の周溝が全周する。
- ビ ッ ト：第42号住居跡には北壁・西壁際にピットが穿たれているが、いずれも浅い。かまど両脇のP4・P7は焼土塊が充填されていた。
- か ま ど：第42号住居跡の遺存状態は良い。第41号住居跡はあったとすれば東壁であろう。
- 遺 物：第41号住居跡は皆無。第42号住居跡は（21～25）が投棄されており、10世紀前半であろう。（21・22）は大原2号窯式でいずれも漬けかけ施釉だが、（22）は内面全面施釉された上手品であり、（21）は重ね焼き痕が認められ、何れも底部にロクロ調整前の回転糸切り痕が僅かに残る。同椀（23）はやや特異な器形でハケ塗り施釉、光ヶ丘窯式か。土師器小型甕（24）は外面ハケ目、内面ナデ調整で、底部には木葉痕が認められる。灰釉陶器広口瓶頸部（25）は大原～虎渓山窯式で両面施釉、擬口縁が認められる。本跡は10世紀半ばに相当する。

第43号住居跡（第6・68・77図、写真49・143）

- 位 置：KE～KH-62～64グリッド、南緩斜面。
- 検 出：II層下部で見つかった。
- 覆 土：上層はI、下層はIより若干明るい色調を呈する。自然堆積で両者は漸移的である。
- 規模・形態：東西方向で454cmを測り、方形と考えられるが南端を水田造成で失い、南北方向は



第41号住居跡



第67図 第41・42号住居跡実測図 (1:60)

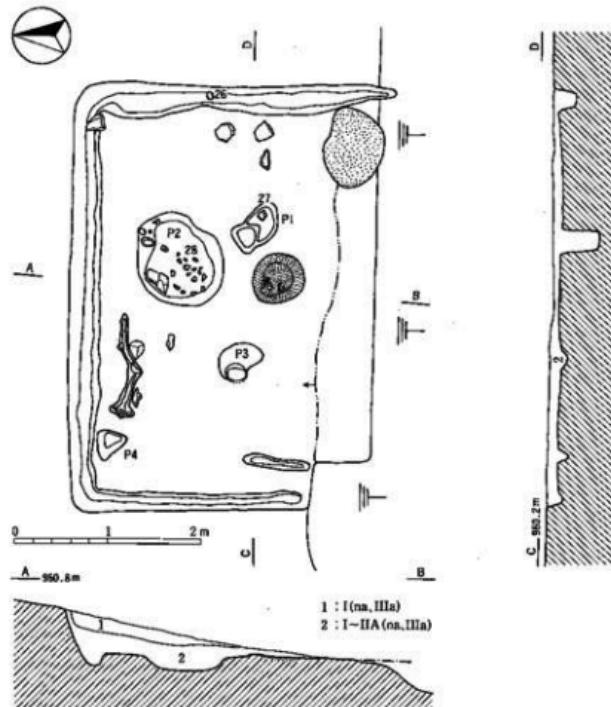
北壁から327cmが残る。

床 壁：床は全面的な貼り床で、急傾斜の壁は最深50cmを測る。壁直下に幅14~30cmの周溝が7~16cmの深さで巡る。

ピット：北西コーナーに1基、中央付近に3基ある。P2には粉碎された土器片と糠が入る。
かまど：表土剥ぎの際、袖石を重機で破壊してしまい、火床しか同化できなかった。東壁の南東コーナー寄りである。

炉：床中央付近にあり、鉄鎌が直上にあった。

遺物：あまり多くない。鉄鎌は脱塩・錆取り・保存処理を施しておらず、未実測のため写真のみ掲載した。土器は(26~29)が出土。黒色土器A坏A(26~28)は床面遺物で、底部回転糸切り未調整で、内面のミガキはさほど形骸化していない。これらより9世紀後半に相当する。灰釉陶器椀(29)は覆土最上層出土の大原2号窯式で埋没の終末段階の投棄か。



第68図 第43号住居跡実測図 (1:60)

第44号住居跡 (第7・69・77図、写真50・52)

位 置 KV～KX-63～65グリッド、南緩斜面。

検 出 II層下部～III層上面で検出。重機による先行トレーナで当て、付近を面剥ぎするきっかけとなった。

覆 土 Iが単層で堆積する。

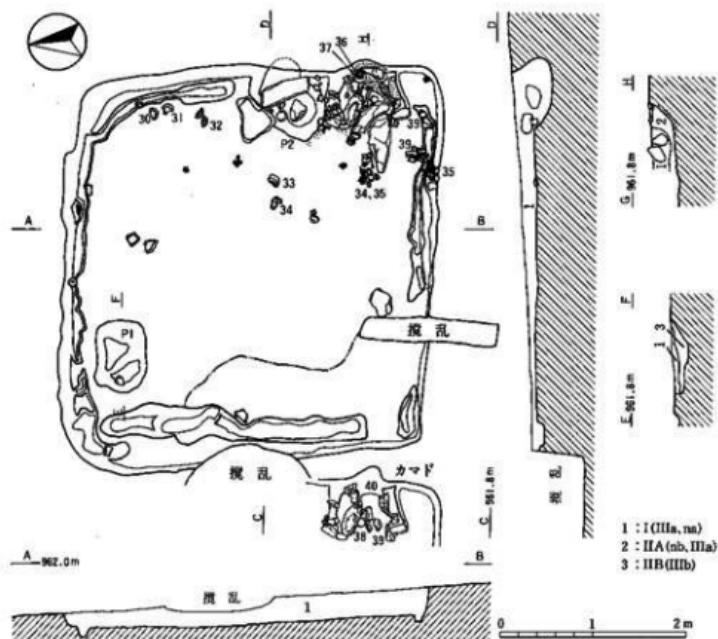
規模・形態 1辺400±10cmで、方形。

床 壁 東端を除き全面的に堅緻な貼り床で、壁は垂直に近い。壁直下または壁から3～33cmの距離において深さ2～14cmの周溝が断続する。

ビ ッ ト かまど左脇と北西のコーナー付近にある。かまど脇のものは壁を抉り込み、巨礫や人頭大の礫が遺物と共に入っていた。

か ま ど 石組で南東コーナーにあり、東を向く。袖石は袖内外に配され、天井石は火床上にずれ落ちていた。支脚石が屹立したまま残っていた。

遺 物 かまど火床上や周辺、東壁際に集中し、大量に投棄されていた。(30～40)を掲載した。灰釉陶器皿(30)、同椀(31・33)は大原2号窯式、完形の同折縁皿(32)



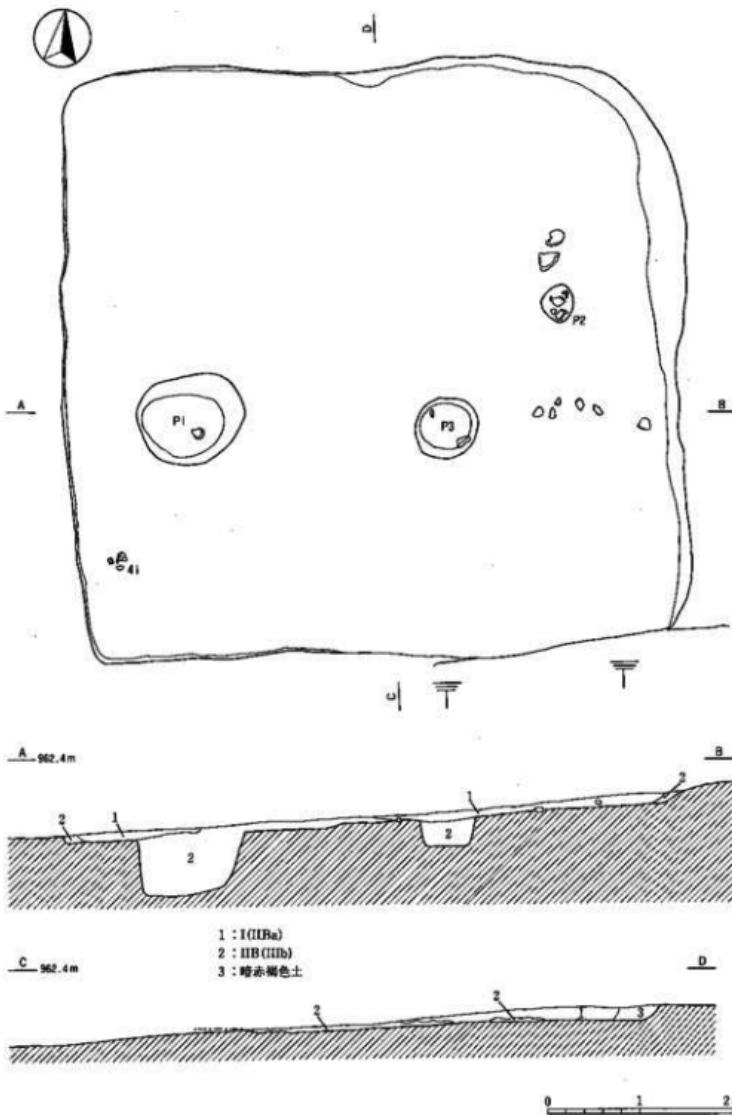
は虎渓山1号窯式か。すべて漬けがけ施釉である。黒色土器A椀(34・35)は内面ヨコミガキ、外面ロクロ調整で、やや特異な暗文がみられる。完形の土師器壺A(38)は内面口端部に炭化物が付着し、灯明皿か。底部は(30)が回転ヘラ削り、(31・32・36~38)は底部回転糸切りで、(38)のみ左方向である。土師器羽釜A(39)は内面ヨコ方向のハケ目、外面は鋸部と口縁部をロクロ調整、それ以下をハケ後ナデ調整している。本跡は10世紀中頃~後半であろう。

第45号住居跡 (第7・70・78図、写真51・144)

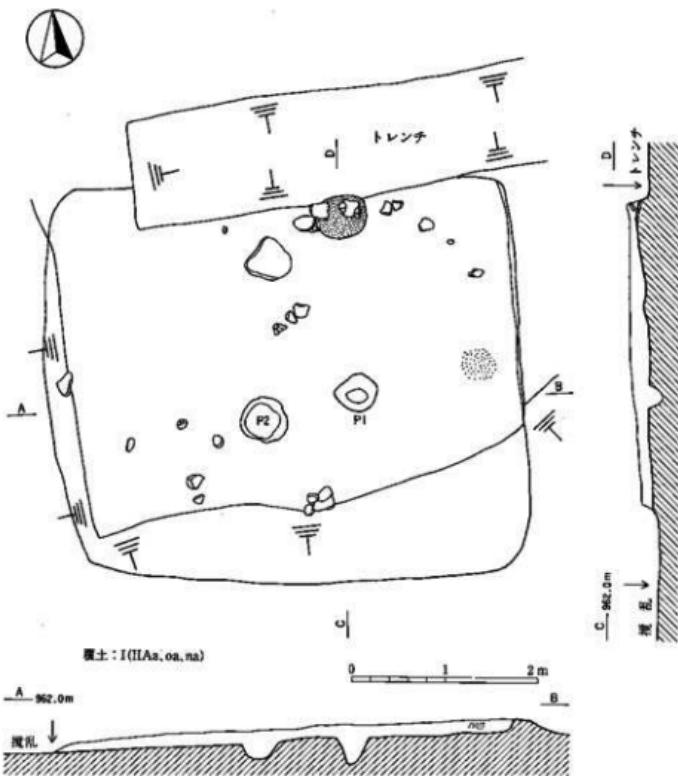
- 位 置：KY～LC-61～64グリッド、南緩斜面。
- 検 出：II層中からIII層上面で、北東側で明瞭、南西側で不明瞭であった。
- 覆 土：IとIIが堆積する。自然埋没であろう。
- 規模・形態：660×634cmで方形である。
- 床 壁：床は堅い。壁は一般的な傾きで、壁高は最もよく残る北東側で48cmである。
- ビ ッ ト：3基あるが、たまたま本跡の床面で検出されたのでピットとしたものの、本跡への帰属性は判然としない。
- か ま ど：本跡にはかまどやその痕跡も無い。本跡は住居跡ではなく、竪穴状遺構とした方が妥当である。
- 遺 物：床面から(41)、覆土から(42)の土師器壺Aが出土した。何れもロクロ調整、底部回転糸切り未調整で、(41)の焼成はやや軟質である。東壁際中央付近の床面上に拳大の石が6個あり、うち1個は縄文時代の磨製石斧である。他の5個の砾と同様な目的で意図的に持ち込まれたものと考える。本跡は10世紀中頃の所産であろう。

第46号住居跡 (第7・71図)

- 位 置：LB～LD-56～58グリッド、南緩斜面。
- 検 出：重機による先行トレンチでI層中に焼土の帯が断面で検出された。すぐに住居跡のかまどのそれと考えられたが、I層中にIが堆積しており、検出は難航した。
- 覆 土：微量の焼土ブロックを含んでIが単層で堆積する。
- 規模・形態：436×510cmの長方形。
- 床 壁：黒い床は軟弱で、壁は東壁の一部しか検出できなかった。垂直に近い。
- ビ ッ ト：床面中央付近に用途不明のものが2基ある。
- か ま ど：北壁中央よりやや東寄りに火床が検出された。袖石に用いられたと考えられる石が火床周辺に散乱し、袖の原形はなかった。
- 遺 物：かまど付近の床面にみられるが僅少である。固化できるものはない。



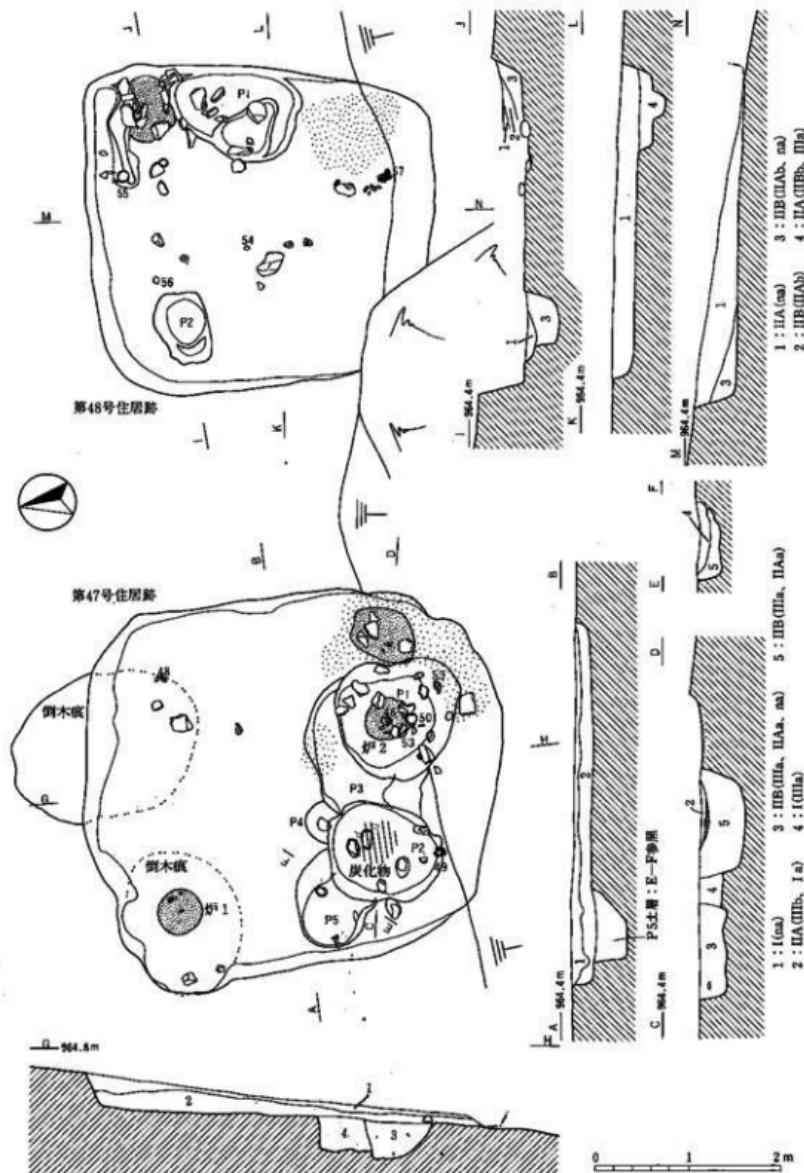
第70図 第45号住居跡実測図（1:60）



第71図 第46号住居跡実測図 (1:60)

第47号住居跡 (第7・72・78図、写真54・145)

- 位 置: LW~LX-47~49グリッド、南斜面。
- 検 出: 北半はIII層上面、南半はII層下部で明瞭であった。
- 覆 土: 上層はIが自然埋没する。下層も自然埋没であると思われるが、Iを基調とする黒褐色土が ϕ ~70mmのローム・ブロックを30%含んでいる。
- 規模・形態: 397×448cmの隅丸長方形で、北壁・北西コーナーは飼木痕を利用している。
- 床・壁: 床は軟弱である。壁は急な傾斜で、いちばん深さの残る北壁で36cmを測る。
- ビット: 南半に集中し、小さいビット1基と大穴4基が切り合う。 $P_4 \rightarrow P_3 \cdot P_5 \rightarrow P_1 \cdot P_2$ の順に作られており、何らかの目的で掘られては埋められるということを居住期間内に繰り返したと思われる。



第72図 第47・48号住居跡実測図 (1 : 60)

かまど：南東コーナー寄りの東向きにあり、袖石に用いられたとみられる礫が火床付近に散乱していた。火床の周辺はコーナー全般に焼土が拡がる。

炉：北西コーナーに1基、かまどの40cm前方に1基、計2基がある。これは単に床面上の焼土の拡がりを捉えたものではなく、明らかに炉として機能したものである。炉2はP1上の中央にあり、当然のことであるが、炉2が機能した時点ではP1は埋まっていたことになる。

遺物：かまどの周辺に集中する。(43~53)があり、10世紀中頃~後半に属する。土師器壺A(44)は内外面にうすく炭素が付着する。土師器壺A(43~45)、同碗(48・49)はロクロ調整、(43~45)は底部回転糸切り未調整である。土師器壺A(46・47)は非ロクロ成形で、ナデや弱いミガキにより調整され、口端部の稜のつくだし、底部の木葉痕など極めて特異な製作技法をもつ。灰釉陶器皿(50)、同碗(51・52)は大原2号窯式である。(50)底部には中央に僅かにロクロ調整前の回転ヘラ削りが残存し、(51)外面下半は回転ヘラ削り調整である。小型壺(53)はロクロ成形されるが、歪みが激しく統成は極めて軟質である。(43・46・50・51)は炉2の直上にあった。土器群は廃絶時の廃棄と考えられる。

第48号住居跡 (第7・72・78図、写真54・146)

位置：MA~MC-47・48グリッド、南斜面。

検出：I層~III層にまたがっており、北西側でIII層上面、南東側でI層下部の検出。

覆土：Iを基調とする。壁際にIより明るい色調の三角堆土があり、自然埋没である。

規模・形態：353×368cmの方形。

床・壁：床は軟弱である。南半はI中にある。南東コーナーには焼土が拡がる。壁は急な傾斜で、最も残りの良い北西側で54cmの高さがあるが、傾斜地のため南壁は残っていない。

ピット：北西コーナーに1基あり、かまど右脇には大きな穴が設けられている。

かまど：袖石とロームを用いて作られ、北東コーナーにあって東を向くが、左袖と北壁の間にはほとんどスペースがない。火床は壁に向かってせり上がっていた。

遺物：かまど付近、中央付近、南東コーナー付近に床面遺物があったが、量的に多くはない。床面遺物は(54~57)があり、10世紀中頃に帰属する。灰釉陶器皿(55)は虎渓山1号窯式の完形品、同碗(56)は大原2号窯式後半~虎渓山1号窯式である。(54~56)はロクロ調整、底部回転糸切りである。土師器壺(57)は外面タテ、内面ヨコのハケ目調整である。

第49号住居跡 (第7・73・39図、写真54・147)

位 置 : MO~MQ-27~30、南西緩斜面。

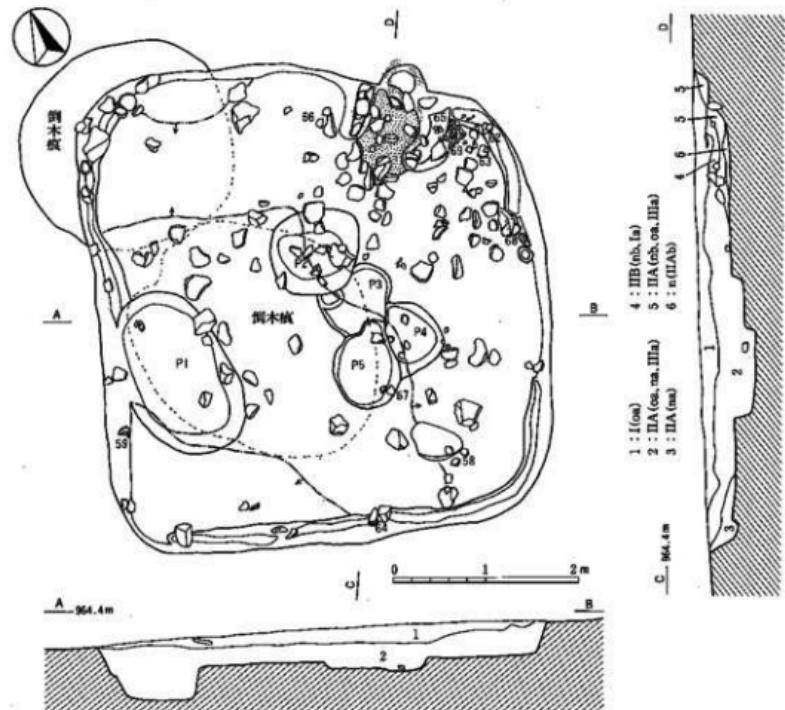
検 出 : II層下部~III層上面で、礫を多含する地山に掘り込まれている。

覆 土 : 上層がI、下層はIIを基調とする。いずれにも周辺の地山に多い~30cm大の礫が7%程度入り込む。

規模・形態 : 518×480cmの隅丸方形である。掘り易さから大きな倒木痕の重なりを利用して、堅穴が掘られている。

床・壁 : 床の約3/5の面積はよく叩きしめられている。壁は一般的な角度の傾斜で、検出面から36cmの深さがある。南西コーナーを除くコーナーと、南壁直下に幅20cm前後で深さ2~10cmの周溝がある。

ビット : 西壁際に大きな穴がある。床中央付近に4基のビットが重複する。いずれも用途不明である。



第73図 第49号住居跡実測図 (1:60)

かまど：北壁の北東コーナー寄りで、袖石の全ては残存していなかった。火床はよく焼ける。
遺物：かまと脇と壁際に多くの床面遺物がある。遺物の出土量は当遺跡の平安住居跡中最多くであるが、細かく粉碎された廃棄品ばかりである。とりわけ北東コーナーには夥しい遺物があった。土器は（58～69）があり、本跡時期は10世紀中頃～後半であろう。土師器壺A（58～63）、同皿A（64）はロクロ調整、底部回転糸切りである。灰釉陶器碗（67・68）は大原2号窯式、同皿（65・66）は虎渓山1号窯式である。（65～68）は漬け掛け施釉で（65）は内面全面施釉される。（65・67）底部には僅かに回転糸切り痕が残る。土師器甕底部（69）は両面ナデ調整された内面に炭化物が付着し、底部には木葉痕がある。

第50・54号住居跡（第7・74・79図、写真54・148）

位置：第50号住居跡はMT～MV-29～33グリッド、第54号住居跡はMT～MV-30～32グリッド、南西緩斜面にある。第54号住居跡は第50号住居跡の内側に収まる。

検出：II層下面～III層上面で、礫を多含する地山に掘り込まれている。当初1軒の住居跡として調査を開始したところ、第50号住居跡の床面が不連続で段差を生じ、第54号住居跡の重複が分かった。第54号住居跡の方が新しい。両者は偶然の切り合いではなく、建て替えによるものと考えられる。

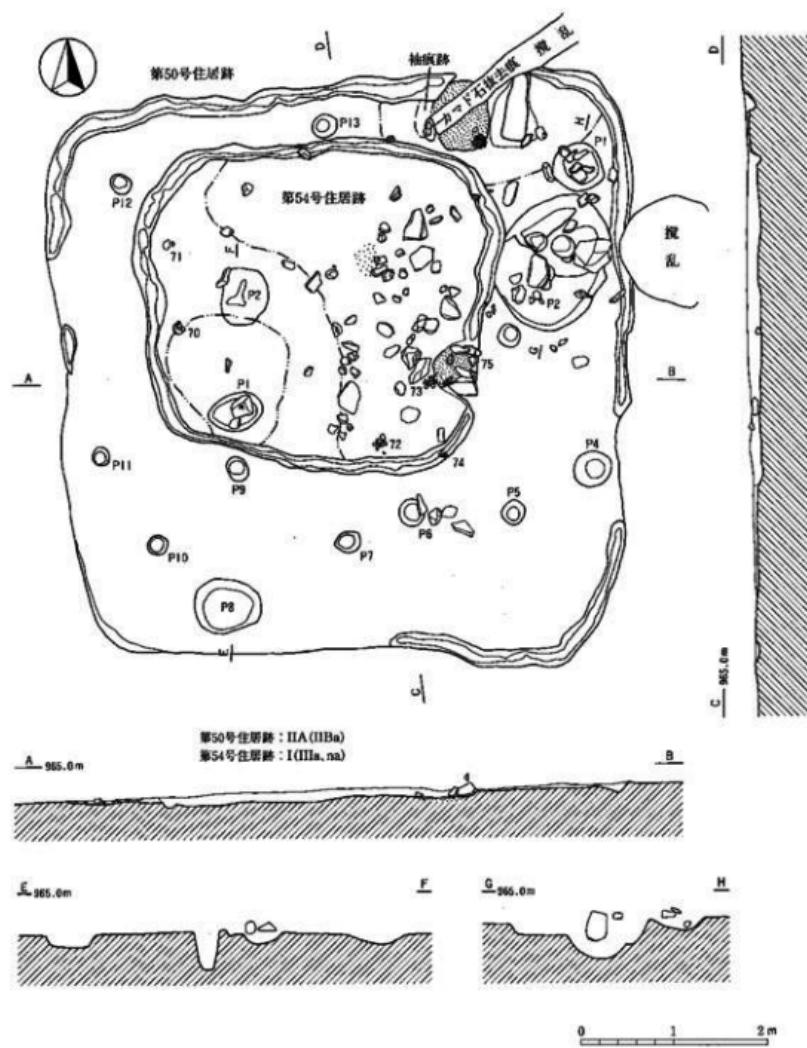
規模・形態：いずれも隅丸方形で、何らかの理由により大幅に規模を縮小し、610×620cmのものを390×358cmに作り替えている。縮小率は37%である。

床・壁：第50号住居跡はかまと周辺、第54号住居跡は東半を含め全体の3/4の面積に貼り床がある。貼り床の確認できない部分も軟弱ではない。いずれも壁に沿って周溝が巡る。第50号住居跡では検出されなかった部分があるが、元来全周していたと考える。第50号住居跡では、検出面から床面までが浅く、壁の状態が分からぬ。第54号住居跡も深くではなく、周溝の立ち上がりと壁は同一で、壁の様子は判然としない。

ピット：第50号住居跡には13基、第54号住居跡には2基のピットが確認された。深さは、第50号住居跡では、P1～P13の順に14、43、37、66、25、15、19、16、42、14、18、21、24cm、第54号住居跡では、P1が11cm、P2は15cmである。

かまど：主軸が90度変わって、北壁の北東コーナー寄りから、東壁の南東コーナー寄りに作り替えられた。第50号住居跡は火床と袖の基部および袖石の抜去痕が残る。第54号住居跡は両袖石とも残るが、火床も小さく貧弱である。

遺物：第50号住居跡では、第54号住居跡に移されたためか、ほとんど遺物は無い。第54号住居跡には土師器壺A（70～74）、同碗（75）があり、10世紀後半にあたる。すべてロクロ調整、底部回転糸切りである。（71）は灯明皿で口端2カ所に灯芯の痕跡がある。



第74圖 第50・54号住居跡実測図 (1:60)

(2) 小 堅 穴

覆土・遺物から平安時代の小堅穴及び平安時代と考えられる小堅穴は24基あり、うち15基は遺物の出土が無かった。このうち5基を図化した。図表から読み取れる情報は極力記述しない。

小堅穴5 (第3・75図)

当初は第6号住居跡として調査を開始したものである。2段構造で、水田造成により南半を欠損する。土師器壊片と甕片を数片出土した。用途は不明である。

小堅穴11 (第3・75図、写真56)

逆三角堆土が自然埋没の様相を示すが、第4層は掘られてからあまり時間をおかずして埋没したものである。礫は埋没の終盤で投棄されたものであるが、遺物の出土は皆無である。用途不明。

小堅穴73 (第4・75図、写真69・149)

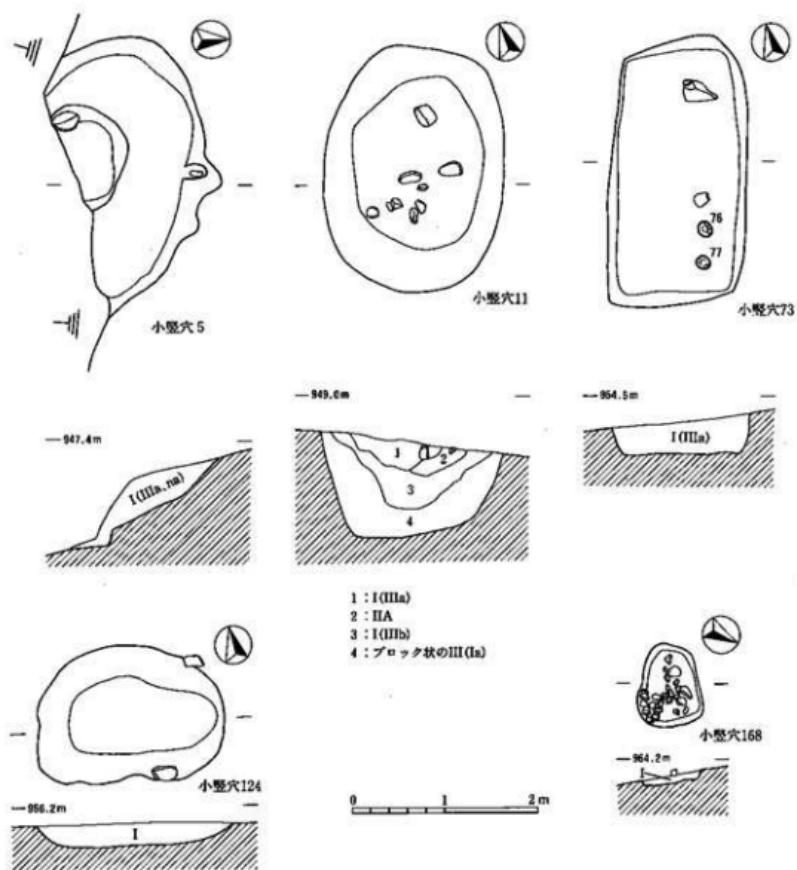
10世紀前半の土坑墓で、墨書「+」?を施した黒色土器A壊A(76)と大原2号窯式の灰釉陶器碗(77)が副葬される。いずれも完形品である。(76)は内面斜へヨコ方向のミガキ、外面ロクロ成形後、底部を持ちヘラ削りされる。(77)は底部と外面下半は回転ヘラ削り、内面と外面上半と高台部はロクロ調整である。その位置と土坑規模から、頭部を南とする伸展葬であると分かるが、微塵の骨片も残存していなかった。

小堅穴124 (第5・75図)

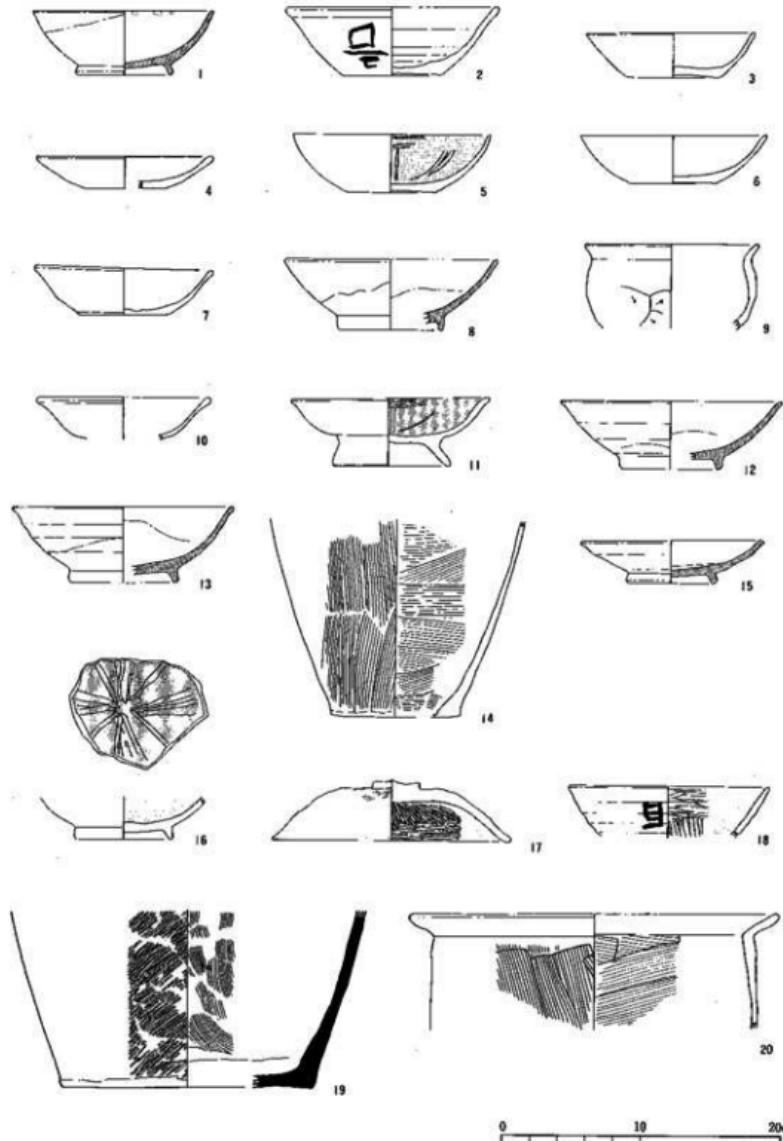
第38号住居跡の上方に位置し、自然埋没である。遺物は覆土中にあり少ない。須恵器大甕片1片を出土した。

小堅穴168 (第7・75図、写真70)

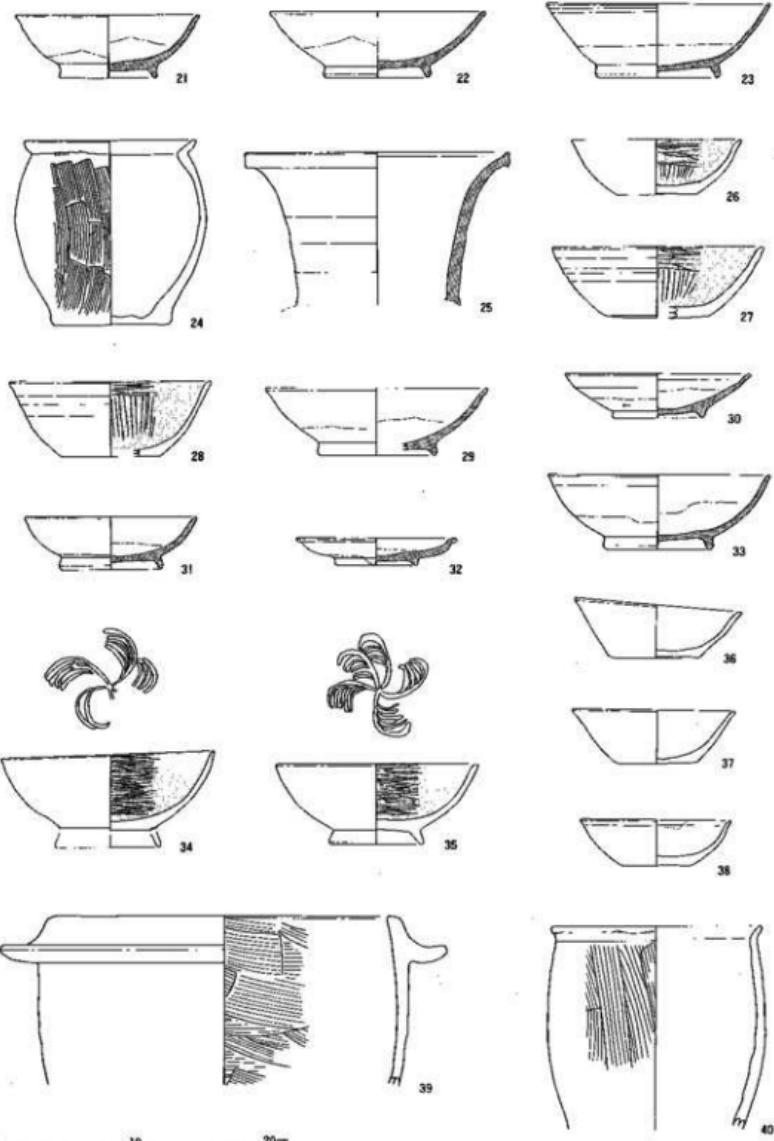
第47号住居跡のかまど東方にあり、拳大の円窓を中心に25個の礫が浅い掘り込みの中に配される。I層中に作られている。遺物は皆無である。



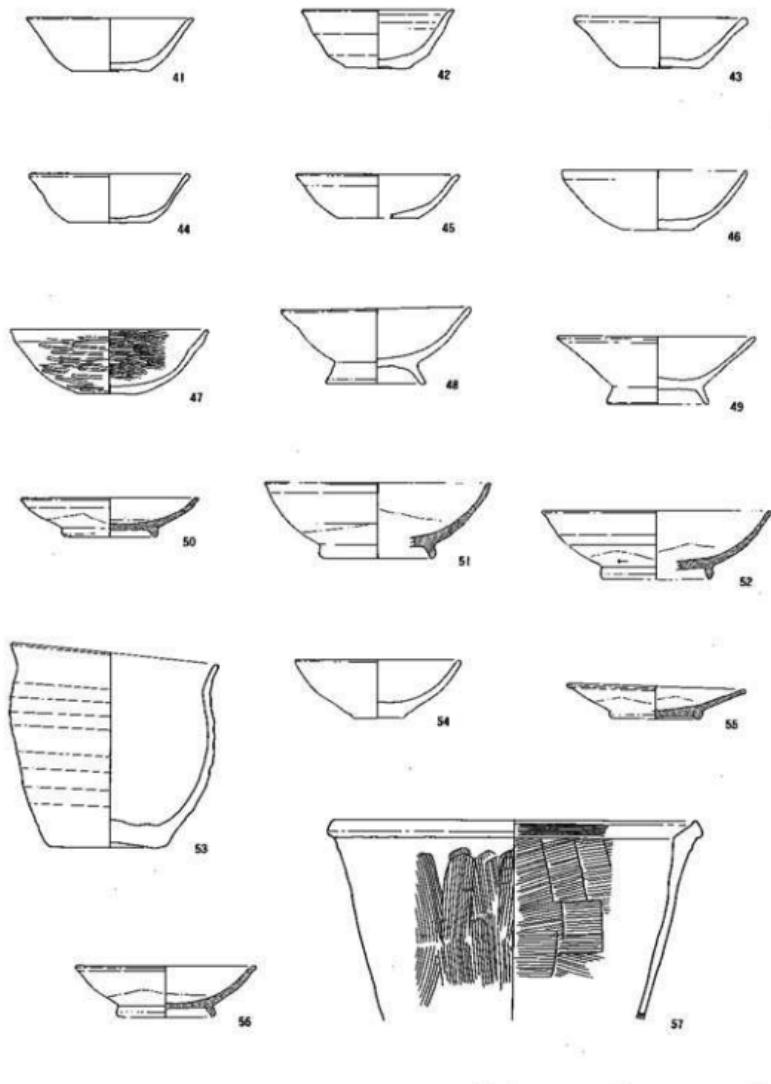
第75図 小堅穴実測図 (1:60)



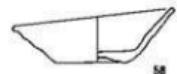
第76図 平安時代土器実測図(1)(1:4)



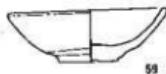
第77図 平安時代土器実測図(2) (1:4)



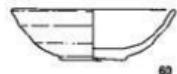
第78図 平安時代土器実測図(3)(1:4)



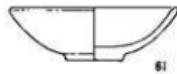
58



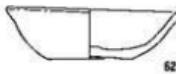
59



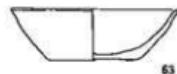
60



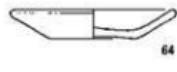
61



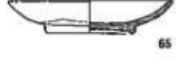
62



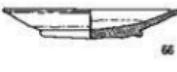
63



64



65



66



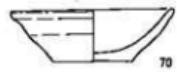
67



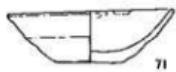
68



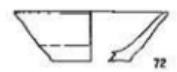
69



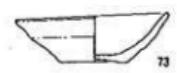
70



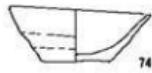
71



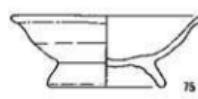
72



73



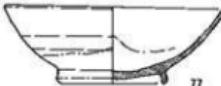
74



75



76



77



第79図 平安時代土器実測図(4)(1:4)

小堅穴一覧表 1

番号	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	時 代	備 考
1	DC-DD-72	不整形	80	66	23	近世以降	人為的埋没
2	DC-68	円形	83	78	25	近世以降	人為的埋没
3	DC~DE-66・67	長円形	357	97	162	縄文	蓋とし穴
4	DG-DH-68	円形	105	93	35	縄文	
5	DY~EA-66・67	長円形	(303)	(212)	103	平安	土師器坏・壺片7、攪乱をうける
6	DL-72・73	楕丸方形	176	111	30	縄文	
7	DM-74	楕丸方形	105	65	22	縄文	
8	DP~DR-71・72	円形	222	209	185	縄文?	
9	DS-70	不整形	103	85	29	縄文	
10	DS-70	不整形	75	72	35	平安?	
11	DW-DX-70・71	楕丸方形	265	192	123	不明	
12	DW-DX-67	不整形	97	58	31	平安	
13	EM-69	不整形	98	70	18	縄文	
14	FC-69・70	円形	167	165	16	縄文	
15	FE-68	不整形	75	70	18	縄文	人為的埋没
16	FE-67	長円形	68	47	43	縄文	人為的埋没
17	FF-FG-67	不整形	139	105	46	縄文	
18	FG-67	長円形	128	71	62	縄文	
19	FH-FI-65	円形	152	145	41	縄文	
20	FE-70	不整形	99	72	34	縄文	
21	FH-FI-69	不整形	119	108	68	縄文	記録あり、縄文土器片1
22	FW~FY-65	長円形	413	168	163	縄文	蓋とし穴、第10号住居跡を切る、 縄文土器片1
24	GD-60・61	円形	95	84	42	縄文	
25	FH-FI-68・69	円形	156	140	31	不明	
26	GA-67	長円形	80	63	21	縄文	
27	GA-66・67	円形	55	52	29	縄文	
28	GA-GB-67・68	長円形	(114)	91	34	縄文	攪乱をうける
29	GD-68	円形	60	53	16	不明	
30	GD-GE-68	長円形	125	85	36	縄文	小堅穴II7を切る
31	GD-67・68	円形	113	112	39	縄文	小堅穴II7を切る
32	GE-68	長円形	108	73	31	平安	土師器片1、縄文土器片2、粘板 若削片1
33	GE-66・67	不整形	86	76	56	縄文	
34	GE-GF-66	円形	54	43	23	縄文	
35	GF-65・66	不整形	143	127	56	縄文?	人為的埋没、縄文土器片4
36	GG-GH-65	長円形	90	63	41	不明	
37	GJ-64	長円形	97	66	37	縄文?	黒曜石1片
38	GK-62	長円形	85	65	42	不明	小堅穴39を切る
39	GK-62	長円形	92	(64)	44	不明	小堅穴38に切られる
40	GK-GL-65	長円形	207	117	19	縄文?	縄文土器片10
41	GK-67・68	円形	87	74	22	縄文?	縄文土器片10、黒曜石3片
42	GG-GH-70・71	楕丸方形	76	61	37	縄文	縄文土器片1
43	GF-73・74	楕丸方形	78	55	30	縄文	

小堅穴一覧表 2

番号	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	時 代	備 考
44	GJ-70・71	長円形	99	75	31	縄文	縄文土器片7、黒曜石1片
45	GK-70	円形	60	55	31	縄文	
46	GL-72	長円形	87	67	34	縄文	
47	GN-72	鶴丸方形	172	101	33	縄文	配線あり、縄文土器片4、黒曜石3片
48	GM-GN-71・72	円形	73	66	26	縄文	配線あり、縄文土器片2、黒曜石1片
49	GN-71・72	鶴丸方形	127	70	26	縄文	縄文土器片1、黒曜石2片
50	GN-70	円形	85	72	23	縄文	
51	GM-GN-66・67	不整形	134	120	55	縄文	縄文土器片2
52	GO-67・68	鶴丸方形	79	56	42	縄文	
53	GO-GP-67・68	円形	74	(46)	30	縄文	黒曜石3片、小堅穴54に切られる
54	GP-68	鶴丸方形	98	78	31	縄文?	縄文土器片1、小堅穴53を切る
55	GP-65・66	長円形	126	94	31	縄文?	黒曜石1片
56	GP-66・67	円形	114	108	32	縄文?	
57	GQ-68	長円形	82	42	17	縄文	黒曜石1片
58	GQ-69	長円形	72	55	34	縄文	
59	GO-GP-70	円形	70	57	24	縄文	
60	GQ-69・70	不整形	65	52	24	縄文	
61	GP-71・72	不整形	144	110	27	縄文	小堅穴62に切られる
62	GP-GQ-71・72	不整形	75	50	38	縄文	小堅穴61を切る
63	GP-72・73	不整形	90	72	40	縄文	
64	GR-72・73	不整形	96	69	44	縄文	縄文土器片6、黒曜石2片
65	GR-72	不整形	74	58	26	縄文	
66	GR+GS-72	円形	85	73	45	縄文	縄文土器片4、小堅穴67を切る
67	GR+GS-71・72	長円形	(70)	52	26	縄文	小堅穴66に切られる
68	GR-71	長円形	95	68	30	縄文	
69	GS+GT-71	長円形	124	77	25	縄文	
70	GT-69・70	長円形	66	52	24	縄文	
71	GT-68・69	不整形	123	109	25	縄文	
73	GS+GT-61・62	方形	280	145	48	平安	土坑墓。骨出土せず。副葬品は、黒色土器A環A1・伏羲陶器碗1
74	GR-60・61	円形	96	85	47	縄文	
75	GQ-60	円形	85	72	35	縄文	
76	GP+GQ-59・60	円形	145	140	80	縄文	縄文土器片3
77	GN+GO-61・62	円形	98	78	40	縄文	縄文土器片1
78	GN-62	円形	86	72	31	縄文	縄文土器片4、打製石斧片1
79	GR+GS-57	円形	90	72	47	平安	
81	GX+GY-58	不整形	98	61	53	平安?	
82	HH+HI-55	不整形	336	139	53	縄文	縄文土器片1、黒曜石8片 落とし穴、小堅穴118を切る
83	HI+HJ-53・54	長円形	292	120	114	縄文	落とし穴
84	HI+HK-55・56	長円形	390	119	189	縄文	落とし穴
85	HI+HK-57・58	長円形	353	176	163	縄文	落とし穴、小堅穴118を切る
86	HO-62	長円形	153	58	19	近世以降	

小豎穴一覧表 3

番号	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	時 代	備 考
87	HQ-HR-62	円形	162	140	33	縄文	
88	HL-HM-65	不整形	92	68	30	不明	
89	IHK-HL-65	長円形	95	70	32	縄文	縄文土器片 1
90	HK-64-65	長円形	130	92	42	縄文	
91	HH-62	円形	125	87	29	縄文	
92	HG-HH-64-65	円形	145	130	73	縄文	
93	HF-65	円形	93	80	37	縄文	
94	HD-HE-65-66	不整形	85	73	24	縄文	
95	HA-63	長円形	98	76	20	縄文	黒曜石 1 片
96	HA-63-64	不整形	94	89	41	縄文	
97	GV-64-65	円形	68	55	12	縄文	
98	GW-67-68	不整形	133	114	46	縄文	
99	GW-GX-68	円形	79	68	38	縄文	
100	HA-67	円形	107	104	36	縄文	
101	GY-HA-69	円形	82	79	30	縄文	
102	GX-GY-70-71	長円形	168	113	28	縄文	
103	HB-HC-71	不整形	103	74	33	縄文	
104	HD-69	円形	72	61	27	縄文	
105	HE-HF-68-69	不整形	54	41	24	縄文	
106	HE-HF-69	長円形	64	49	26	縄文	
107	HF-70	長円形	103	74	39	縄文	
108	HF-HG-71-72	不整形	92	71	23	縄文	
109	HI-68	不整形	83	62	29	不明	
110	HK-HL-73-74	円形	135	117	36	縄文	
111	HF-HG-73-74	不整形	123	102	43	縄文	
112	GY-IIA-77	長円形	208	152	64	縄文	
113	GQ-GR-75	円形	84	65	24	縄文	深鉢 (残存度3/4)
114	GP-GQ-78	長円形	114	80	29	縄文	
115	GR-73	不整形	103	77	15	縄文	集石炉、縄38、縄文土器片60、黒曜石 2 片
116	HJ-72-73	不整形	94	80	27	縄文	集石炉、縄17
117	GD-68	長円形	(60)	60	42	縄文	小堅穴30・小堅穴31に切られる
118	HI-HJ-54	長円形	210	(53)	116	縄文	落とし穴、小堅穴83に切られる
119	IIP-55	円形	56	48	35	縄文	
120	HO-HP-55	円形	50	45	12	縄文	
121	IE-52	円形	27	26	21	不明	
122	IE-IF-51-52	不整形	84	74	17	不明	
123	IR-50	円形	43	40	37	不明	
124	IS-IT-49-50	不整形	210	146	45	平安	須恵器片 1、土師器片 1、縄文土器片 2、黒曜石 1 片
125	IU-45-46	円形	90	86	30	不明	
126	IV-46	不整形	77	59	33	不明	
127	JG-54	円形	101	100	46	縄文	配石炉
128	JD-63	円形	132	116	41	縄文	

小堅穴一覧表 4

番号	位 置	形	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	時 代	備 考
129	JF~JH-68~69	長円形	393	146	111	縄文	落とし穴
130	JP-73	鶏丸方形	114	81	39	縄文	
131	JT-71	不整形	116	100	57	縄文	
132	JU-68	不整形	116	77	33	縄文	小堅穴133を切る
133	JV-68	長円形	(77)	60	49	縄文	小堅穴132に切られる
134	JN-JO-60	円形	117	112	36	縄文(中期初頭)	
135	JP-58	円形	113	68	26	縄文	
136	JP-JQ-60~61	円形	136	115	46	縄文(中期初頭)	縄文土器片1、黒曜石3片
137	JP-JQ-58	円形	80	58	27	縄文	小堅穴138を切る
138	JQ-58	円形	(80)	72	33	縄文	小堅穴137に切られる
139	JR-58	鶏丸方形	137	101	40	縄文(中期初頭)	深鉢1塊置、黒曜石1片、小堅穴140を切る
140	JR-58	不整形	63	(32)	16	縄文	小堅穴139・141に切られる
141	JR-JS-58~59	不整形	85	80	35	縄文(中期初頭)	配腰あり、縄文土器片14、黒曜石7片、小堅穴140を切る
142	JR-JS-57	円形	125	99	32	縄文	
143	JS-57~58	円形	106	102	23	縄文(中期初頭)	縄文土器片10、黒曜石片13
144	JT-56	円形	77	74	37	縄文	
145	JT-JU-62	円形	80	68	30	縄文	
146	JU-62	円形	70	63	21	縄文	
147	JU-JV-57	円形	117	100	54	縄文(中期初頭)	縄文土器片1
148	JW-58~59	不整形	82	(60)	42	平安	土師器片6、攪乱をうける
149	JX-57~58	円形	111	111	38	縄文	
150	JA-JB-63	不整形	(61)	60	27	不明	小堅穴151に切られる
151	KB-63	円形	68	53	36	不明	小堅穴150を切る
152	KC-56~57	鶏丸方形	131	83	36	平安?	
154	LA-LB-59	円形	73	62	26	縄文	
155	KW-KX-59	長円形	67	53	47	縄文	
156	KX-KY-59	鶏丸円形	71	65	25	平安?	
157	LB-59~60	円形	169	138	37	平安	灰釉陶器片3、土師器片1、黒曜石1片
158	KY-LA-60	円形	117	93	66	縄文	
159	LA-58	円形	71	60	24	平安?	
160	KY-LA-57	不整形	120	(63)	34	平安?	攪乱をうける
162	KX-50	円形	70	65	27	平安	
163	KX-KY-50	不整形	91	90	65	平安	
164	KY-51	不整形	82	75	39	平安	
165	LU-49	不整形	45	33	17	平安	
166	LX-LY-50	円形	110	102	17	平安	
168	LY-MA-47	不整形	98	71	14	平安?	集石遺構
169	II-IJ-51	長円形	57	40	26	不明	
170	JV-JW-57~58	方形	170	124	18	平安	第40号住居跡を切る
171	JS-JT-61~62	方形	110	102	27	平安?	
172	KX-KY-60	円形	123	105	49	平安	

VII まとめ

清水遺跡は、今回の最初で最後の調査により全貌が明らかになった。当初の予想通り、縄文時代と平安時代の複合遺跡であったが、何れの時代とも予想を越す軒数の竪穴住居跡が見つかった。遺跡として周知されていたD～I区（西部地区）、踏査による表面探査のみならず多数の遺構の顕現によって新知見として遺跡の拡がりが明らかになったI～M区（払沢地区）、複合遺跡とは言っても前者を縄文時代の集落跡、後者を平安時代の集落跡、即ち若干の例外を除き内容の異なる別の遺跡とすることもできる。更に前者にも、D区～E区西半の住居跡群とF区東端～I区の住居跡群の2つの集落跡のピークが存在し、総じて遺跡のボリュームが大まかに3つに分かれて分布することがわかった。住居跡の立地や集落の変遷、個々の住居跡の屋内施設に眼を向け、縄文・平安時代それぞれについて共通項を探って列挙し、まとめにかえたい。

縄文集落といえば舌状の台地に馬蹄形や環状の配置を示し、その内部に広場や土坑群を有するものが有名だが、当遺跡の配置はそういう典型的なムラの姿とは程遠い。第16～19・21・23～27号住居跡の配列やこれらの内部の小竪穴群は、あたかも小規模な環状集落を形成しているように見えるが、これらは併存したものではなく、中期中葉～後葉までを積み重ねた結果であり、偶然の配置である。縄文前期末ではD区に第1・3号、続く中期初頭では第3号を切って第4号とJ区に第39号の各住居が出現する。これらはボツ然としており、ムラというよりは「個」の様相を示す。中期中葉では、G区に第18・24・27号の3軒とI区に第36号の各住居が営まれる。中期後葉では、曾利II期に第7・9・13・14・17・19号等の各住居群が出現し、曾利III期には第10・11・12・16・21・23・29号等の各住居群が盛行して先行の廃絶住居跡にモノを投棄する。そして最終段階の曾利IV期には第33・53号等の住居がつくられるといったような変遷が窺える。これらの占地の仕方は時期毎にみれば、尾根の方向に沿って点在または帯状に配置している。環状の配置や中央広場はムラの結束や交流の高揚に理想的だが、その一方で当遺跡のような居住の在り方も歴然と存在することは忘れてはならない。

第11～13・23・51・52号といった住居跡の立地は大変興味深い。スキー場の中級者から上級者並の急傾斜に居住選地したこれらのプランは、等高線方向に長く斜面方向に短い形態を探り、それに合わせて柱穴も第13・23号住居跡のように長方形配列となるものや、第11・12・51・52号住居跡のように特殊な柱穴配置をもつものといったように、応变の形態変化を示しており、同時期の平坦部の住居の規格的な方形4本柱とは異なって、急斜面ゆえの制約が大きく反映したものと考えられる。下半を流出して半円形や三日月形を成すこれらの住居跡は、流出ではなく当初から半円形であったとする報告も成されているが、当遺跡の第13・23・51号住居跡の柱穴配置を見る限り、明らかに下半を流失している。旧来の発掘調査では、当初から遺構など存在するはずがな

いものとして、調査範囲から外れさえしかねなかったこれら曾利期の住居跡の立地は、該期の集落の在り方の一形態として見逃すことのできないものがある。そこには例えば水場の位置とか、何らかの利点や制約、そこに住まわなくてはならない必然性などがはたらいていたことであろう。

上屋構造を支え得る柱の建ち方は、5角形状・6角形状、更にはそれ以上の数の環状配列が中期中葉までの段階で一般的だが、中期後葉には規格的な4本主柱が確立し、柱径・埋設深度とも増大するが、一方で中期後葉においても、第35・52号住居跡のように5本主柱と考えられるもの、第9号住居跡のように6本主柱と考えられるもの、更には第17・28・33号住居跡のようにそれ以上の環状配列と考えられるものも存在している。建て替えが成されたものは、中期初頭では第3号住居跡、中期後葉では第15・25・32号住居跡である。なお床面上、柱の傍らに巨礫を配すものは第14・15・16・17・26号住居跡があり、これらは実生活上の必要感に支配されてのものであろう。第9号住居跡は傍柱巨礫のみならず奥壁に石列を配し、その切れ間に炉を有すことからも祭式に関連すると考えられる。

その他の施設には以下のようなものがある。入り口施設に閑連をもつビットと思われるものは第7・9・14号住居跡でみられた。周溝は第10・19・23・32・33・53号の6軒の住居跡に存在する。貯蔵穴として確実視されるものは第1・4号住居跡など中期初頭にみられる。埋甕は第10・13・16・19・21・35号住居跡に埋設され、正位と逆位が2分する。第10号住居跡は逆位ばかりが3基在った。第13号住居跡のものは主軸線上ではなく、見つかったものは第2の埋甕と考えられ、流失した南半入り口部にも在ったものと推察する。炉芯に土器または土器片を用いたものは、中期中葉では第24号、曾利二期では第17号住居跡がある。前者は深鉢胴部を2/5周ほど正位に埋設し、後者は口縁部が外反する深鉢上半部を逆位に炉底に置く。

中期中葉の4軒の住居跡のうち第24号住居跡以外は、炉石や炉底の被熱や焼土の集積がなく、生活の痕跡が窺い知れない。通常の食生活は屋外で成されたということ、複数存在する家のひとつ、或いは季節の家といったものも考えさせられる。

廃絶及び廃絶後の姿は、中期後葉において炉石の抜去と礫の投げ込みが顕著である。第9・26号住居跡のように遺存状態の良い炉はむしろ希有で、第10~13・15・16・23・25・33・35・51号住居跡で、炉石の一部またはほとんどが無くなっている。第11・13・51号の斜面に構築された住居では山側の炉石のみが残存している点が興味深く、第11・51号住居跡では当初より山側にしか炉石が存しなかった可能性もある。第35号住居跡は耕作の影響に因るものかもしれない。これらを除いては、当初よりそのような形態の炉であったり、掘り込みをもつ地床炉であったりしたものではなく、明らかに持ち去られている。礫の投げ込みは破損土器の投棄と相俟って成されたゴミ捨て場の様相を示し、中期後葉でも初源に出現した住居跡ほどこの傾向が強く、出土土器の多い住居跡は集落が存続していたことの証しでもある。

住居跡以外の遺構については、縄文時代では特徴的なものとして、集石炉・配石炉・配礫坑・落とし穴・土器埋置坑などがあるが、土器を埋設した中期初頭の小堅穴139、土器1個体分を出

土した中期後葉の小豎穴113、加曾利E系の土器大型破片と巨礫を配した小豎穴21、磨石と打製石斧を出土した中期後葉の小豎穴48の他は出土遺物が無く、住居跡群との関連が分からぬものが多い。7基の落とし穴は比較的近似した構築法をもち、小豎穴22が第10号住居跡を切ることから、これらは中期末以降の所産と考えられ、集落に隣接する性格のものではないことから、これらが設営された時点では集落としては機能しなくなっていたと考えられる。当遺跡の7基と同形態または酷似する形態のものが、村内では居沢尾根遺跡と芝原尾根遺跡で見つかっているが、後者の所見ではこの形態のものは縄文時代の他、古代以降に再出現する可能性があるとされた。また、7基のうち6基の覆土最上層には、平安住居跡の覆土に酷似する漆黒色の土が観られた。以上のことから7基は、今回は縄文時代として扱ったが下限は設定できず、それ以外の時期も考慮に入れた方が良いかもしれない。

次いで平安時代について述べる。

平安住居の立地は、南斜面または南西斜面の陽だまりにあって、傾斜の途上または傾斜が終わる端部に求められている。これは18を数える当遺跡の住居跡に1つの例外もなく、尾根頂部や平坦部につくられたものは皆無である。これは当該地方に特徴的な立地の在り方である。18軒は1時期に栄えた集落の姿ではなく、併存したものは1時期4~5軒程度であったと推測される。9世紀末~10世紀前半に現れた最初の群は、第8・22・38・40・42・43号などの住居跡で、これらにも時間幅があることから、それぞれは全くの単独といつていいほど距離を保っている。10世紀中頃として第30・42・47~49号住居跡などがあり、これらも点在している。10世紀後半にはやはり点在して第44・47・54号住居跡が営まれ、これを最後に居住選地されなくなる。最終段階では住居1軒の規模はとりわけ矮小化する。

床面ピットに関しては、主柱穴的な配列様相を示すものは、第37・40・50号住居跡が挙げられる。しかし、第40号は平面的配列では柱穴と感じられるが、異様に浅いもの、焼土が充填されたものばかりで柱穴ではないであろう。第37・50号住居跡についても、浅いもの・径の小さいものばかりで8世紀初頭以前の構造ではない。ほとんどの住居跡で柱穴と認められるものが検出されないことは当遺跡に限らず8世紀以降、古代の一般的な傾向であり、豎穴自体の小型化と併せて上屋構造や構築方法に変革が起こったことを示している。

カマド脇に大穴を有するものは第22・30・34・42・44・48・50号住居跡にみられる。これらはよく貯蔵穴として報告される場合があるが、むしろ灰溜めのピットなどカマドに関係のある何らかの施設とみるべきである。この他、第47・49号住居跡では意味不明の大穴が切り合う。また、第44・47・49号住居跡では倒木痕が床面から壁外にも抜がる(第72・73図)(第44号住居跡では平面図に表せなかった)。これらは倒木痕と住居跡との偶然の重複ではなく、倒木痕には漆黒色の腐植土が埋没しており、豎穴を掘り下げる際の掘り下げ易さから、好んで選地されたものと考える。J区以東では遺構外の倒木痕は皆無であり、倒木痕は全て豎穴に変換されたとさえ言い得る。この利用については類例を研究していないが、住居内施設としての大穴と誤認される危険性

も大いに孕んでいると思われる。

周溝は第34・40・42～44・49・50・54号住居跡にみられ、平安住居跡の半数近くにのぼる。全周するもの第42・43・54号住居跡、半周または局部的なもの第40・44・49・54号住居跡、豊穴掘削時の産物で意図したものではないかもしれないものの第34号住居跡に分かれる。

各住居跡とも土器の出土様相は投棄の相を示し、遺棄と認め得る状況を示すものはなかった。この他、廃絶の状態として顕著なものに礫の投げ込みがあり、第38・40・42・46～49号などの住居跡にみられる。カマド袖石の遺存状況は8・22・34・42・44・48・54号住居跡などで比較的原形に近く、第42・44号住居跡では天井石がずり落ちている。

平安時代では、住居跡以外の遺構は極めて少ない。特筆すべき状況は特に無い。

以上のように集落全体と遺構を中心に遺跡を概観したが、北の前尾根遺跡、南の雁頭沢遺跡、西の南平遺跡など、隣接する尾根とは相互の連関は現時点では特に看取されず、清水遺跡においては単独の尾根として繩文・平安ともに独自の展開を示していると言えそうだ。

繩文・平安時代とともに遺構平面図は埋没過程も含んだ最終的な姿しか示せなかった。厚い覆土最上層にある巨礫などは平面図化しても、あまり意味が無いはずである。ある程度の大きさをもった石や土器は柱状に残して床面まで下げた結果が平面図になっている。検出後は、先ず十文字にトレンチを入れて層位を確認し、それから層位ごとに遺物の記録を取って、その遺構に帰属性の高いものと、埋没過程に混入・投棄されたものとを分けていく努力をすべきである。しかしながら、調査人員の絶対数や調査期間、予算の制約などから十分な調査が施せなかつたことは反省しなければならない。

遺物については図を羅列し、事実記載のみに留まり、認識不足を痛感するばかりであり、土器の文様の説明、土器・石器製作時の技法や使用時の痕跡などの説明など不十分な点が多くあろうが、活用可能な資料があれば、研究に活かしていただければ幸いである。

最後に、猛暑・極寒の中、発掘調査にたずさわった方々ならびに関係者各位に厚く御礼申し上げる次第である。

写 真 図 版



写真1 遺跡全 景(西から)



写真2 西部地区全 景(東から)

写真図版 2



写真3 挝沢地区全景（西から）



写真4 F・G・H区遺構群（北から）

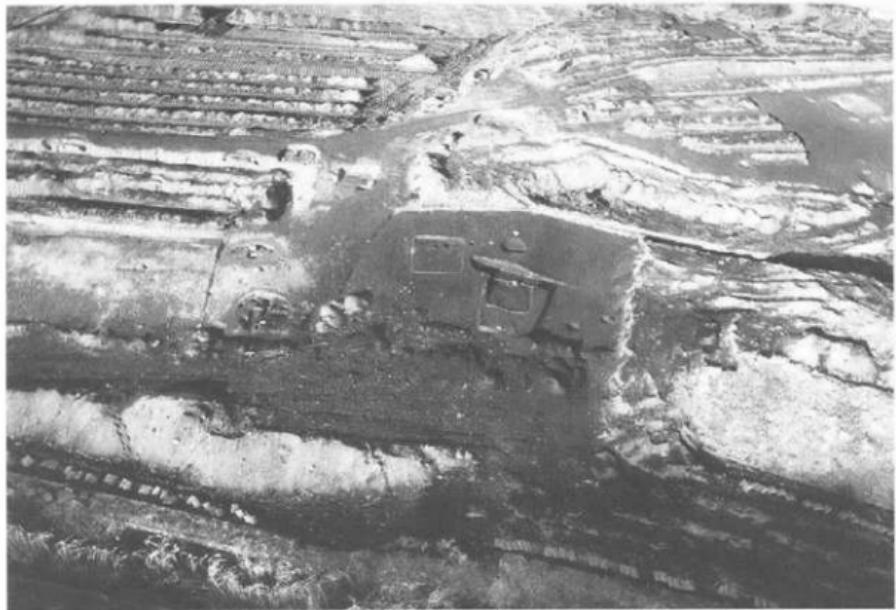


写真5 I区遺構群(南から)



写真6 J・K・L区遺構群(南から)

写真図版 4



写真7 第1号住居跡（東から）



写真8 第3号住居跡（東から）



写真9 第4号住居跡（東から）



写真10 第7号住居跡（南から）



写真11 第10号住居跡（南から）



写真12 第9号住居跡（南から）



写真13 第10号住居跡埋甕 1（東から）

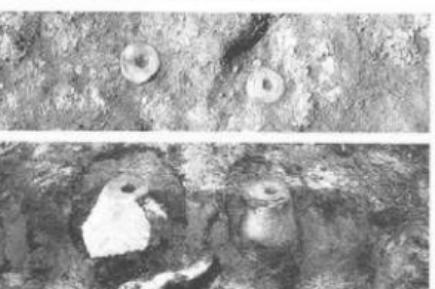


写真14 第10号住居跡埋甕 2・3（東から）

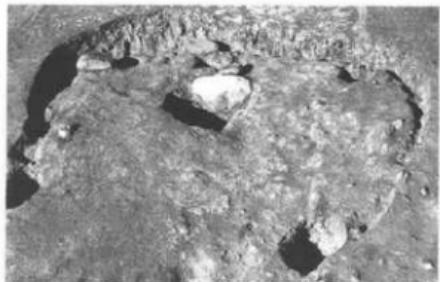


写真15 第13号住居跡（南から）



写真16 第13号住居跡埋甕（南から）



写真17 第14号住居跡（南から）



写真18 第14号住居跡（南から）



写真19 第16号住居跡（南から）

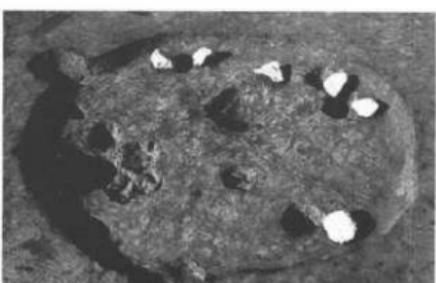


写真20 第15号住居跡（南から）



写真21 第16号住居跡埋甕（東から）



写真22 第17号住居跡（東から）

写真図版 6



写真23 第17号住居跡（南から）



写真24 第17号住居跡^炉（西から）



写真25 第18号住居跡（南から）



写真26 第18号住居跡^炉（西から）

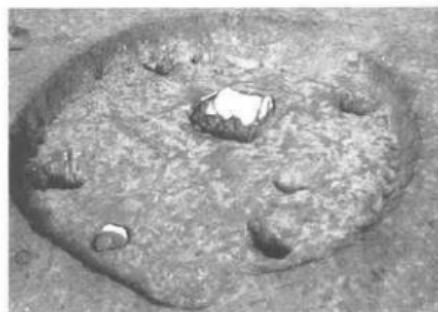


写真27 第19号住居跡（南から）



写真28 第19号住居跡埋甕（東から）



写真29 第21号・22号住居跡（南から）



写真30 第21号住居跡埋甕（東から）



写真31 第23号住居跡（南から）

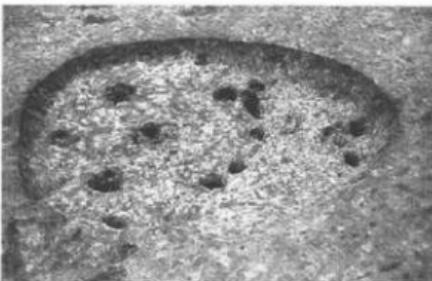


写真32 第24号住居跡炉（南から）

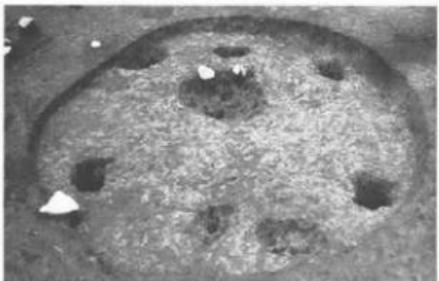


写真33 第25号住居跡（南から）

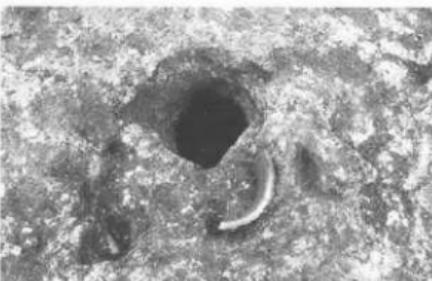


写真34 第24号住居跡炉（南から）



写真35 第26号住居跡（南から）



写真36 第26号住居跡炉（南から）



写真37 第28号住居跡（西から）



写真38 第27号住居跡（南から）

写真図版 8



写真39 第29号住居跡（北から）



写真40 第30号住居跡（南から）

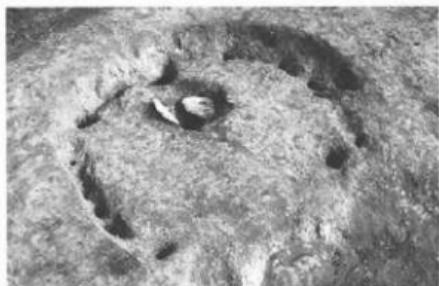


写真41 第33号住居跡（南から）



写真42 第34号住居跡（西から）



写真43 第35号住居跡（南から）



写真44 第38号住居跡（南から）

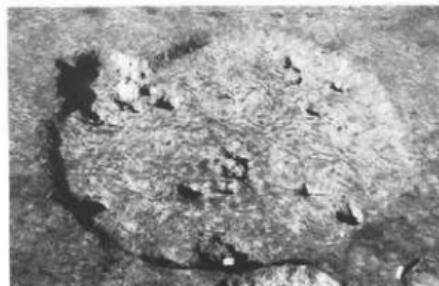


写真45 第39号住居跡（南から）



写真46 第40号住居跡（西から）



写真47 第42号住居跡（南から）



写真48 第42号住居跡かまど（南から）



写真49 第43号住居跡（西から）

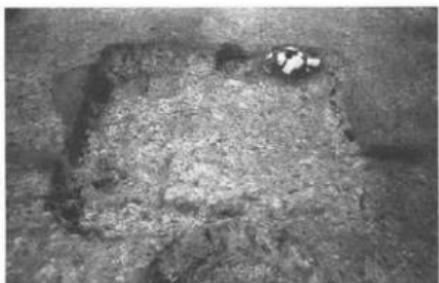


写真50 第44号住居跡（西から）



写真51 第45号住居跡（西から）



写真52 第44号住居跡かまど（西から）



写真53 第51号住居跡（東から）

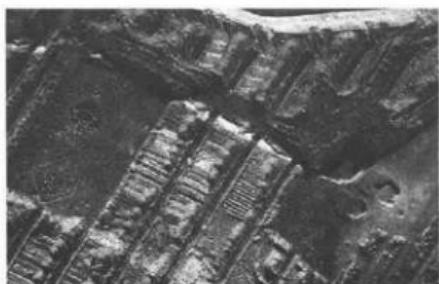


写真54 第47～50・54号住居跡（北から）

写真図版10

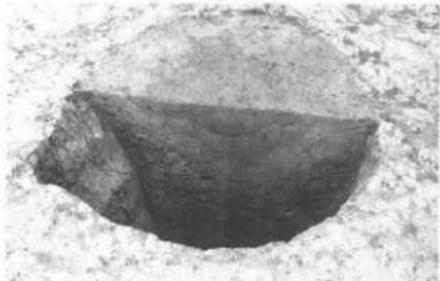


写真55 小竪穴 8 (南から)



写真56 小竪穴 11 (南から)

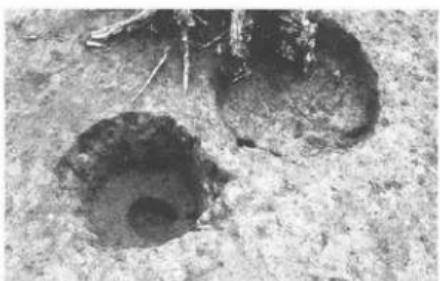


写真57 小竪穴21・25 (西から)

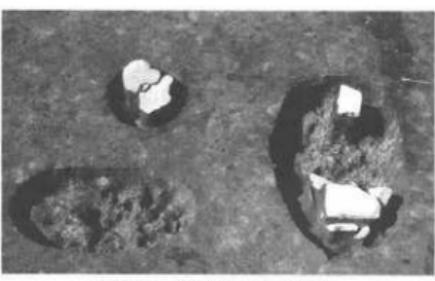


写真58 小竪穴47~49 (東から)



写真59 小竪穴 113 (東から)



写真60 小竪穴 139 (北から)



写真61 小竪穴 116 (南から)



写真62 小竪穴 127 (南から)

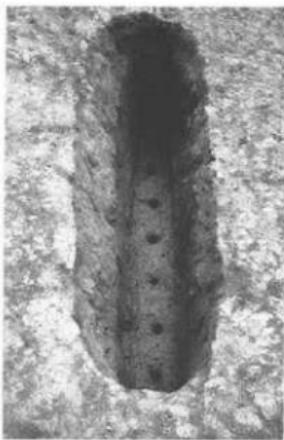


写真63 小 竪 穴 3 (西から)



写真64 小 竪 穴 22 (東から)



写真65 小 竪 穴 84 (西から)



写真66 小 竪 穴 85 (西から)



写真67 小 竪 穴 118・86 (西から)



写真68 小 竪 穴 129 (東から)



写真69 小 竪 穴 73 (東から)



写真70 小 竪 穴 168 (南から)

写真図版12



写真71 第4号住居跡土器(1)



写真72 第10号住居跡土器(2)



写真73 第10号住居跡土器(5)



写真74 第13号住居跡土器(8)



写真75 第14号住居跡土器(10)



写真76 第14号住居跡土器(11)



写真77 第14号住居跡土器(12)



写真78 第14号住居跡土器(13)



写真79 第14号住居跡土器09



写真80 第14号住居跡土器19



写真81 第14号住居跡土器09



写真82 第14号住居跡土器08



写真83 第16号住居跡土器20



写真84 第16号住居跡土器22



写真85 第16号住居跡土器23



写真86 第16号住居跡土器24



写真87 第16号住居跡土器⑩



写真28 第17号住居跡土器⑦



写真89 第17号住居跡土器⑧



写真90 第17号住居跡土器⑨



写真91 第17号住居跡土器⑩



写真92 第17号住居跡土器⑪



写真93 第17号住居跡土器⑫



写真94 第19号住居跡土器⑬



写真95 第19号住居跡土器③



写真96 第21号住居跡土器④



写真97 第23号住居跡土器⑤



写真98 第24号住居跡土器⑥



写真99 第25号住居跡土器⑦



写真100 第25号住居跡土器⑧



写真101 第26号住居跡土器⑨



写真102 第27号住居跡土器⑩

写真図版16



写真103 第29号居住跡土器(4)



写真104 第35号居住跡土器(5)



写真105 第35号居住跡土器(6)



写真106 第51号居住跡土器(6)



写真107 第36号居住跡土器(6)



写真108 小窓穴113土器(6)

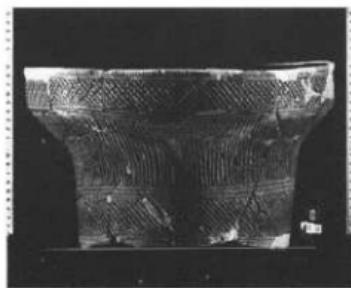


写真109 小窓穴139土器(6)



写真110 遺構外土器(6)



写真111～113 第4号住居跡石器(1・4・6)



写真114 第12号住居跡石器(7)
写真115 第15号住居跡石器(3)



写真116 第25号住居跡石器(5)



写真117 第4号住居跡石器(6)

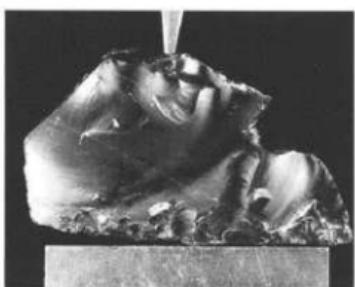


写真118 第24号住居跡石器(8)



写真119 第11号住居跡石核(9)



写真120 第24号住居跡石器(10)



写真121 第19号住居跡石器(8)

写真図版18



写真122 第36号住居跡石器⑫



写真123 第12号住居跡石器⑬



写真124 第19号住居跡石器⑭



写真125 第25号住居跡石器⑯



写真126 第14号住居跡石器⑮



写真127 第36号住居跡石器⑰



写真128 第18号住居跡石器⑲



写真129 第36号住居跡石器⑳

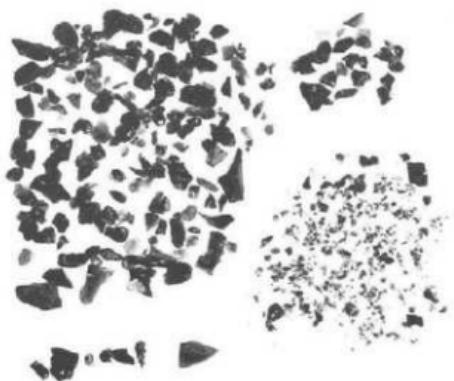


写真130 第4号住居跡黒曜石片



写真131 第16号住居跡石器 (36・48他)



写真132 第17号住居跡 (37・49・50他)

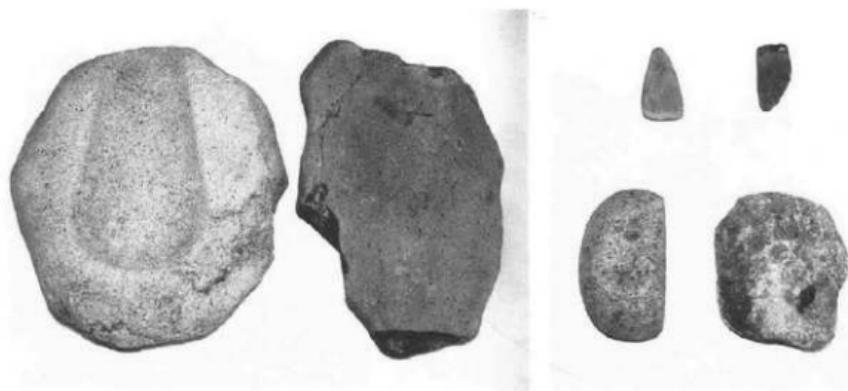


写真133 第17号住居跡石器 (56・57)

写真134 第18・21号住居跡石器
(38・39他)

写真図版20



写真135 第19号住居跡石器（40・51他）

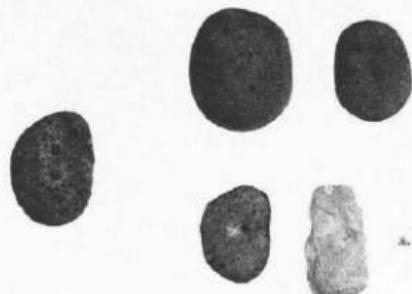


写真136 第24・25号住居跡石器（53・54他）



写真137 小型穴24・25・32・48・49・78石器（55他）



写真138 遺構外石器（14他）



写真139 清水遺跡発掘調査団（西部地区にて）



写真140 清水遺跡発掘調査団（払沢地区にて）



写真141 第8号住居跡出土土器



写真142 第42号住居跡出土土器



写真143 第43号住居跡出土鉄匙



写真144 第45号住居跡出土土器



写真145 第47号住居跡出土土器

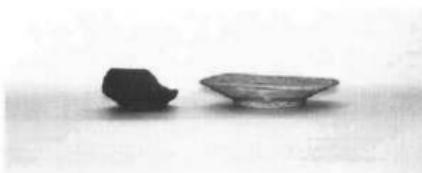


写真146 第48号住居跡出土土器



写真147 第49号住居跡出土土器



写真148 第54号住居跡出土土器



写真149 小堅穴73出土土器

報告書抄録

ふりがな	しみずいせき						
書名	清水遺跡						
副書名	平成8年度県営は場整備事業原村西部地区及び県営担い手育成基盤整備事業払沢地区に先立つ緊急発掘調査						
巻次							
シリーズ名	原村の埋蔵文化財						
シリーズ番号	43						
編著者名	澤谷昌英 石川美樹						
編集機関	原村教育委員会						
所在地	〒391-01 長野県諏訪郡原村12080				TEL 0266-79-2111		
発行年月日	西暦 1997年03月						
所取遺跡 名	所取遺跡 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度分秒	東經 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
清水遺跡	長野県諏訪郡 原村	3637	22 57分 41秒	35度 12分 41秒	19960725 ～ 19961227	14.489	平成8年度県 営は場整備事 業原村西部地 区及び県営担 い手育成基盤 整備事業払沢 地区に先立つ
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
清水遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	縄文時代 住居跡 34軒 小窓穴124基 平安時代 住居跡 18軒 小窓穴 24基 その他・時代不明 小窓穴 18基	石器・石製品・土器 整備箱40箱 平安時代 土師器・灰釉陶器 ・鉄製品 須恵器・黒色土器 整理箱10箱	遺跡の量感が 3ヵ所に分布 することが判 明した。		

原村の埋蔵文化財43

清 水 遺 跡

平成8年度県営ば場整備事業原村西部
地区及び県営担い手育成基盤整備事業
払沢地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成9年3月

発 行 原 村 教 育 委 員 会
〒391-0192 長野県諏訪郡原村
TEL 0266-79-2111

印 刷 もえぎ企画書籍
〒394-0043 岡谷市御倉町2-21
TEL 0266-22-4892

